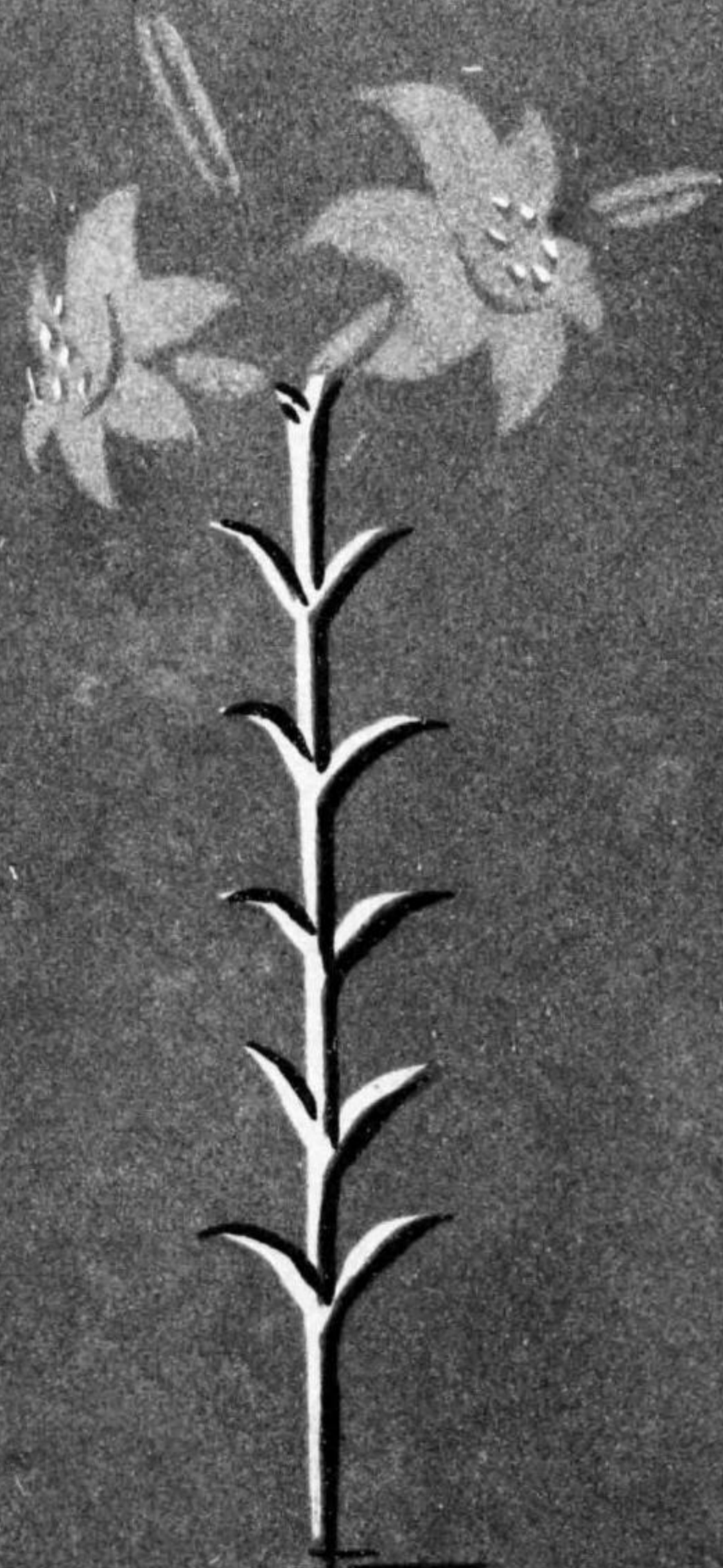


エンリカフオンハンデル=マツェッティ作

リタの手紙

(5)



プリカ譯



始



特211
398



Ritas Briefe
von
Enrica von Handel-Mazzetti

エ
ン
リ
カ
・
フ
ォ
ン
・
ハ
ン
デ
ル
・
マ
ツ
ェ
ッ
テ
イ
原
作
ブ
ル
ノ
・
プ
リ
カ
譯

リ
タ
の
手
紙

母と子之友社發行





を鹽酸硫に弟の佐少スリーサ故てに屋樂後幕終「盜群」
 (照參頁七四一) タリたれらけつげ投

Imprimi potest.
 Tajimi, die 1. m. Novembris 1937.
 Th. Gabriel,
 Sup. Reg.

Nihil obstat.
 Nagoya, die 4. m. Novembris 1937.
 P. Herrmann,
 L. C.

Imprimatur.
 Nagoya, die 5. m. Novembris 1937.
 Jos. Reiners,
 Praefectus Apostolicus
 de Nagoya.

Autorisierte japanische Uebersetzung von "Ritas Briefe" von Enrica von Handel-Mazzetti, herausgegeben von der Verlagsgesellschaft Hausen, Saarlouis.

サールルイ市ハウゼン發行のエンリカ・フォン・ハンデル=マツエッテイ著「リタの手紙」を日本語に翻譯することを承認す。

(表紙 田中美代子氏筆)



紙 手 の タ リ

ハンス・サーリス エルンスト・サーリス少佐の弟、兄の死をリタの悪意と誤解してリタに復讐せんとする男
オブライト師 フェルデス保養地の主任司祭
ラップ博士 オブライト師の輔任司祭
ツァイス博士 フェルデス保養地の客、キルシュナー家の知人
フアイラー博士 家の知人
フオン・テリー 夫妻、俳優夫妻、フェルデス保養地の客
フランツ ナー家の知人
フランツ陛下 (一八三〇年—一九一六年)オーストリアの君主
エリザベト 皇后、フランツ皇帝妃
ヒルシュマン ウィン市のユデア人、キルシュナー家の知人
ジョーグムンド・ヒルシュマン ヒルシュマン家の息子達
モーリッツ・ヒルシュマン で、リタの崇拜者
マラーヒア デス家、ウィン市のユデア人、キルシュナー家の知人
マラーヒア デス
アスバジヤ・マラーヒア デス
コスネイ・マラーヒア デス
 マラーヒアデス家の子達
 リタの友達

シレジンガ ウィン市のユデア人、キルシュナー家の知人
バジリア・チアンテイ アスパジヤ・マラーヒアデスの従妹、リタの友達
カロドニデス バジリア・チアンテイの婚約者、ベルグラード市の富裕な商人
ツワルテル リタの従兄弟で、僱傭者
ツェンケル ウィン市の一教會の司祭、リタの聴罪司祭
イブラッセル 教授、信心深いリタのフランス語の先生
イダ・ルンサ シンガー夫人の妹、リタの友達
本篇に最も多く名が出る聖人
聖ヨゼフ・ベネディクト・ラブレ フランスの十八世紀の聖人、イタリアなどの聖地を巡り、苦しい犠牲の生活を送った高徳者、リタの私淑してゐる聖人
其の他
メリー・ウアルド 十七世紀の英國の修道女、イングリッシュ・ノブ修道會の創立者

紙手のタリ

主要人物

リタ(マルザリ) キルシュナー ウィン市の銀行家の娘、マリア平和學院にて教育せられ、其の後引續き其の信仰と祈禱とによつて強制的政略結婚と闘ひ、遂に死す

ウイヘルム・キルシュナー リタの父

エリーゼ・キルシュナー リタの母

リタの祖父 プリン市の實業家、社會事業に貢獻し、華族に列せらる

アルミン・フォン・ローレンセン 内閣書記官、無信仰な放蕩兒、リタは嫌ふが、母が選んだリタの結婚候補

エドワード・フォン・ローレンセン 宮中顧問官、アルミンの父

レブランド・メール (マティルデ) マリア平和學院の校長で、童貞なる修道院長、リタの唯一の同情者

マザー・クララ
マザー・オグステイネ
マザー・シヤロテ
マザー・ベルタ
マザー・ローザ
マザー・チエリネ
シスター・マリエ
シスター・アロイジア
ウイケンゲルマイヤ博士 學院の修道女

マリア平和學院の修道女にして先生達

フリーデル リタの家の門番の息子、リタの幼友達で、リタに失戀して自殺する

エーリッヒ・シンガー ユデア人の實業家

イソルデ・シンガー エーリッヒの妻、キルシュナー家の知人

エルンスト・サーリス 海軍少佐、リタを愛し、保護した事に依つてローレンセンと決闘して斃る

サーリス大將 エルンスト・サーリス少佐の父

サーリス夫人 サーリス大將の妻

リタの手紙

第五部

— 殉教せるキリストの花嫁 —

紙手のタリ

主要人物

リタ(マルガリ) キルシュナー ウィン市の銀行家の娘、マリア平和學院にて教育せられ、其の後引續き其の信仰と祈禱とによつて強制的政略結婚と闘ひ、遂に死す

ウイルヘルム・キルシュナー リタの父

エリーゼ・キルシュナー リタの母

リタの祖父 プリン市の實業家、社會事業に貢献し、華族に列せらる

アルミン・フォン・ローレンセン 内閣書記官、無信仰な放蕩兒、リタは嫌ふが、母が選んだリタの結婚候補

エドワード・フォン・ローレンセン 宮中顧問官、アルミンの父

レブランド・メール (マティルデ) マリア平和學院の校長で、童貞なる修道院長、リタの唯一の同情者

マザー・クララ
マザー・オグステイネ
マザー・シヤロテ
マザー・ベルタ
マザー・チェリネ
シスター・マリエ
シスター・アロイジア } 學院の修道女
ウインケルマイヤ博士 } マリア平和學院の公教要理の先生
フリーデル リタの家の門番の息子、リタの幼友達で、リタに失戀して自殺する
エーリッヒ・シンガー ユデア人の實業家
イソルデ・シンガー エーリッヒの妻、キルシュナー家の知人
エルンスト・サーリス 海軍少佐、リタを愛し、保護した事に依つてローレンセンと決闘して斃る
サーリス大將 エルンスト・サーリス少佐の父
サーリス夫人 サーリス大將の妻

マリア平和學院の修道女にして先生達

リタの手紙

第五部

— 殉教せるキリストの花嫁 —

母様の読み耽ける用箋の面に晴やかな朝の陽射がをどつてゐるのでした。

「本當に宜しうございました。以前のやうにパパは優しくして下さり、今度こそあの悪人も私に近寄れないでございませうから。このやうな嬉しい事はございません！でも、可哀さうなリタには悦ぶのは何時も早過ぎるのでございます。慰の直ぐ後から二倍もの苦しみが附随して参るのです。これは確定つてをります。この二日間パパの拒絶で全然彼は姿を現しませんでした。おゝ、その日、憎らしい三日目よ、その朝税務署からと思ひますが、速達の召喚状がパパの處へ届きましたのです。それと相前後して銀行の支配人が駈つけ、検査員が参りましたからと出社を促しに飛んで來ました。パパは卒中をお起しになりましたやうな眞赤なお顔で、罵倒とも呪詛ともつかない、斯程に酷い言葉を今まで聴きましたことがございませんでした。どんな事件か私達には無言でパパはお出掛になりました。私がママにお訊ね致しますと、「脱税さね、今に莫大な罰金だよ、御蔭で私達も莫迦をみるのさ。」と仰言りながらお愠り出しになり、いきなり嘲笑なさるやうに、「お前に

綺麗な御本をお贈りなさつただけなのに、立派な方をあゝして家から閉め出し、それで自分分はと云へば盗人のくせに。」

私はママのお言葉の意圖がよく分ります。パパがローレンセンを排斥なさいましたので、憤激していらつしやるです。パパを私は辯護致しまして、「ママ、盗ではございませんわ、悪く申しましたが不誠實と云ふ程度でございますわ。」すると、ママは叩き落すやうに「お黙り！不誠實だつて、何がお前に分るものかね？」——私にだつて、おゝ、よく分ります。

この日は忘れられません。お午頃銀行からお戻りのパパは、何も召上らず、絶えず一點をお擬視めになり乍ら、大聲でお勘定をなさり、甚くお罵りになるかと思へば、呪ふやうに「あの下司下郎奴、何だつて、僕は、僕の金を奴等の腹に投込まねばならないのだ、彼奴等が僕に何一つ恵んだことがあるか？僕の金は、僕の金だ！」とお叫び返しになります。

そして尙、大藏省になど罰金を拂ふものか、莫迦らしい、何が収益税だと呶鳴つてやる

ぞ、などと仰言いました。すると、側からママは、「そこで、貴方の所有物は根こそぎ差押を喰ふ譯ですね、いゝこと、いゝこと、結構なことですよ。」——「さうとも、財産は共有だからな。有り難いことさ！——差當りお前の化粧品、髪などを押へて貰ふことにする。僕自身で、このお前の寶物の處へ案内することにしよう。」

私は不圖思ひ付いて、「パパ、私のお誕生日に頂きました私の貯金帳を御使ひ下さい。」處が、その爲御つてパパの怒に油を注いで了ひ「ようし！あの泥坊共は僕の娘の小使錢までも剝取らうと云ふのだな、詐欺師共奴、くたばつて了へ。」パパの怒號していらつしやるところへ婢やが速達を持って参りました！筆蹟をみて私ははつとして了ひました——ローレンセンからなのでございます。ママもそれとお氣附の御様子でした。そして唳しかつたそのお顔は急變して、何事かを豫期なさるかやうにお頬笑みになり——それに引換へ私は戦き慄へてをりました！その儘、パパはお隣のお部屋にお入りになり、永くお戻りになりませんでした。然し、再びお現れになりました時の御様子は前と一變して御顔は明る晴やかでした。怪しみ乍らも私は何も考へられませず、たゞ恐しい豫感に埋

れてをりました——パパは「一件がこのやうに早く方々に擴つたとは全く感心の至だ。」
私は勇氣を揮ひ起してパパにお訊ね致しました。「誰方からでございますの、そのお手紙
は？」——「眞實の友達からだ。」ママは勝ち誇れる如き笑をお泛べになり、パパはそのま
ま帽子とステッキとお取りになつて外出なさいました。パパはそれからすつとお歸りに
ならず、夕方漸くお戻りでしたが、採手をなさりながら喜色満面と云ふ御様子でございま
した。ママのお顔は活き活きと輝いてをりました。パパは強ひてママに無頓著な御様子
に見えました。私の不安は頂點に達し、心の裡に「用心しなくては。今頃彼は途中まで
來てゐる、門前に立つてゐる、警戒しなくては。」と云ふ聲が起りました。パパは「リタチ
やん、フォン・ローレンセンはお訛をしたよ。ゴエーテの御本は婚約後差上げるべきだつ
たと云ふのだ——それでこそ彼は紳士だ、だから、僕は大変嬉しいよ。」私は心臓の鼓動
も止る思で、「パパ、パパは彼とお話になりましたの？」——パパは優しい聲で、珍しい眼眸を
以て「速達で喫茶店に僕を招いたから出向いたのさ。そして稅務署の事件に就いて彼は僕
に尋ねたのだ。斯かる場合にこそ眞實の友達は現れるものだよ。ローレンセンは大藏大臣

の家族と近附があるので、晩までに僕の爲に大臣に會つてくれると言ふのだよ。」もうママ
は夢中で「お、あの立派な人格者、あの方に知己を得てゐた幸が今度こそお解りにな
つたでせう。」——パパは尙附加へて「彼は稅務署が僅數千圓のことに斯程に騒ぎ立てるとは怪
しからん奴だ、こればかりの金が何の足しになると言ふのだ。」——「さうです。御尤もで
すわ。」と私は申しましたが、私の心は塞つて了ひました。パパはこの僅數千圓の罰金
の代償に、私をあゝ恐ろしい男に引渡さうとなさるのです。お、可哀さうなパパ。お金
がパパには神様です。死の曉にお金でどうなさる思召でせうか？
夕御飯の後に、ピアノに倚つて、私は大好きな哀しい歌曲を弾いてをりました——そ
の折、彼は現れました。陰險な、冷酷な表情に氣味悪い薄笑を含んで歩を運んで参りまし
たのを、ママとパパとはいとも親切にお迎へになりました。最初パパは驚いておいでし
た——斡旋の勞をとつた彼が——その報酬を催促に早くも來たとお思ひになつたのかも知
りません。その報酬とは、お、私は前後二時間餘彼の側にをりまして、其のお相手を
させられましたのです。その間パパは書齋で新しい決算報告をタイプライターで作つてい

らつしやいましたのでした。ママは屢々顔をお出しになつて意味あり氣な薄笑をお洩しになつてはお引込みになるのです。これは私にとつて、何とも申せません程苦しいこととございました。

彼はその時このやうな風に申しました。巧に自己の過失を匿さうとして「ゴエーテの本を差上げましたことを御宥し下さい。然し、社會の眞實を理解なさるには、未だ餘りに幼稚でいらつしやいましたのです。」私は冷然に「結構ですとも、でも、それに依つて貴方の宗教に對する見解が良く分りましたわ。ゴエーテの詩は私達の宗教を嘲弄してをります。然し、そのゴエーテでさへ年と共に轉向してをります。」

すると、ローレンセンは「私がお父様の爲に大藏大臣に會つて、今回の嫌らしい事件を内済に致しましたことを御存じですか？」と尋ねますので、私は「貴方がお節介にもお執成下さいませなければ、罰金を仕拂ひますまででございますわ。」これは妥當な返事ではございませんでしたせうが、私は彼と大臣との交渉内容を略察知出来ましたので……

すると、彼は話頭を更へて、深い感慨をひゞかせつゝ「リタさん、貴女の美しい眸は幼い頃歿りました私の妹を想ひ出させ、貴女の御髪は私の母の髪そのまゝです。」と申しまして、私に毛髪細工が好きですかと尋ね、彼のお母様の髪で作つた綺麗な飾がある、などと語りました。私はそれを聾のやうに聞きながし、心の裡に「貴方は宛で嘘から生れたやうな人です。貴方のお話は悉く出鱈目です。貴方が何と仰言らうとも私を動かすことはできません。假令お母様の髪細工を持つていらつしやいまして、貴方はそれを髪屋でお求めなされたのでせう。」——おゝ、レブランド・メール、私は斯程の悪者になり果てました。卒業致しました當時、ママは「どんなな乞食にも恵んぢや駄目だよ、喰はせ者だからね。」とお訓戒になりましたので、私は「お頑迷いことですか」と思ひましたが、今の私は恰度それでございます、でも、哀な乞食にはなく、あの偽り人、殺人犯に對してでございます。彼こそサーリスさんを殺害し、私を吾が靈魂の淨配より掠奪しようとしてゐるのです。

レブランド・メール、貴女は御手紙の終に慎み深く仰言つてゐます。「若し貴女に聖召が

あれば、少なくとも一、二年の間世間で色々の困難に出遇つても變らずに聖召を熱望してゐる筈です。」私はこの御言葉によつて申し難い程の悦に躍つてをります。貴女は「若し……」と假定をなさいましたが、私は絶対に確信してをります。でも、二年とありますので、大層悲しうございます。お、もつと、もつと少なくて下さいませ！ せめて一年にして下さいませ。私がどれ程で、どれ程激しく闘はねばなりませんか、そこに思を至して下さいませ。貴女と聖ラブレとツェンケル神父様との他に、直接の助力者は私にはございません——私の、私のレブランド・メール、私の愛すべき母様、そのやうに永い事私を待たせないで下さいませ。でも、貴女ではなく、天主様の思召でございます。然し、「待てば待つ程嬉しさは大きく且深まる。」とマザー・チェリネは幾度か仰言いました。然しながら、待つ間に聖召を失ふ程に、いゝえ、聖召を強制的に放棄さすべく、苦しめられ、惑亂されましたなら？ パパは又ひどくローレンセンを最負になさいますので、私は空しく歡び、聖なる友に感謝致しましたのも空でございました。この先どうなりますことか、測り知れない霧の中にをるやうでございます。明後日彼は晩餐に参

ります。私は彼が参ります度に、あの恐しい質問を出しはしますまいかと戦いてをります——でも、早晚其の時の來ますことを、その悪意を潜めてをります眼に感じられます。容易と自己をパパの重要な位置に据ゑました彼の此の怖しい策略——パパはゴエーテの御本を將來の爲にとお藏ひになりましたが、その際ママは、私を氣狂にする他の御本も取上げ、取上げるばかりでなく、破らねばならないと、お皮肉りになりました。さう言つて私を甚く動搖おさせになりましたが、私は靜に心を押へて「愛すべきママ、不可ませんものなら、どの御本もお取上げ下さい。よい御本の、その美しい感銘は何時までも心に深く刻まれてをりますもの。」

明後日の晩、彼は私の兩親から招待されてゐるのでございます。一萬圓程の罰金を出さずに済みましたので、パパは上機嫌でいらつしやいます。

でも、その爲に私は、一萬五千圓の貯金帳を使つて頂いた方がどれ程倅でございますか。けれど、それは神様の思召ではございませんでした。私はもつと、もつと寂寥と悲愁との瀬に浸されなければならぬのでございます。

可哀さうな私でございます。私は幾度もカレンダーを手に取り、あの厭らしい謝肉祭は未だ終になりませんかしらとしらべるのでございます。お、二月十五日！この日——そして枝の主日は三月二十六日でございます。

然し、今頃は去年の通りでございます。學院は踊のお稽古でございますか？あのわざとらしくお跳ねになる先生は、悪戯坊主の私達は、先生を随分おからかひ致しました——學院の踊のお稽古は本當にきれいでございました。桃色と青とのヴェールをかざしてお遊戯はどんなにか美しかつたことでございます。互に寄つては引き、そして舞ひ交すのでした！それと比べますと、社交ダンスなどちつとも美しくはございません。

私は踊りました夜は、いつも損を致しましたやうな気がするのでございます。

レブランド・メール、恐しい、口にさへ致したくない、でも、その名前を申さずにをれませんか時は悪感に胸のむかつく彼は又踊にかけましては相當なのでございます。でございますから、他の方が彼にお相手を申込んで下さると私はほつと致すのです。律動する踊は私も好きでございますとこの前申し上げました。然し、彼等とは——絶対に！断

じて！なにかも怖いのでございます！私を見詰めるその眼は、冷くて物凄いと稲妻のやうに閃き、その手は見るも氣味悪いのでございます。私は繰返し、繰返し「悪魔が残忍なことを謀み、人間の姿で現れましたなら彼のやうな相貌でございませう——」と言ひ切れます。

隣のお部屋にママがいらつしやいますから、これでお終末に致します！早く！貴女のお手に接吻して、もつと——

リ
ク

修院長様の扉、白い廣間に通じる扉には忙しい童貞様等の衣摺の音がたち、早起の童貞様はその廣間を掃除にかゝつたのです——さしのぼる朝の清純な光は美しく母様のお部屋に灑ぎ、隅々から夜の影を追立てるとき、圓蓋聖堂からは神韻な鐘の聲々が早ミサに招いてゐるのでした。

毎週きまつて、悲しく傷付いた小鳥のやうに届いた繪葉書には、御受難の繪、御受難の

花が描いてあるのです。この花はリタの清い額に、純潔の胸に情慾の花を押し付けようとした、その瞬間の花だったのでした。

『謝肉祭の月曜日』

レブランド・メール、一事、このたつた一事の願がございます。直ぐ、あるひは御復活の時に學院からウィンに誰方かお越しではございませんでせうか？ レブランド・メール、この事は御存じでございませうか、いゝえ、貴女にお解りの筈はございませぬ。私は今度こそ耐へられさうもございませぬ。この十字架を擔ひきれませうか、どうした擔ひ方を致しましたら宜しうございませうか、私には見當が付きませぬ。昨日彼はお家の人人にはではなく、私箇人に逢ひに参りましたのです。親達の面前で彼に會ひ、それを彼に拒否させませんでしたのがせめてもの仕合でございました。これは感謝致すべきでございませうか？ 彼になど一度だつて感謝致すものですか！ ——おゝ、然し、あのお氣の毒な顧問官閣下！ あの方が重ねて私にお手紙を下さるなどとお考になれますか？ と

ころが、そのお手紙がございますのです。これでございます。どうぞ御覽下さいませ！ 私には御手紙を書きます爲にさへ充分の時間が無いのでございます。間断なくママの聲が隣室にひびいてをります。でも、今はお客様なのです。レブランド・メール、私の間断でない事をお證し下さり、私に得心させて下さいませ。ママが私をお叱りになり、優しい言葉を交して下さらないのは、レブランド・メール、致方ないと思つてをります。この責任は私も分擔すべきことを良く承知致してをります。ママは、永い、永い間優しい接吻を私になさつたことはございませぬ。でも、私はこの犠牲を忍びます。その上ママは決して——然し、貴女は屹度私の態度は正しいとお書き下さることと思ひます。あの愁むべきお年寄の方がどれ程苦しんでいらつしやいまして、私とその原因、過失ではないと安心させて下さいませ。このお手紙は私の小さい心を貫きました。顧問官閣下は「貴女の愛すべき御心に、いと尊く在す總ての御者にかけて懇願致します。」とお記しになつてゐます——さやうですなら、イエズス様と御母なる聖マリア様とに誓つて、私にお願ひなさつていらつしやるわけでございます。

學院からお一人も、お一人さへも御出府なさらないのでせうか。お、レベランド・メル、私は獨りぼちで困り果ててをります。學院を出ましてから、赴きましたフェルデスに最初の悲しみが起り、不幸に見舞われましたが、然し、それは今程ではございませんでした。

謝肉祭の日曜日の晩、私の處は音楽の夕でございました。その爲にパパは數人の女流歌手と喫茶店にてお近附になつた小歌劇のテノール歌手とお招きになりましたのです。その他作曲家のアスパジャ・マールヒアデスさんはその夕の爲にハイネの詩にわざわざ作曲なさいましたのでした。そして來賓の中からも心得のある方に唱つて頂いたのです。私はアスパジャさんに伴奏をお頼まれ致しましたので、お稽古を致さなければなりません。そこで、ママは私にも歌を唱ふやうに仰言いましたので、私はグノーのアヴェ・マリアをお稽古致しました。お、レベランド・メル、彼の目の前で私がどのやうな氣持で歌を唱ひましたか御想像なさることをごさいます。

又、ママは部屋部屋をお花で美しく裝飾おさせになりましたが、怖の爲に私はそれを

楽しむ暇もございませんでした。その朝御聖堂へ参ることができましたのですが、レベランド・メル、誰も彼も私を虐めます。フリーデルは門前で私を遮り、無作法にも——本當に失禮な彼でございます。眼を剥きながら「信心家のやうな風をなさつて、實際はあゝして享樂に溺れてゐらつしやるぢやありませんか、その證據に今晚又何かをおやりになるのでせう、おやりになるのは御勝手ですが、その間に善良な貧乏人は餓死してゐるのですよ。」これは眞實ではございませんでせうか？ でも、私が享樂を欲してゐる等とは虚言でございます——フリーデル、私が溺れてゐますつて——すると、彼も私の氣持が諒解りましたのでせうか、詫びまして、「それはどうも濟みませんでした。」(彼は社會主義に染りましてから斯程に卑しい言葉を使ひ、そして甚く人を呪詛することを憶えましたのです)そして彼は私の手を掴み、離さうと致しませんでした。

私はイエズス會の御聖堂で御聖體を拜領致しました。告解致しましたのは金曜日でございますが、ツェンケル神父様は幼子をお愛しみになるイエズス様のやうに優しく、御親切でございますました。イエズス様は私の心にお入りになり、慰とお恵とで和やかに充

して下さいました——けれども、その夜は、おゝ、レブランド・メール。

私は手紙を書くのを此處で一旦中止させられて了ひましたのです。

火曜日。

私は夢我夢中で書いてをります。手が此のやうに顫へてをりますのを御覽下さい。では、日曜日のことを申し上げませう。「彼は欲するところはあくまでも成遂げるのです。」と仰言いました彼のお父様のお言葉は事實でございました。

總ての部屋部屋は華やかに照り輝き、私も嫌らしく飾り立てさせられましたが、あの櫛だけはつけませんでした。著けますものですか！「お前がそれをつけないと云ふのなら『呪はれた文匣』の手紙を全部とつてやるから。」とママに私は威嚇されましたが、然し、私は盛装させられましたので心苦しさと悲しみとに御部屋にをりましたのです。其の時、婢やが一通の封書を持つて参りました。レブランド・メール、それはあのお氣の毒な顧問官閣下からののです！私はそれを讀み、泣かされました。貴女もこのお手紙を御覽になつてあの哀な父君の御苦痛をマリア様におさゝげ下さいませ。でも、私をイエ

ズ様から引離さうとなさる方は嫌ひでございます。よつてたかつて人々が私の心臓を引裂かうとも、リタの心臓の上には聖女シャンタルのやうにイエズス様の聖名は、消えない永遠の烙印として録されてあるのでございます！

廊下にまた足音がして、二、三人の若い童貞様は御主に於いて心樂しく、靜な微笑を交しつゝ互に戯言を言つてゐるのでした——修院長様は全身に疼く苦痛に我を忘れ、王冠と紋章とのある用箋をとり上げたのです。「主よ、我等を、我等の力以上に試み給はされ！主よ、何故にかくも哀しく、甘美なる子を試み給ふや？」

『敬愛すべきお嬢様！』

貴女にお逢ひしてより、早くも一月以上経過してをります。さやう、クリスマスの頃でした。その際、私は貴女に息子の幼年時代の寫眞をお納め願ひました。その後、私のアルミンは數度、これは私の獨り合點かは存じませぬが、貴女の御承諾を頂いて、貴女の

もとにお伺ひしてをります。愛すべきお嬢様、わが子を愛して止まぬ年寄の親から重ねて再び御願ひ致します。何卒お聴き届け下さいませ。私の獨見によりますと、貴女は理想家で、男性を實際よりも甚だ高く御想像のやうに拜察致されます。多かれ、少なかれ、男性の利己的で打算的で、それに情に乏しい缺點は如何ともなし難い處です。

私の息子は世間一般と對比して、決して劣つてはゐるない筈です。假令彼に男性通有の短所がありましても、天才的智能をもつて生涯の如何なる危機に於いても勇氣をもつて、大きな權勢の前にも信念をもつてあくまでもその目的の勝利を計るでせう。以前にも申しました通り、息子の幼年時代は實に模範的でした。母親が早く世を去つてをりますこと故貴女の息子への御非難は當然弱い父である私が負ふべきであります。それにしましてもお嬢様、クリスマスにお逢ひしました際にも申しました通り、たをやかな貴女の掌に、息子と私達との運命は載せられてゐるのでございます。必ずや息子は、貴女にふさはしい良人として、宗教を尙び、優しく思やりのある心の持主になると存じます。早急でないにしましても、必ず漸次改ります。息子は貴女との甘美なる愛の結晶を膝にのせることが

出来ますれば、屹度よくなります。

私の人生は失敗したも同様でした。早く妻を失ひ、今亦榮進の扉は閉され、奸惡な羨望者の爲に讒言されて餘儀なくその地位を去つたのでした——私は自分に殆ど與へられなかつた財寶は、悉く私の息子、私の愛子の上に豊にあるものと信じ、幸に息子は期待をもつて尊敬されてをります——私は息子を家庭の團欒に於いて信心深い美しい妻の傍にみることができましたなら——私は誰方を想像してのこととせう？ 貴女をです。私の尊敬すべき愛子よ——貴女によつて私の人生のたそがれは再び照射され私は神様と運命とに感謝しつゝ疲れた體を、靜に永遠のやすらひに横たへることができ

るでせう
——
私も存じてをります。貴女の尊敬すべき御両親は息子を御招待下さいました。今日の音楽の夕に諾否の御返事の頂けますやう、お嬢様、然し、お願ひ申します、お断りになさらずに下さい！ 貴女の拒絶は、息子の伴ばかりでなく私共一家の殊にも年老いた父の最後の望を無残にも潰滅しておしまひになることなのです。天使のやうな貴女は斯程に

残酷でいらつしやるとは露思はれませんか？

何卒息子の求婚を御承諾下さい！ 私の歎願をおき、容れ下さい！ 私は貴女の愛すべき心に、總ての尊ぶべき御者に依頼んで貴女に請願致します！

深い尊敬とともに貴女の御手に接吻しつゝ

埃洪國帝室顧問官 退職宮中顧問官

エドワード・フォン・ローレンセン』

ひどい昂奮に綴られたこの手紙の、どの言葉の端にも、どの行間にも信心深い心優しいリタを云ひやうなく苦しめ、歎願にみえて強制してゐる文面を、悲しき一杯の心を以て母様は読み卒へたのです。そして次の便りに眸を急がせたのでした。

『おゝ、レブランド・メール！ このやうにも切ない心状で、あの陽氣な社交場裡に出なければなりませんでした。彼の來る事は確です！ 然も、私が承諾するものと思つて

ゐるのです！ あのお氣の毒な年老つたお方は「私の運命は——」と仰言いますが、おゝ他人の幸福を慮つて、自己を罪に墜してよいものでございませうか？ 宜しくございませんでせう。一つの嘘言で、假令地獄の者を悉く救ふことが出来ましても、その嘘言が許されませうか。ほんとにレブランド・メール、どれ程辛く、怖しい氣持でございましたことか、贅言致すまでもなく御察し願へるものと思ひます！ ——その恐しい夕にお越しの方々のこと、どのやうな歌曲が唱はれ、どのやうな曲目がございましたか、私は殆ど記憶致してをりません。私は悉く聴きましたのですが、其の一つをも意識して聴くことができませんでした。

部屋部屋には光が氾濫し、装も美々しく、金、銀、色彩の鮮やかな寶石は輝き、帽子には蒼鷺の羽根が頷くが如く見えました。私はこれを見まして故意に、動物、猿かなどが、私の氣も知らずに、此處、彼處に嬉嬉と跳ね廻つてゐるやうに感じられました。處が、彼は苦しんでゐる私を承知で、さも氣樂さうに悠々と、又は、勝ち誇つたやうな頬笑を泛べ、惡魔の假装に似た黒い服で、鈕穴には例に依つて黄色い花をつけ、揚々とした

面持なのでございました。ママは又煽動なざるやうに彼の腕を御自分の掌で撫でる如くお叩きになつたりなさるものですから、彼はすつかり齒を剝出して笑ひ出し、全く自信があるやうな態度でした。彼の様子に私は大層苦しんでをりながら、突然吹出して了つたのです。

ヒルシュマンさん達とシュレジンガさん——マールヒアデスさん——イダ・ルンサさんも、早く申せば多くのユデア人と僅なキリスト教徒達との集でございましたのです。誰方も繰返し、蒸返しお金のお話ばかりでした。お、私のパパはその中心でしたので、「可哀さうなパパ、お金が貴方の神です。貴方のリタでさへお金よりも價値がないのです。」と呟きました。レベランド・メール、そして私はクレトウケのお伽噺を思ひ出しました。「黄金の王様、陛下を私は拜みます！」然し、王様は御自分の緋袍を色上げなさるために無慈悲にもその家臣の子供の血をお流しになりましたのでした。尙又同じやうなお噺がございます。薔薇王子は薔薇姫に向つて、「貴女は私のもの、愛する私の花嫁です。」とお誓ひになりましたが、間もなく金騎士、銀騎士、鐵騎士の三人が現れ、其の中の鐵騎士

はローレンセンの如く黄色と黒との好みでした。然し、薔薇姫は三人共斥けましたので、怒つた彼等の火焰に、城諸共に姫は焼死なされたのでした。お、私も、我がイエズス様の爲に御子の花嫁として殉じることが出来ましたなら……この先どうなることとございませうか！

プログラムは終り、時間も大分進みましたのに、今度はお客様にお願ひしたのです。これはママの素晴らしい發案で、その爲二つの御褒美まで優秀な男女の爲に用意されてをりました。紅と白との薔薇の匂ふ小さい銀の花瓶でございました——そしてアスパジャ・ヒルシュマンさん達、イダ・ルンサさんと云ふ風に順々にステーチにお立ちになつたのです。程程ママの聲が一段と高く響きました。「お次はフォン・ローレンセンさん、貴方の番でございます。」彼は出来ません、聲は駄目です等と斷つてゐましたが、ママが巧妙にお勧めになりましたので、彼は承諾したのです。「私に出来さうなシューマンの歌を一つ唱ひます。伴奏はどなたに願へませうか？」ママはいきなり私の腕をお捉へになつて愛嬌たつぷりに、「私のリタちゃんに如何でせう。」と仰言つて、私の耳許に蛇のやうに「お前

が伴奏するのです—」とお囁きになりましたが、私は心の裡に「後はどうなつても、こればかりは厭でございませう。」と決意致しました。

「ママ、私 シューマンはよく弾けません。」でも、ママは早速シューマンの作曲集をお取りになりましたので、彼はそれを繰つて一つの歌を私に示して、「この優しいのなら、如何でせう、「二人の近衛兵」です。」これは戀歌ではございませぬ。でも、私は「御免下さい、私には出来ませんから。」と繰返して申しました。彼の歌に私が伴奏致しませばママはどのやうな風にきめてお了ひになりますか、私はよく知つてをりますから。然し外のお嬢様方は争つて彼に伴奏をお申出になりました。彼はヘレネ・マールヒアデスさんを選びました。レブランド・メール、貴女もこのハイネの詩は御存じでいらつしやいませう。高等小學校の二年の讀本に載つてをります。大層綺麗な曲で、それに彼は相當な咽喉を持つてをります。彼の態度には喝采をねらつてゐるやうな處がみえました。サロンは靜肅に落着きましたが、私は彼の聲がたまらなく厭で、殊にその唱ひ方は美しいと思へませんでした。觸れるやうな嫌らしい彼の眼が、激しく私に注がれますので、それを避け

續けてをりました。けれども、その次のことを今になつて思ひ出しますと、この頬を鞭打ちたい程でございませう。貴女も御存じのやうに詩は、負傷致しました近衛兵が故郷に葬つてくれるやうに、その友に願ひますのです。彼が其の章句に掛りました時私は負けて了ひました。冷い、嘲弄的な、少しの感激もない彼の聲などにはなく、又、その歌曲にでもなく、私は自分の身の不幸に打負されましたのです。死を得て、此の虐待する人々の手から放たれて靜に息むことが出来たらと、その感慨に涙しましたのです。お、レブランド・メール、さう思ひつゝ、私は泣き出してゐましたのです。手巾を噛みしめましたが、サロンに私の啜泣の聲が響きました。ママは近寄つて私の肩を軽くお打ちになりながら接吻!!! なさつたのです。彼の勝ち誇つた得々とした眼眸は申し上げやうがございませぬ。その折ママは大聲で、「フォン・ローレンセンさん、リタは貴方の獨唱に感激致しました。貴方の御希望をこの最上の瞬間に仰言つて下さいませ。」——私は愕いて涙に汚れた面をあげて、「何でございませうか。今度は私が唱ひます—」——彼の言ひたいことなど——聴きますものですか——「ヘレネさん、どうぞ私の爲に伴奏して下さいませ

んこと。」とお願ひ致しまして私はピアノの處に急ぎ、そしてグノーの「アヴェ・マリア」を唱ひました。あの悪魔は私の後にその息吹を感じる程近くに立つて、向側の鏡にその變な笑を洩してゐる顔が映つてゐました。私はこれ迄に「いぞございませんでした程に苦惱と孤獨との裡に御母の御憐と御援助とを願ひつゝ祈るやうに唱ひました。」アヴェ・マリア……」サロンは私語もなく息をのみ、終るや否や拍手が起りました、その時、すかさずローレンセンは聲を擧げたのです。

「紅い薔薇は女王様のリタさんに獻げませう。」すると、それに應へるやうに、ママは、「では白い薔薇は貴方に、リタは貴方の歌に感泣致しましたもの。」そしてママは白い薔薇を彼にお贈りになりましたので、彼はその花を釘穴に挿しました。私は紅い方を受取りましたが、アスパジャさんに差上げました、實際、アスパジャさんは一番よくお唱ひになつたのですから。でも、ママは豫め彼と共謀していらつしやつたのでせう。そして、その後の事に於いても、お二人の共謀である事が明かに悟れました。ママは私に葉巻の小匣をとつて喫煙室にお遣しになり、「すぐパパと他の方々とお見えですから、パパにはい

つものトウラプロを差上げるのですよ。そして他のお方にはレガリア・メディアがいゝでせう。」

葉巻匣からレガリア・メディアを選んでをりますと——パパではなく、又他の方でもない、彼だけが入つて参りました。私は匣を置いて出ようと致しますと、その瞬間仕切の帳は誰かによつて下されました——ママが兩方の帳留をお取外しになつたことが直感されました。始から巧に仕組まれてゐましたのです！彼は私に歩み寄つてきますので後退りながら私は葉巻の匣を突出しまして「どうぞおとり下さい。私彼處へ参りますから。」——彼は匣を押退け、私の手を掴へて引寄せました。おゝ、私は前に「神様、私をお罰し下さいませ。」と申し上げましたことがございました——本當に罰を、甚い罰でございました。でも、これは私の過失でございましたでせうか？——然し、私は誓はずにをれば宜しうございましたのに、理由もなく妄に誓つては不可ませんと、學院で教理の神父様から教りましたものを——彼が手を掴みましたので、私の全身は總毛立つて参りましたが、その上悪魔は私語くやうな聲で「お嬢さん、飢ゑ、渴く人にパンの代りに石

を、清涼劑の代りに蛇は出さずとキリスト様は仰言いました。(お、この人が口にしますと、聖い御名前も偽り者のやうに聞えます。キリスト様の仰言つた偽キリストが現れましてやうな気が致しました。)私の飢と渴とを貴女はよく見ていらつしやいますのに、些かたりとも癒しては下さらないのです。」私は聽えぬ振を致しまして、「お煙草は如何ですか? 他に誰方もお越しでないやうですから、私あちらへ参らねばなりません。」その時でした。仕切の帳の蔭から何か云ふ、いゝえ、毒蛇のしゆう、しゆうと言ふやうな音が入つて参りましたのです。そして、「おいでにならなくてよろしいさうです。お母様からです。」ママ御自身のお聲でした! 彼は恐しい力で私を掴まへてをりましたので、私はどうしても逃れられなかつたのです。「お嬢さん、數週間この方、私は貴女の判決を待ち望んで來ましたが、何時貴女はこの耐へ難い苦しみから私を救つて下さるのでせう。」(この偽り者、フェルデス以來、私が恨んでをりますことを承知でゐながら、空々しくも私の返事を待つてゐたと申すのです。)

そのとき漸く手を抜き取り、彼を逃れて喫煙卓子を楯にとつたのです。「貴方を私がど

う考へてゐるかは御存じの筈です。また事毎に私は貴方に全く好意のない事を表示して参りましたではございませんか? 貴方のお父様にもクリスマスにお見えの際此のことは明かに申し上げてございます。」私は彼を見てゐるのも嫌で、横を向きました。彼の惡魔的の顔には赫く怒が射上つて、言葉にも惡魔的な憤怒が迸つてをりました。

「私の父などは記憶さへ喪失したものです——あの時貴女は私の幼年時代の寫眞を悦んでお受取りになつたと父は話したのです。」彼はあの優しいお父様の事をこれ以上卑下し、嘲罵したいと云ふ風でした。明かにそれが看取されたのです。でも、突嗟にまた、巧妙に装うたのでした。「私はお年寄の方をお苦しめ申すことが御氣の毒でしたから、頂いて置きましたのです。お寫眞も櫛もいつでも御返し致します。」

「あの二つの品は私が夢の中に順禮となつて訪ねる(お、何と彼は夢の中で順禮致すのです!) 貴女のお部屋に置いて頂くに足りないものでしたなら、兩方共持ち歸りませう、そのやうなものなら私は焼き捨てます。同じやうに私と愛らしい貴女の心が結ばれてゐる總てを焼いて了ひ……」止めませう。もうこれ以上を書きません。莫迦らしい

事でございます。出鱈目ばかりでございますもの。それはどのやうにも御隨意に。では、私は此處に持つて参りませう。」すると、彼はまた私の手首をとらへて、動けない程きつく押へました。彼は物凄い力を持つてをります。「何ですつて!? ここにいらつしやい。そして私に返事をなさい。さあ、私の眼を御覽なさい。」彼を睨んだ私の眼からは此の男を卑下する感情が稲妻のやうに迸り出ました。彼は、「貴女はサーリス君を愛しました。が、その理由は一體何ですか。サーリス君の何處にそれ程のよい處があつたのですか。何故私をお避けになるのです?」——「違ひます。私はサーリスさんをお愛し致しました事などございません。友情としての愛はございましたけれども、その他の感情で一度もお愛し致しませんでした。」——「貴女に於いては愛情と戀愛との區別はどうなのです。それが最早お解りだとは感服致しました。」このやうなことを只話の纏穂に彼は言ひ出したのです。「婚約者同志の愛が單なる友情よりも強いのは當然でございます。そのやうなこと位は公教要理の勉強の時から解つてをります。貴方がこのやうな質問をなさいましたので、私は感服致しました。」——「貴女はサーリスさんを愛さなかつたと仰言るのなら

一體誰を愛していらつしやるのです? 貴女は確に誰かを愛していらつしやいますね。私には今確認出来ました。」そして彼は恐しい眼で私を抑へました。「仰言る通りでございます。私は一人の方を熱愛致してをります。その方は總ての徳性の花でございます。凡ゆる長所と善美とに輝き、衆に傑れ給へる高尚な特質を持つていらつしやいます。然し、此の世の御方ではございません。」と申しながら私は自然と泣き出してしまいました。あの厭らしい男は「私の拜むべき(!!) マルガリタ様、それは一體誰のことです。あのフランスの乞食ですか?」——「何と云ふ仰言り方でせう。其の方こそ、貴方や私の永遠の裁判官でいらつしやるのです。神様が私達をお憐み下さいます。此の世にお降り遊ばしました。私達の救主イエズス様のことでございます。」——彼は黙つて了りました。其の瞬間私は涙に遮られて何も見る事ができませんでしたが、室内の電氣が消されましたのを知りました。愕く間もなく、あの悪魔の厭らしい眼は私の身近に光つてをり、「私は其奴と闘つて貴女を奪取つてみせます。宜しい! ——我々男性は、他人がその財寶を齧みして拒む時程、それに執著を感じ、果敢に戦ふものです。(レベランド・メール、お

許し下さい。これは恐しい胃潰でございます！——ですから、私はこの見も知らぬ神と云ふ者から貴女を奪ふ爲に飽くまでも闘つてみせます。今貴女は私を拒否していらつしやいますが、六週間の後には貴女を私のものにする事を私は断言します。男たるものが、失望しただけでおめおめと引退つてゐるとお思ひですか。男には又色色の手段がありますよ——私は今日まで凝然と慎しく求婚して参りましたが、他に方法を持つてをります。六週間経てば貴女を必ず私の妻にしてみせますとも。」

レブランド・メール、その時私は恐しくなつて参りました。ローレンセンには地獄の加勢があるかのやうに考へられましたのです。然も、それに對して私は無爲無力のやうに覺えました。そこで、私は投げつけますやうに「他にいくらもお嬢様がいらつしやるではございませんか？——貴方は欺いて、或ひは、不正な方法で私に承諾おさせになるお心算でせうが——私は決して負けは致しません——貴方はそれで満足な結果になるとお考へになるのですか？ 若し妻が良人を卑下し、悪魔になぞらへるやうでしたら、其の營む家庭はどのやうなものとお想像なさいます？」——私の此の言葉が彼の胸に應へ

ましたらしう見えました。彼はさり氣なく薄笑にそれを紛して「悪魔も場合にとつては君子よりも愛すべきであるとか。兎に角、私は妻に自分を天使の如く認めしめ、神様のやうに拜ましむる術を心得てゐます。」お、レブランド・メール、これは全く地獄の悪魔の吐き出す胃潰の言葉でございます！——拜む！ 本當にさう申しましたのです！ 神様を拜むやうに！ 樂園にて悪魔はエワに向つて之に似ましたやうなことを申してをるでございませんか！ 私には正面から「貴方を拜むやうな女は、貴方と一緒に地獄に墜ち込むでせう。そのやうな不幸からは、どのやうに可哀さうな女でも救はるべきです。」——と、その折電氣が再び點きましたので、彼も普通の人に返りましたが、その聲は依然冷く「六週間経つたなら私はまたお邪魔に參上致しませう。」彼は卸穴からその薔薇を取つて可哀さうにも花瓣を一枚一枚ちぎつて、「今占をしましたが、彼の女は苦しみながらも私を愛す、と出ました。」——私は死のやうな恐怖に襲はれ、耐へきれずに聲を擧げて、「八週間でございます。」と叫び、もぎとるやうに仕切の帳を力一杯引きました。私は死のやうな重壓感にこれ以上一分も耐へられなかつたのでございます。帳の蔭には嘲るやうな

眼眸でママが立つていらつしやいました。「まあ、リタちゃん？」彼は、「死刑は延期になりましたよ。仕方がない、我慢させよう。」あの悪魔は自分のことを指したのですが、私にこそ死刑が延されましたのです。お、一層本當の死刑の宣告でございましたら宜しうございませぬのに。お、レブランド・メール、不可避の死と俱にイエズス様の御許に参ることを想ひますのは最上の楽しみでございませうけれども、私の上を蔽うてをります陰險さは死よりも酷いものでございます。

「どうしてまた子供のやうに恥しがるの。それを退治して上げようね。」とママは飄輕な手振で、指で取除く眞似をなさいましたが、ママのお顔とその眼とは魔物の眼のやうに鋭く光つて見えました。私はあわてて了ひ、何とお答へ致せば良いやら判らず、「仕方がございませぬもの。」と申しましたやうでございませぬ——彼は快ささうに、「私達はお伽噺の王子とお姫様とのやうに、熟考の期間を定めたのです。」——すると、ママは、「まあ、そのやうな勝手がましい事をリタは申しましたか？——それは私達が取決めることです。其の期間はどれ程でございました？」とママはお私語きになり、彼はあの悪魔的な笑を洩し

乍ら「猶豫期間は八週間です。」そして彼は私の要求通り八週間と申しましたことをさも感謝すべきであると云ふやうな、又、嘲嗤するやうな目で私を見詰めました。「八週間は私の身にとつては相當の苦痛ですが、その昔ヤコブはラケルをそれ以上（譯者註 十四年間）待つたさうですからね。間もなくパパが其處にお見えになり、後は冗談話になりました。私はその後のことは存じません。此の恐しい夕が果てますと共に、私はお部屋のソファの上に崩折れて、聖ヨゼフ・ベネディクトに向ひ、聲を擧げてお願い致した。「お、我が聖なる友よ、私は殺されます。どうぞ私をお救ひ下さいませ！」

これは酷い、これは不可ませんこと、これは恐しいことと承知致し乍ら、たゞ私は捨てられましたものやうに淋しうございましたのです。私は懸命に傳記を繰りました。聖ベネディクトが若い學生の頃、繼母から残酷に虐げられました隣家のオーストラベルトを慰めて、御聖堂に入り、「主よ、請願はくは聖旨の行はれんことを。」と主禱文を三度お誦へになつたさうでございませぬ。

レブランド・メール、勿論私も「主よ、願はくは聖旨の行はれんことを。」と誦へ、常

にさうお祈り致したいと思つてをりますが、イエズス様の代りに、私があゝの悪者のものになることは決して天主様の聖旨ではございませんことを確信致してをります。おゝ、聖なるベネディクト・ヨゼフよ、貴方も之に御同意下さるでございませう。貴方には善良な御両親がいらつしやいました。けれども、ラ・トラップ修道院に入會を御希望になりました折、我が子をいとしむお父様はそれを容易くお許しになりませんでした。そこで、貴方はお父様に「貴方が若し玄關の関にお横たはりになつてお遮りなさいましたも、私は貴方の子供ではございますが、貴方を踏み越えても行かすにはをれません。」——これはどのやうな意味なのでございませう、瞭然とは理解出来ません。然し、之を讀みますと、尊敬の念とともに私は全身のさわめくのを感じますのでございませう——ベネディクト・ヨゼフよ、私は、私の両親を踏み越えてもとまで申せないでございませう。それよりも死ぬまで踏み躪られます方を望んでをります。これは天主様への忠實を破ることにほならないでございませう。此の場合私がパパのお心を苦しめましても、不忠實になりは致しません。おゝ、私の哀むべきママは、良心をお持ちなのでせうか。私が親達の心を痛

めます時には、聖ベネディクトよ、その時、私が第四誠に背きませんやうにお計ひ下さいませ。八週間！御復活後直ぐでございませう。おゝ、どのやうな御復活を迎へます事になりませう。レブランド・メール、天折を請願つては不可ませんでせうか——ほんとに、此のお手紙をどうして出しましたら宜しうございませうか當がつきかねます。フリーデルも近頃慍つてをりまして、變でございませうから、私は怖いのでございませう。この間また私に「貴女はあの僧服黨(!!)に騙されないやうになさい。そのやうなことがあつては實際惜しいと思ひますから。」そして何とも申せません程恐しい眼で私を見据ゑ、彼は：

.....
 又誰か参りますやうです——

ブラッセイ教授の處へ参りますと……

イダ・ルンサさんがポストに……

お祈り下さい、祈つて、祈つて下さいませ。

苦しみの疼く胸に、燃える新しい陽の白光は眼に泌みるのでした。マティルデ母様はたをやかな掌を合せて顔にあてたのです。

「Jesu Sol, Sol justitiae」 「太陽なるイエズスよ、正義の太陽よ！」

あなたは悪人を懲し、善人の上に麗かに照り灑いでいらつしやいます。あなたはこの誰よりも憐むべき、潔い子を憂ひて打洗んでいらつしやいますか。

扉に優しいノックが聞えたのです。

そつと扉は開けられ、母様附のシスター・アロイジアは、靜に、つゝましやかに挨拶したのでした。

「イエズス・キリストは讚美せられよかし——」

返事がないので、シスターはそつと身を室に入れたのですが、帳はひかれ、文机に向つていらつしやる母様と整頓されたまゝの寢臺とをみて吃驚したのでした。

シスターは羞かんだ低い聲で、「最早母様は……私が遅うございましたのでせうか？」突然の言葉に初めて振向いた母様は、寢不足のやうな眼で小さいシスターを見たのでした。

「遅くはありません。昨夜私は是非とも果さなければならぬ用があつたのです。四十五分程経つたら又きて下さい。御彌撒のお迎に。」

小さいシスターは敬虔の中にも稍難するやうに、「母様、餘り御熱中遊ばして自らをお殺しになるやうなことになるは致しませんかしら——」

「何が？」母様は氣の短い處を一寸覗かせたのです——「いゝからお退りなさい——」

「イエズス・キリストは讚美せられよかし。」

御聖堂に通じる廊下には鶯の歌に似た少女の笑聲が流れてゐました。

それはエミリーの聲でした。彼の女は誰よりも早起して試験勉強をしてゐるのです。エミリーはクリスマスに入會の許可があるのでした——

それにしてもリタは——此の不倅な子は、心の底から熱望して止まない此の樂園から連

出され、心にもない婚姻を迫られ……………

母様はその不幸の底からリタに、實に良い返事で慰を與へたのでした。

「我が子よ、心ゆくまで私にお訴へなさい。私は貴女と苦しみを共にします。そして又貴女と俱に祈ります。今年の夏こそ、きつと學院に來られるでせう。七月中にマザー・ドロテアはウィンに御用がありますから、その節は貴女にお迎をお願ひ致します。また私は御両親にお手紙を認めてマザーに托します。勇氣を出して、勇氣と信頼とを……………」

今年の夏こそきつと學院に來られるでせう。さう書いたのは謝肉祭の折でした。

母様は残り少々の用筆を手に取り……………——聽罪司祭は手紙を悉く焼くやうにとのことなのです——

全部讀み終へたら焼き捨てませう。

さうは言へ、この悉くの想出は、一摘の灰燼と共に消滅させることができませうか！選ばれたものの絶えざる苦惱、それは實に貴女の責任ではなかつたか。それ故に、それは

生涯、永遠に癒されない傷口の如く貴女を苛むこととせう……………

五枚の繪葉書、どの面も御苦難のキリスト様の聖姿で、文面は言葉少なに助力を請ふ叫が生々しかつたのです。「レブランド・メール、お祈り下さい！可哀さうなりタの爲にお力添へ下さいませ！この苦しい日日、レブランド・メール、神様のお援をお祈り下さいませ！——御復活の近づきますのにおびえてをります!!」……………それからまた一つの手紙、この手紙は——三箇月前に受取つた時と同じに……………今も母様の心を凍らせるのでした。

「家鴨ホテルに於いて 一八九九年三月八日

敬愛すべきレブランド・メール、このお手紙は家からでございますから、悪く誤解なさらずに下さいませ！直き午前中に家へ戻ります。ママも御承知なのでございます。昨夜ブラッセイ教授から通知して頂いてございます。昨夜はどうしてもお家にをりますのが不安だつたのでございます。聖ラブレは「Sauve-toi」。「貴女をお護りなさい。」と私

にお話しになつたのです。レブランド・メール、聖人は明瞭に、貴女と私との間に交され
ますお話のやうに「我が娘よ、貴女は貴女をお護りなさい。」とお告げになりました。レベ
ランド・メール、御存じのやうに例の執行猶豫期間の切れまは四月十六日でございます
す。その恐しい日は目前に迫つてをります。でも、レブランド・メール、それに先だつて、
昨日、何事かが起るやうに懸念されましたのです。その不安の所以は判りません。ママが
私達の期限を縮めようとなさつた事は確でございます——レブランド・メール、私の
尊敬する母様！ 莫迦らしい事の爲にお話の前後が錯綜致しましたらお許し下さいませ。
昨夜は一睡も致してをりません。レブランド・メール、ユデア人のお友達の處、親切なイ
ダ・ルンサさんのホテルにをりましたのです。彼の女はシュレジンガさんのお家の裏向の
お部屋がお氣に入らないので、一週間前から「家鴨ホテル」にいらつしやるのです——レ
ブランド・メール、貴女も私の行動をお許し下さるかと存じます。ルンサさんは、あ
の薄倅なシンガー夫人の妹さんでございますことは御存じでございます。シンガー夫
人は今ブダベストで信者になられる御準備中の由でございます。その時にはイダさんと俱
ろ。

に参りたいと思つてをります。昨夜は少しも眠つてをりません。

かやうなわけでございます——レブランド・メール、亂れましたら本當にお許し下さい
ませ。お家に歸つてみまして、萬事好轉致しましたならもう少し附加へることに致しませ
ろ。

一昨日またパパは國際秘密結社のお祝にプレスブルヒ行をなさいましたのです。今
度はそれを明かに仰言いました。パパはそれでママの疑惑つていらつしやる愛人のことを
釋明なさつたお心算だつたのでせう。でも、ママには些かの動搖もみえませんでした。け
れども、私は——レブランド・メール、神様がこの莫迦らしい私の考をお許し下さ
いますやうに。不純な戀愛か、國際秘密結社の會合か、其のどちらがどれ程罪惡が大
きうございますか、私には判断致しかねますが、私にとりましては、どちらも同じや
うに悪いのでございます。パパがプレスブルヒ市へ御出掛になりましたら、御留守になるか
らでございます。パパの前ですと未だ彼は遠慮致してをりますけれども、ママだけでは—
—ママは彼の恰度良いお相手でございますもの。パパがお留守の時には私は萬一の事を

用心致さなければならぬのを私はよく承知致してをります。

「今度も私にはパパにお願い致しまして「どうぞ、お出掛にならないで下さい。」——私はお留守になれば起りさうな不吉な豫感と恐怖とをお打明け致しましたのです。パパ、十月にもママはパパのお留守を御利用なさいましたことを憶えていらつしやいませう。」——「リタちゃん、今度は大丈夫、安心なさい。ローレンセンは如何に私達の（私達の）これはせめてもの慰でございませう。氣に入らなくとも、體面を重んずる念を失さない限り無茶はしないよ、それにお前とは約束の期限もある事だし、ローレンセンは屹度守るよ、誓言したのぢやないか——リタちゃん、彼があれ程遠慮してゐるのが解らないかね？ 第一毎日来るやうなことはないし、來ても何時も早く歸るし、それに出来るだけお前を刺戟しまいと細心の注意をしてゐるぢやないか。」私はこみ上げて参ります涙を抑へながら、「でも、あの人はあのやうに何時も私を凝視してをりますもの。」——「どんな風に？ お前が唯さう感じるのぢやないかね？ 彼は何時も好意の眼眸で瞼めてゐるのさ。これを慍るわけにはゆかないだらう。」暗い、惨な氣持になりました私は「さうぢやございませ

ん。彼はまるで奴隷買のやうに、でなければ、窃盜者が聖爵（カリス）を狙つてゐますかのやうに私を瞼めてをります。」レブランド・メール、此のやうな例をどうして引用致しましたのでせう。宜しくございませんと存じます、私を聖爵になぞらへますやうな言ひぶりを致しまして……然し、聖爵は神様に獻げられますものでございませうし、私も——神様に獻げらるべき身ではございませぬか。處が、この例がパパのお氣に觸れましたと見え、不機嫌に私を御押退けになつて「お前は少しをかしくないかね、尤もママにもそんなところがあるが、學院の悪影響だな——儂はお前に何等強制がましいことはしない。儂は素直な、快活な娘を欲してゐる。薄の穂を幽霊と見まがふやうな並外れた杞憂家などは眞平だ——自分の部屋へ行きなさい。忙しいからこれ以上邪魔をしないで。」ときつく仰言つたのです。私は自分の不徳を、愛すべき學院の過失と誤解なさらぬやうにお願い致しました。本當に私の幸福はそこにだけあり、私はそこに於いて初めて理解して頂けるのです。然し、パパは聽いて下さらず、お呟鳴りになるやうに「お黙り、從順に彼處へ行きなさい。」

私は重い心のまゝ再びパパに取寄る勇氣もなくお部屋を出ました。そしてパパは夜行でお發ちになりましたが、私には挨拶さへなさらなかつたのです。一方ママはこれ迄とは打つて變つた上機嫌におなりになりました——その日の夜も更けてから呼鈴が鋭く響きましたので、私は胸をつかれ、兎に角扉に錠を下して了ひました——翌朝、サリ——は「昨夜奥様はまた神経痛の發作がお起りになつて遅く博士をお迎へ致しましたので」と申し乍ら「僞病氣！」と言ふやうに眼をパチ／＼させました。翌朝のママは、昨夜御氣分がお悪かつたとは思へません程の御元氣で、朗かに笑つていらつしやいました。私はすつかり思ひ惑つて了ひました、お食事の際のママは特に立派な服を召して、大層お愉しさうでしたから。そして私に「今晚ハイム叔父様等がいらつしやるから、お前も良くお化粧してお置きなさい。」その時私の腦裡に閃いたものがございます。「ハイム叔父様等と御一緒に、彼も……」その日は火曜日でございました。「何時頃お見えになりますの。」——「さうね、五時半頃でせうね。」——「ママ、夜會をお繰上げになつたのですか？」——ママはどきつとなさつた眼付でお見詰めになり、「どうして？」——ママがお愕きにな

りましたので、私は安堵致しました。おゝ、レブランド・メール、ママのどのやうな表情の蔭にも必ず裏の意味のあることを貴女は御信じになれませうか。殊更ママが御親切になさる時こそ私は一番怖しいのでございます。ですから、私は別に心配はないと安心致しまして、ブラッセイ教授の所に参るお仕度にお部屋へ引返しました。然し、帽子を取り、更に鏡に向ひました時に、レブランド・メール、不圖私は、いえ、さうではない感じましたのです。何故と申しますと、私が安心致しきつて鏡の前に立ちました瞬間に、誰かが鏡にお入りになつて私にお働きかけになりましたのです。私はフリーデルが参りましたものと思ひ、「何か御用？」と訊ねました。と同時に振り返りましたが、誰も見えませんでした。ママのお聲がすつと離れたお部屋から聞えて参りました。レブランド・メール、私は俄に怖くなりました。その折、突然私の背後に當つて耳許に囁く明瞭した言葉を聞きました。

“Sauve-toi, ma fille!”——「貴女をお護りなさい、我が娘よ、」と言ふ意味でございませうか。或ひは逃げよと言ふ意味でございませうか。あの折に神様は私の偉大なる聖

友によつて私を擁護なさる思召のやうに私には思へました。その聲は流暢なフランス語のひびきでございました。レベランド・メール、私はフェルデスにて聖人にまみえました時のやうに慚しく跪き、もつと、もつと御言葉がございますかしらとお待ち致しましたが、それきり耳に致すことができませんでした——ママのお話聲はサロンに引續き聞えてをりまして、その大きなお聲はこだましてをりました。私は御稽古の御本をもつてお部屋を出しましたが、聖人の御警告が漸次大きく身内に廣がつて参りましたので、私は激しく動揺させられて了りました。

教授の處で漸く心の落著を取戻しましたが、イダさんは私よりも早く既に來ていらつしやいました。教授はフランス語の挿繪入りの公教要理をお取出しになり、私達にその繪の譯文をお課しになりました。これはなかくの難題でございました。イダさんは私よりすつと宗教用語に巧みでいらつしやいました！それは珍しい繪でございました。大罪を表しますのに鎖で岩につながれた苦悶する少女をもつてしてゐるのでございます。少女の體に蛇が匍ひ廻り、其の胸には心臓が露出し、その中に——お、恐しいことござ

います——惡魔が三又のフォークを手に胡座をかいてをるのでございます。レベランド・メール、私が説明致し始めました時、教授はそれを中斷なさり、「お嬢さん、これ迄貴女は別に大罪をお犯しにならなかつたでせう。然し、今後若し誘惑にお遭ひになりましたら、此の苦しみ、喘ぎ、哭く少女をお思ひ起しになつて、貴女御自身をお救ひなさい。(Bonne vez-vous !)

レベランド・メール、教授のお言葉に私は頓へて了りました。聖人と同じ意味の御警告ではございませんか？ 私が今大罪に直面致してをりますことを聖ベネディクトは憂慮なさつたのでございませう。そしてこの御警告をお繰返し遊ばしたのでございます！

——私はお答を取違へます程にすつかり亂れ、畏怖して参りました。然し、教授はいと優しく御親切に一々訂正して下さい、少しもお叱りになりませんでした。けれども、「Le démon aux cors (au lieu de cornes)」「角の代りに魚の目のある惡魔。」と私がお答へ致しましたので、教授はお吹出しになつて、魚の目のある惡魔、これは素敵、然し、残念乍ら惡魔には魚の目がないので、人間を罪惡の陥穽に墜す爲に自由自在に翔け廻つてゐ

ます、と仰言いました。

レブランド・メール、私はこの御勉強の間中この一事が頭に付まつて離れませんでした。即ち、今日はお家に戻らないこと、夜七時までは歸らないこと、さう致しますれば彼はあきらめて大抵は戻るでせう。大抵はと申しますのは、私自身を慰める爲で、内心は不安と恐ろしが交錯致してをりましたのです。「大抵の場合には彼は歸りませうが、今日歸りますとは限りません。」

レブランド・メール、私は曾て経験致しません程——サーリスさんの事件に際しても斯程ではございませんでした——昂奮致しましたこの日を忘れられません。

譯し終へてお答へ致しながら——實を申せば、イダさん一人のお喋りで、私は言葉をはさむことが出来ませんでした。教授は始終私を怪訝な面持でながめていらつしやいました——そして午後六時頃になつて了りました。その時、イダさんは、「もうお時間ですね。でも、この公教要理の挿繪は大層面白うございましたわ。」と仰言つてお立上りになり帽子とコートとをお取になりましたので、私も椅子を離れましたが、私はこの儘——

どうぞ、レブランド・メール、お笑ひにならないで下さい——このまゝ絞首臺に上りますかのやうな氣持でございました。不安と恐怖との爲に其處を離れ難く、教授に色々のことを質問致しまして、かう申しました方が良い文章でございませうかなどとお質ね致しましたのです。教授はその都度丁寧にお答へ下さいましたが、忙しく時計を御覽になりますので、最早お邪魔になつてゐる事が分りました。すると、教授は「お嬢さん、失禮ですが、私は午後六時半に約束があるのです。カトリック文化の夕に出席するのです。これはウィンに於いても意義ある催の一つですから、カトリックの文化人を鼓舞する爲に是非出席しなければならぬのです。」すると、イダさんは、「まあ、そのやうに面白い催が何處にございますのですか？」——レブランド・メール、しきりに苦慮してをりました私は不圖思ひ付きました。此の發意は屹度神様からでございます。私は掌を合せて、「先生、私達もお連れ下さいませ。」とお願ひ致しますと、教授は吃驚なさつて、「え!? 貴女方は入場券を御持ちですか。生憎私は一枚しか所持してゐません。」

すると、イダさんはお叫びになつて「いゝえ、でも、會場で買ふことが出来ませう。」

何處にその信心深い會がございますのですか?」——「商業俱樂部に於いてです——お嬢さん、貴女方をお連れ致すのは嬉しいのですが、然し、お家で承知なさいますか?」——イダさんは「御心配なく。私は獨立でございます。年寄の英國婦人と二人暮しでございます。その老嬢はその間に蠅を退治致してをりませうから大變結構でございます。けれども、レブランド・メール、私は嘘は申せませんし、泪ぐんだ眸で「ママは御存じありませんけれども、今晚私の嫌ひな方がみえますので、私はお家に居たくないでございます。」「教授は私を大きな眼で見詰りなつて「人を忌避なさるのは宜しくありません。」「よつて、私はもつと詳しくお打明け致さなければなりません。お、これは苦しいことでございます。其の方は私に興味をもつていらつしやる方ですが、私は大嫌ひなのでございます。」「イダさんは大聲でお吹出しになつて「私にそのやうな方が澤山ございませば宜しいのですけれどもね、私にはリタさんのやうにさつぱり喰ひ付いて参りませんのよ。」「すると、今度は教授が同情をもつて私をお贖めになり、どれ程の苦しみに私の心が浸されてをりますかとお解りになりましたやうでした。一寸思案して

らつしやいました御様子でしたが「かうしませう——私から貴女のお母様の許へ使者をやつてお知らせします、何分若いお嬢さん方のことですから。然し、二人で倅です。私が唯一人のお嬢さんを同行致すわけには参りません。一寸お待ち下さい。著換をして参りますから。」「教授が次のお部屋へお入りになつて間もなく、呼鈴が鳴りました。玄關にお出になりましたイダさんはヒルシュマンさん兄弟と俱に大喜でお部屋にお戻りになつていらつしやいました。イダさんは、ジークムンドさんが御氣に召していらつしやるのです。このお二人は御勉強の終ります頃に大抵お迎にみえるのです。お二人は私達が商業俱樂部に参りますことをお聞きになつて、御同行なさると仰言いましたので、イダさんはすつかり嬉しくなつて了はれ、奥の教授に大聲でお呼びかけになりました。」「私服が變でございますから至急著換へて参ります。」「そして私にもその儘で良いかとお尋ねになりましたけれども、私は商業俱樂部に参りさへ致しませば、少なくとも二、三時間は歸宅せず済むと思ひまして、唯それが大層嬉しうございました。」「え、イダさん、私など之で澤山ですわ。」「ジークムンドさんは入場券をお求めになる爲にヨハネ町にお走りになり、

イダさんは著換にお急ぎになり、隣室では教授も御召換でしたので、私は小さいモーリツさんと二人きり取残されましたお喋言を致してをりました。その時、私は、聖なる友より警告されました罪の危険を、この夕に依つて解消されますやうに神様にお請願ひ致しました。然し、此の會が果て了ひませば是が非でも歸らなければならぬことを考へますと、私の心は慄へ戦くのでございました。

レブランド・メール、かうして皆様をお待ち申し上げてをります間、私はマリア様の子供として「永遠に！」とお誓ひ致し、またその時の情景がありありと目の前に泛んで参りましたのです。私のこの誓を破毀せしめる者が果してをりませうか？ 私を飽くまでもマリア様の子供として護つて下さる方は誰方でございますか。それは判りません。それはさて置き、私がお家に戻りませんでしたのは確に神様の思召でございましたことを知り得ました。

入場券をお求めになつたジグムンドさんと相前後して教授がお呼びになりましたお使者が参りましたので、ブラッセイ教授にママへの御通知を書いて頂きました。レブランド・

メール、私は教授がお使者にお渡しになりましたお金を教授にお返し致したかったのでございますが、「いや、結構です。」と教授はお受取りになりませんでしたので、私は随分羞しうございました。でございますから、今後教授は私の債権者でございます。

六時半頃イダさんは馬車をお乗り著けになりました。イダさんは大層御綺麗で、特に華美やかでした。私は只感歎して了ひました!! 金糸、銀糸あらゆる色彩の絢爛たるお扮装で、そのハンド・バッグの飾にはダイヤモンドの蜘蛛がついてをりましたし、髪にお挿しになつてゐる櫛にも二つのダイヤモンドが鑲めてございました。然し、頬の紅だけは失禮乍ら残念に思ひました。イダさんは薔薇色の美しい血色でいらつしやいますのに、何故それをお隠しになるやうな御化粧をなさつたのでせう？ 然し、イダさんはみな良いお心算でなさつたのでせう。イダさんは心からジグムンドさんに好かれるやうに心掛けていらつしやるのです。「サバの女王様」と言ふジグムンドさんの讃辭に、イダさんは有頂天におなりになりました。處が、彼は私にそつと囁きました。「然し、スラムスは女王よりも綺麗でした。貴女こそスラムスです。ソロモンの愛したのはスラムスでした。」——まあ

此の莫迦らしいユデア人はいつもお世辭ばかりを仰言つて……

四人馬車を駈つて私達は商業俱樂部へ参りました。最早相當の入場者がございました。前列から四番目の列に席をみつきましたが、私達の後も若い女性で詰つてをりました。此等は教授の御説明によりますと、市民女學校の寄宿生の由でございます。引率なさつていらつしやる先生は、學院の白い廣間のマドンナに生寫しの清麗な感の方で、生徒等がマリアンネ先生とお呼びしてをりましたので、其の先生であることが解りましたのです。私達のまはりが斯う云ふ有様でしたので、此の夕は本當に美しい集でございますが、私は迎が参りはしますまいかと、絶えず氣もそどろでございます。教授はママに會場をお知らせにならなかつたので、助りましたのです。若し會場が分つてをりましたなら、ママは必ず迎をお遣しになりましたことせう。

お、レブランド・メール、會は大層素敵でございます。舞臺の背景は紅い天鵝絨にくつきりと大きな白い十字架がついてをりました。澤山の神父様方は威嚴をもつて神々しく御並びになつてをりました。一番前には、マリア様のメダイユをお著けになつた美しい、

優しさうな貴族の御婦人、それに、一人の司教様、二、三人の參議司祭及び他に三人の方でした。その中の一人の方には栗色の美しいお髷がございましたどこかイエズス様の面影が偲ばれました。そのお隣の方は綺麗な金髪で、思索的な印象のございます方でした。三番目の方は金縁の眼鏡をおかけになつた方で、白髪の混つたお髷をお貯へになり、聖ベトロのやうにみえました。教授は私達に「御存じですか。あの方等はオーストリアのカトリック文壇の三巨星です。アイヘルト氏、クラリク氏、ドマニヒ氏です。」(然し、このお名前に就いては私の記憶に誤謬がございますかも知れません。)そしてジエグムンドさん達に意味有り氣な視線をお向けになつた教授は「あちらの方達は詩句も常識もない雑報新聞を作る貴方がたとは天と地との相違です!!」

折角ブラッセイ教授の御親切によつて此の夕に参りましたのに、私達は周圍からでしやばり者扱を受けました。或人は大聲で「また、ユデア人だ! 其奴等は何處へでも潜り込んで來やがる。家に穩しく引込んでゐる。下司退治には全く手を焼かせやがる。」私は肩身が狭くて仕方がございませんでした。ユデア人の新聞に内通するスパイのやうに思

はれましたかも知れません。ユデア人のやうでなくとも、私をユデア人と人々はお思ひになつたかも知れません。

私の母様、その時の美しい幽韻な音楽のことをお話し致しませうか。お、でも私は始終追立てられてゐますかのやうな怖い氣持でございましたので、何も耳に残りませんでした。お話に致しましても、羞しくなります程、僅しか憶えてをりません。母様、そのときの私の精神状態をお察し下さいませ。私は非常に顫へてをりました。會の終は次第に近附き、恐しいお家に歸る時間が刻々に歩み寄つて参りました！

歌も、詩も立派でございましたのに、私の心は瞬時も其處にはなくて、怕いマリア・ヒルファー町への道を行きつ、戻りつしてゐたのでございました。背の高い、青いお顔の聖アロイジオにお似ましのイエズス會の神父様は、コンラディノとその友とに就いての詩を朗讀なさいました。即ち、二人がお殺されになります前に、その一人がお友達に向つて「死ぬ事もあなたさへ看護つて下されば、私にとつて死は苦痛ではなく、楽しみです。」と仰言つたのでした——レブランド・メール、その時、私は、マリア平和學院に、貴女

のいらつしやる御側に——私も貴女に看守つて戴き乍らイエズス様の御許に参れますなら——

それから喪服の御婦人が、新しい自作の小説の抜萃を朗讀なさいました。それはプロテスタント教の可愛い子供のお話で、神父様も登場なさり、修道院で此の子供をとても可愛がるのです。でも、これは數百年以前のお話なのです。一人の司教様は修士等に、可愛さの餘り無理に教會へ引入れないやうにと注意なさるのです、子供には神様の思召があるでせうからと。或時のこと、一人の修士が子供に「君が修院の生徒等と一緒に劇をしたからとて、君の屬する教會を否むわけではない。ユデア人が雨に濡れたからとて、洗禮にならな」と同じにね。」すると、會場には歡聲が擧り、拍手が湧き立ちました。處が、ジ・グムンドさんは頭を横に振つて、「哀むべき愚民だ、ユデア人は飽く迄存在すべきだ。金を搾る爲に入用でなくなつたら、嘲弄の道具に要るだらう。それにも無用だと云ふのなら、新聞を作る爲には絶對入用だ。」教授は改つた口調で「御注意なさい。今度の方は四番目の耀星、エンリカ・フォン・ハンデルⅡマツエッティ女史です。私はその家族を知つてゐ

ます。「すると、ジューグムンドさんはお嘔きになつて「成程耀星ですか、若し私達がそれを見附けなければ永久に光を出さないわけですな。」その方は私達の愛敬する皇帝陛下に就いての詩を朗讀なさいました。即ち、皇帝陛下は、皇后陛下の御兇變にお見舞はれ遊ばして、お察し申し上げますのも畏多い程の御衝撃をおうけになりましたが、叛逆者の身を憂ひ、死刑などに處さないやうにとの優詔をおくだしになつて、其の罪を許容なさいましたのです——朗讀は音楽のやうに美しく、私は非常に感動致しました。此の朗讀の間に三回の拍手が送られました。それをジューグムンドさんは「あの拍手は古くさい形の詩を賞めたのでなくて、陛下御自身に對しておくられたものです。」それは兎も角、私はフェルデスに於ける事が思ひ起されて喉が熱くなりました。ランプ神父様が「悪事にくみするよりも、悪に耐へる事にお努めなさい。」と仰言つたことも思ひ泛べました。私はまた不安になりました。ママから逃げ廻つてをりますのは悪いことではございませんか知ら？その後でまた音楽がございましてから、クレムス市のヴィヒネル教授は鈴に就いて御講演なさいました。悪戯をした小さい娘のお話はお腹が破裂する程滑稽でした。会場は抱

腹絶倒。ヒルシュマンさんも微笑していらつしやいましたが、私だけは笑ふことが出来ませんでした。その時は午後九時四十五分でございました。私にその時計の音がはつきり聴えましたのです。その響は私の心にしばし反響してをりました。このお話が終りますと、誰方も有益な集に満足してお歸りになりませうのに、哀なりタは、死刑囚が絞首臺に上りますやうな氣持で歸途につかなければなりません——終になりました。会場には拍手が溢れ、神父様方はお立ちになり、講演者等も壇からお下りになつて握手をなさつたり、成功を御祝し合ひになつていらつしやいました——ブラッセイ教授は「御覽なさい、フォン・ハンデルーマツエッティ女史を。」その方を見ました瞬間に私の心は前以上に苦しくなりました。何故かと申しますと、お二人の同じ喪服を召した大層高貴な感の御婦人が、朗讀なさつた方を美しい愛情で抱擁なさつていらつしやつたのでございます。教授は「背の高い方がお母様で、側のブロンドの方は詩人の叔母様ですが、この方は私の理想でした。」詩人は両手に一人宛お抱へになり、喜に面をお輝かせになつて、右に左に御挨拶をお送りになり乍ら御退場になりました。お、レベランド・メール、その時私はあ

の方をどれ程嫉ましく思ひましたことせう。成功や拍手の爲ではなく、また方々から投げ掛けられました讃辭の爲でもございませぬ、あの優しいお母様の溢れるばかりの愛情を見ましたからでございます。何時私のママは温い、優しい眼眸で私を愛しんで下さいますことございませうか？ 何時、何時さやうなことがございませうかさへ私には考へられませぬ。此の倅なお母様とお嬢様とはお家にお寛ぎになつて、まどかに此の美しうございしました夕に就いてお語り合ひになることございませうと、そのやうなこともでも思ひましたのでした——では、私も歸ります——何としても歸らなければならぬのでございますから——然し、お家に歸りました私は一體どうなることございませうか——ママは私をお殿きになるかも知れませぬ。

やがて會場はがらんとして了ひまして私達だけ取残されました。ジグムンドさんは此の會場がお友達となさる學生劇の場所に適當であると仰言つて、急に事務所に借入に關して尋ねに行かれました。

レブランド・メール、私はその時、どうしてあれ程の勇氣が出ましたのか今考へても

解りませぬ。私達は携帶品預所から自分のものを受取りました。ブラッセイ教授は私をお家までお送り下さるお心算でした。(ヒルシュマンさん達もお送りになると御申出になりました。)その時なのでございます。私は又突然、「貴女をお護りなさい。」とお話しかけになりました。聖人の御聲を聴きましたのです。それで、私は、愈々お家に歸つてはならないと堅く信じて、翌朝を待つことに決心致しましたのでした。その時の私の恐怖を必ずあの方々もお感じになつたことございませう。「イダさん、今晚貴女の處に宿めて頂けません？ お家に歸るのが、餘り怕うございませぬから。」とお願ひ致しました處、イダさんはお愕きになつて眼をお瞠りになり、「貴女のお家に一體何がありになるの？ 嫌な男なら今頃はもう歸つて了つたでせう。それでなければ、この夕にいらつしやつたので、ママがお怕いの？」——「ええ、さうなの。」と申しまして私は口を噤みました。ブラッセイ教授は同情の罩つた眼をもつて私をお眺めになり、イダさんに、「リタさんは困つていらつしやるのですから、どうぞ今晚宿めて上げて下さい。」然し、イダさんは氣がお進みにならないらしく逡巡つていらつしやいました。すると、ヒルシュマンさん達が是非とも自分

の家に宿つて欲しいとお申出になりましたのです。彼等はママが恰度來客用に眞鍮の立派な寢臺をお買ひになりましたからとお勸説めになり、おしまひにはそのお値段まで御披露なさいました。すると、イダさんは急に「不可ませんわ。リタさんは私の處にお宿め致します。」そこで、私はイダさんに直ぐお隣のお部屋をお取り下さるやうにお頼み致しました。幸にも私は百圓持つてをりましたから「イダさん、お部屋代は私お拂ひ致しますわ。——ヒルシュマンさん達はどうしても私達を『家鴨ホテル』までお送りになると仰言いましたが、教授が優しいお父様のやうに心を配つて下さいまして「それぢや、私達一同で夕飯を頂きませう。」——私達が静な夜の街に出ました時には講演者や會衆は歸途を急いでをりました。その折、私の心に大きな不安が擴つて參りました。お家でママはどれ程お氣遣ひになつていらつしやりはしまいかしら、そして、あの『貴女をお護りなさい。』と聽きました言葉が私の單なる錯覺に過ぎませんでしたらどう致しませう、これまで様々の苦しみで私の氣が一時狂ひましたのでしたなら？——

ジーンダさんは幾度も私の耳許に顔をお寄せになつて「スラムミスよ、御覽なさい、

人々は堵列してをりますよ。それも貴女をみる爲です。」——私は酷しく苦しんでをりましたので、人々が悄然とした絶望的な眸の私を打眺めますのも本當かも知れませんが思ひました——そして又此のやうな思が頭を駆け廻りました。「椿事でもありましたかのやうに、ママに御心配をおかけ致していゝのでせうかしら。」でも、私の居ります所を通知致しませば、明日を待たずにママは此の恐い夜中にもお迎にいらつしやるでせうし——では、あの人達の謀つてゐることはどのやうな事でございますませう。此のやうなことを考へながら私は『家鴨ホテル』の煌煌たる華麗な廣間に入りましたのです。壁間には澤山な額が掛けられ、その下にはお洒落なユデア人達が晚餐をとつてをりました。見知らぬ方が次々と寄つていらつしやつて私にお近附きになりたいやうでございました。これだけは分つてをりましたが、その他は何も憶えてをりません。それにイダさんはすつかり不機嫌に黙り込んで了はれました。何故かと申しますと、ヒルシュマンさん達は始終私ばかりを相手になさつて、お、あの方等は、文學と劇場との知識をもう少し藏つてお置きになりませば御宜しいのですが。ジーンダさんは少し改つて「リタさん、私達は最近商

業俱樂部で劇を發表する心算なのですが、その中の一役を演つて頂けませんか。練習は次の日曜日から一週間に三回、位午後からあるのですが。」とお話でございましたので、私は立所に「え、お引受致しませう。」とお答へ致しました。ローレンセンはよく午後に見えますから、お家をあげます爲にと思ひまして早速承諾致しましたのです。私は彼が大變怕いのでございます。そして脚本はシルレルの『群盜』をとのことでした。然し、レベランド・メールは私に『群盜』を読むことをお禁じになりましたのに、今度其の劇を演らうと云ふことになりましたのです。どうぞお許し下さいませ。此の劇の一役を務めまして宜しうございませうか？ 演ると申しましたが、恐しい午後にお家から逃れる爲の手段の他に意味はないのでございます。それに私は劇は何時も下手でございましたから、ジ・グムンドさん達は屹度間もなく私を他の役とお代へになりますこととせう——私はどう致しまして……

まあ、眼をお覺しになつてイダさんが呼んでいらつしやいます。また續けます。イダさんは寢臺の中で朝御飯を召上つていらつしやる處です。私にも

お勧めになりましたが、私はそれ處ではなく、拇指が硬くなつて了りました。亂筆をお許し下さい——私は昨夜一時間程夢とも昏迷ともつきません一時を過しましただけで、本當に睡眠致すことが出来ませんでした。

昨夜ブラッセイ教授がお歸りの折に、私は心配の餘り、私のことをお家にお知らせ下さるやうに願ひ致しましたのです。教授は「承知しました。遅くおなりになりましたから、ホテルのお友達の處にお宿りになりましたとお電話しておきます。」私は教授に心から感謝致しました。お、レベランド・メール、私は本當に羞しい思ではございません。たけれども、呼びに来れませんやうにホテルの名前はお家にお告げ下さいませんやうにお頼み致しましたのです。都合の良いことにはお家ではイダさんの御引越先を誰も知りませんでした。私も昨日初めて御勉強の時におきよしましたのです。

ブラッセイ教授はお領きになつて、お父様のやうに優しく私をお贖めになり「可哀さうな人ですね。」と仰言つてお歸りになりました。その折、お嬢さん達は甚く疲れていらつしやるからとヒルシュマンさん達をお促しになりました。處が、お二人は何とか斯とか仰

言つてお歸りになりたくない御様子なのです。すると、教授は「おや、私は貴方は紳士だと思つてゐましたが。」そこで二人は澁々お立上りになりました。イダさんの御機嫌は一層險惡の度を加へてをりましたが、私は壓潰されますやうな心で私達のお部屋に入りました。すると、突然イダさんは「私は貴女を信心深い方だと思つてをりましたが、貴女がユデア人の男を釣つていらつしやるとは驚きましたわ。でも、彼と貴女との結婚は不可能よ。」それで、私は初めてイダさんの不機嫌の原因が掴めました。「イダさん、そのやうな莫迦らしいことを仰言るものぢやございませんわ。ジীগムンドさんは私よりも貴女にこそ興味を惹かれていらつしやるのぢやございませんか。」かう私が申しましたのはイダさんをお慰めする爲だつたのです。然し、此の一寸した嘘は神様もお許し下さる事と信じます。ジীগムンドさんは「サバの女王」とイダさんをお稱びになりましたから、彼もイダさんの美を認めてゐるわけでございます。私はこの事をイダさんによく説明して差上げました。イダさんは「私は夜となく、晝となくジীগムンドさんのことばかり考へてをりますの、私の心は愛する爲に作られてゐるのですもの。でも、リタさん、貴

女は何時もさうやつて男子等をお追拂ひになつて、後でどうなさる御所存？ 老嬢には男は見向も致しませんわ。」

「でも、私には私の學院、私の修道院の外に何も考へられませんのです、其處にだけ私の幸福がございますのですもの。」すると、イダさんはいきなり私にお抱きつきになつて一瞬にして御機嫌が直つて了りました。「リタさん、童貞様におなりになるの？ さう云へば、姉のインルデも此の前そのやうな事を書いて寄越しましたわ。でも、社交場の貴女しか存じ上げませんものですから、私正かと思つてをりましたのよ。」それから、暫くの間私達はイダさんのお姉様のシンガー夫人に就いて語り合ひました。今夫人はブダベスト市のイングリッシュ嬢修道院にいらつしやるのですが、洗禮を御受けになるらしいとのごことでございます。お、酷い苦しみのさ中にも、此の一事は私にとりましてどれ程嬉しい訪でございましたことせう！ 「イダさん、貴女にも洗禮の御希望があまりになりませんか？」すると、イダさんは慌てて「いゝえ、ありませんわ。洗禮など領けませば、澤山の好きな方達を斷念めなければならなくなりますもの。」——その間に

下婢は、私の爲に隣のお部屋を整へてくれました。そして、その老嬢はイダさんの著換や髪を梳く爲に室に入つて参りました。イダさんは「リタさん、貴女御自分で髪をお結ひになりますの。貴女のその絹のやうな手でお梳きになつたら、どんな髪でも柔い美しい髪になるでせうね。一度その手で私の髪を梳いて下さらない？」——と言ふ譯で私はイダさんの美髪師になりました。その間老嬢は下らない小説「悪魔の歎」何とをかしな題でございませう。の讀役を務めました。でも、私の心はそこになく、聖ベネディクト・ヨゼフのお側に飛んで行つてをりました。——イダさんの髪は大層電氣をもつてをりました。梳きます度に火花が散つて、髪は獅子の鬣のやうに立上りました。時に女の巻髪は悪魔の良です。」と聖ローザは仰言つてをります。どれ程澤山の婦人が髪飾の爲に、或ひは煉獄に、或ひは、お、地獄に苦しまねばならないのでございませう。愛すべきイダさんはそのやうなことはございませんとは思ひますが、でも、リタはさうと申せませんかも知れません！——

巻髪が終りましたもイダさんはなかなか化粧臺をお離れになる様子がなく、髪に香水を

お注ぎになつたり、美爪術をなさつたり、寝化粧の白粉をおつけになりました。イダさんのお説によりますと、それによつて肌が天鷲絨(?)のやうになります由でございませう。可哀さうなイダさん、然し、私はその側で見物させられましたのです。ロザリオを二度誦へ終へましても未だ濟みませんでした。それ處か、今度は老嬢がイダさんの美足術を始めました。可哀さうな老嬢は苦しうに身を屈めて幾度も息を入れてをりました。その次は齒の番でございました。其の入用品として幾つもの粉とクリーム入との小匣をお取出しになりましたので、私は呆れて了ひ、繰返し、繰返し「可哀さうなイダさん貴女のその絶對に滅ぶべき肉身を粧ふ苦勞の、せめて半分なりとも靈魂の爲にお用ひにされないものでせうか?……」と溜息を吐きました。又一幸福なるイダさん、私を待ち受けてゐますやうな怖い朝は、貴女にはないのです。私にも判りませんが、平穩に濟まないうことだけは確實と申せませう。」と呟きました。

イダさんが寝臺をお離れになりましたので、昨晚のやうに又髪を梳いて差上げなければなりません——お、私は甚く頓へてをり、眼の前を黒い雲が駆けまですやうで眩暈が起

つてをります。レブランド・メール、私は一時間程も安眠してをりませんのです。絶えず脅え戦きながらお家のことで頭が一杯でございます。おふ、レブランド・メール、昨晩の女流詩人とあの優しいお母様と叔母様との美しい情景が想ひ出されました。私は、ホテルの假寝の宿でユデア人のお友達の髪をお梳きしながら「悪魔の歎」などと云ふ小説を聴かされてゐるのでございます。そも此のことわりは………

われに………などて解し得んや。

髪まで梳いて差上げましたのに、イダさんは不機嫌を盛返して、「リタさん、貴女はさり気ない風を粧うていらつしやりながら、ジグムンドさんが私を莫迦にしていらつしやるのを貴女は良く御存じぢやないの？」私は睡眠んでをりませんでしたし、ママが怕くて大層疲れてをりましたが、イダさんの納得が行きますやうに努めました。すると、イダさんは「ジグムンドさんは金髪が大好きなの。リタさん、貴女黒髪を永久的に金髪に染めるティツイアン・クレームを御存じないこと？ でも、それは先に褪色の治療をして色素を全部抽出して了ふのでせう？」

まあ、何かと思ひませば、此のやうな莫迦らしいこと。私はたゞ恐しさに顫へ、ママがお殿きにならないやうにと祈りつゞけてをりました。いゝえ、そのやうなお祈はお止めなさい、何故なら、私の靈魂の淨配は劇しく鞭打たれ給ひて、十字架にお懸けられにりましたのではございせんか！——レブランド・メール、私は顫へながらイダさんに、是非あの老嬢を私の家まで一緒に連れて参り、俱にママに會ふやうに一時拜借致したいとお願ひしました。「仕方がないわね。」と仰言つたイダさんのお言葉で、お嫌な事がよく判りました。老嬢は私に親切にしてくれましたし、是非と願つたのですが、イダさんは「私の婢や他人の爲にではなくて、自分の爲にだけ傭つてありますのよ。」さうお云ひ切りになつてイダさんは外出の仕度にお取掛りになりました。レブランド・メール、其の時の私は本當に生きた屍のやうに見えましたことせう。追ひ詰められました兎のやうに恐しさを肩のあたりに感じました！ 私は跪いてお祈り致しました。或ひはママは私に同情して下さるかも知れせん——

歸ります途すがら投函致しますから、これでお終了に致します。

そしてお家から改めて此の後の様子をお知らせ申し上げます。

澤山、澤山御機嫌宜しく、貴女の御手に接吻しつゝ。

可哀さうな——」

七四

はふり落ちる涙を拭ひもやらず、マティルデ母様は之を片寄せ、同じ日に届いた次の便りに戦いてゐる手を差伸べました。

フランシスコ會の御聖堂から第一の御彌撒を告げる神韻な鐘の音が流れ出て来ました。

「そのやうな自堕落な子供の手紙などお焼き捨てなさい。」とお命じになつた厳格な神父様はこの第一の御彌撒をお獻げになつてゐるのでした。

『おゝ、レブランド・メール、私の愛すべき母様！ 貴女お一人が私のお母様でございます！ その他には私のお母様はございません！ 今私はお家にをります！——此のお手紙を書き終へましても自分で投函に參ります。フリーデルはもう私の役に立つ

てくれませんか。レブランド・メール、ママは私をお殿きになりませんでした。尙甚うございました！ それにフリーデルも亂暴で、失禮な態度でございました。彼が事の初りでございました。彼は一體私を何と思つてをりますのでせう。彼は私を待ち伏せ致してゐましたかのやうに玄關に立つてをりました。私達がお家に著きますと、彼はまるで飢ゑた狼のやうに——誇張ではございません——虎が挑みかゝりますやうに、「何處にいらつしやつたのです、家をお空けになつたりなどなさつて！」私の行動と彼とどのやうな關係がございますでせう？——私は彼に「商業俱樂部に行つたの、そして遅くなつたから、お友達の處に宿つたの。」すると、彼は一層峻しく私を見詰めて、「お友達の處なんて、正か嘘ぢやないでせうね？」おゝ、これ程の辱しめを受けますとは。かゝる猜疑心のある彼に私の心の苦しさが解りませうか？「さうよ、遅くなつたからなの。」と申しまして私は階段を昇りました。が、尙、彼は私の後から浴せかけますやうに「事實なら文句はありませんが、兎に角調べますよ、嘘でしたら覺悟をなさい！」——一體彼はどう考へてゐるのでございませう。私を何と思つてゐるのでございませう、まあ、本當に

七五

気が知れませんか——イダさんは「彼も彼の女を繞る男達の一人なのね、彼も首つたけなのね。嫉妬をやいてゐるのよ。お、シレーネ（希臘神話に出て来る水神族の女性にして航行の船舶を妙音にて惑はせ、沈没せしめる妖魔）なる汝よ!!!」私は次々に起る心痛に甚く神経が昂ぶつてをりましたので、他意のない此の冗談も耳を搏たれましたやうに鋭く感じました。レブランド・メール、扉の前に立つてをりました、お、サリーの顔——好奇と悪意とを含んだ狡猾さうな態度で、「お嬢様の御外出はなかなかお長かつたのでございますね。お母様は殊の外御立腹遊ばしていらつしやいます。」——「電話がかゝつたでせう?」——「かかりましたが、お嬢様が何處にいらつしやいますか不明でございますので、御蔭様で私達は夜更に街中お探し申しました。お母様方は非常にお怒りでございます。」

お母様方——誰方? と訊ねたうございましたが、咽喉からは一言も出ませんでした。私がイダさんの手につかまらうと致しました時に、ママのお聲が響いて参りました。「ほつき歩きの子が歸つて来たつて?」——私達はサロンに入りましたが、そこは昨日のままに見苦しく取亂されてをりました。ママは白粉氣のない、不斷著で、髪もお解しにな

つた御様子で出ていらつしやいましたが、お顔の色は随分お悪うございました。ママの御挨拶は「おや、早々と翌朝の七時半にお歸りかい?」穏な口調ではございましたが、その眼眸は鋭うございました。「ママ、遅くなりましたものですから、昨夜イダさんの處、「家鴨ホテル」に宿めて頂きました。御免下さい、ママ、でも、ブラッセイ教授から朝七時半頃迄には歸ります旨御通知がございましたでせう。」

いきなりママは爆笑なさいましたので、私の心臓はどよめき、刃を突刺されましたやうな思が致しました。「あ、さうかい、「家鴨ホテル」にね、それをお前の頼間な保護者は言ひ落したのさ、御蔭で私は夜通し旅館と言ふ旅館を探しにやつたのさ——」そしてママは私 が其の場に居たたまれませぬ程の侮蔑的な態度で私にお訊ねになりました。

「お前は實際「家鴨ホテル」にゐたのだらうね。でも、待合あたりにゐたやうな氣も私にはするよ。」何と云ふことでございます。處で、ママが何時までもイダさんの存在を無視してをりましたので、イダさんはすっかり憤慨なさつて、口惜しさうに問詰なさいました。「貴女は一體私を何と思つていらつしやるのですか。失禮な、お氣の毒に思つてお嬢

様をお宿め致しましたのに、誹謗で感謝なさるのでですか。」イダさんのお言葉にママは全く恐縮して、「私は貴女にお聴かせ致す心算ではございませんでしたのです。之に言つてやりましたのです。これがどんな子か貴女にはお解りないのです。」レブランド・メール、そのやうなことまで何も知らない人にお話しなさらなくても宜しいではございませんか。苦しきの爲に、それよりも羞しさで私は顫へてをりました。「フェルデスの事件以來、もう私はこれのことは克く承知してゐるのです。」イダさんは私に、「あすこでどのやうなことがございましたの？」——「一人はこの爲に自殺したのですよ。」とママはお言ひ放ちになりました。(また嘘でございます——お、レブランド・メール、何と云ふ私のお母様でございますう！)

イダさんは關係のないお話でしたので、お暇の御挨拶をなさつてから「お家のことは、お家で御解決なさつて下さい。」私はイダさんに感謝致しました。レブランド・メール、イダさんがお歸りになりました後、私が獨りになりますと、一時に恐しさが迫つて参りました。哀な私の心は、苦しい、怖しい刹那刹那にどれ程切實に祈りました事せう。

ママは私にお跳びかゝりになつてお叩き出しになるのではないかしらなどとも思はれませんでした——

然し、ママはお打ちになりませんでした。「厚顔ましい、さかりのついた猫奴、早く自分の部屋へお行き。世の中にお前などみたいものがあるものか、十八歳の小娘の癖に翌朝までぶらついて來るとは大した代物だよ。」お、ママの怖しい眼光、聲には毒々しい憎しみが溢れてをりました。私は非常に焦痺してをりましたので、出来るだけ早くママの所を切上げたうございました。昨夜は睡眠出来ませず、それに朝御飯も未だ戴いてをりませんでしたから——私は早くお部屋で、思のまゝ泣いて胸の悲しみを和げたかつたのでございます——何よりも聖ベネディクトに私の苦衷をお聴きして頂きたかつたのでございます——何故聖人は「貴女をお護りなさい。」と仰言いましたのでせうか。前々から私はママの御氣に召しませんでしたが、今日からは一層ママの憎悪の度が増しますやうな氣が致しました。レブランド・メール、恐しいことでございます。さう思ひますと私の手は顫へて止みません。でも、これは事實なのでございます。ママの眼にこれがありありと現

れてをりましたのですから。

レブランド・メール……その次の事を簡単に話してお話し致しませう。後程御聖堂に参りますことができましたなら之を投函致します。レブランド・メール、私はお部屋に入りました時——直ぐに感じました、あのやんわりとします肉桂香水の香を——レブランド・メール、確に彼の香でございました。間違なくさうでございます。然も、お部屋には暖氣さへ残つてをりました——ストーヴを使ひましたことが解ります——誰の爲に？——此の頃私はまだストーヴを使つてをりませんのです。お、レブランド・メール、初めて彼が私のお部屋に昨晩をりました事を驚愕と畏怖との裡に察知致しました。遅延く此のお部屋を暖めてをりましたのです——レブランド・メール、彼は私のお部屋で悪いことを致したかつたのではございませんでせうか？ 或方法で私の承諾を強奪したかつたのでございませう。此の間イダさんから伺ひましたお話でございますが、承諾させる爲に相手の婦人を酔はせましたとか、麻酔薬を使ひましたとか言ふ悪人がをりましたさうです。何と云ふ酷いことでございますませう。レブランド・メール、聖ベネディクトが何故「貴女をお護り

なさい。」と仰言いましたのか、その理由を今初めて悟ることができました。そして私は——お、貴女にも何か豫感がありましたでせうか——聖人の愛すべき、愛すべき……

お、レブランド・メール、私は泣けて、泣けて仕方がございませんでした。

あの愛すべき傳記を探ねましたが、見當りません——尊い御本はいつも箆笥の一番上の抽斗に入れますして、聖人の遺物は小さな敷物に載せまして、お花を添へて置くのでございますが——傳記を取出さうと致しましたけれども——ございませんでした——遺物も紛失してをりました。その代りに恐しい男の幼年時代の寫眞が——悪魔に幼い時代がございませぬものなら、あの幼年悪魔の寫眞がそこに掲げられ、遺物を飾つてございましたお花でそれが飾つてございました!! ——これはママの仕業でございます。その譯は——不可ません。妄に他人を誹謗致しますのは慎みませう。でも、ママが何をなさいましたか貴女にも御想像になれませう。初め私は彼が尊いものを奪ひましたのではないかと思ひました。私は全部の抽斗を調べ、文机も一々探ねました——恐しいこと、何も見つけることがで

きませんでした——お、レブランド・メール、私はこの苦痛を言ひ表す術もございませぬ。昂奮し、苦しみ、落膽致しましては涙を流し——いつそママにお訊ねしてみませうかしらと思ひました。ママが何とかして下さらなければそれは到底見附け出せないと思ひましたからです。ひよつとしましたら二つの品を御自分の御部屋の棚にでもお匿しになつてゐるのではございせんかしら。まあ、ママにお願ひ致しませう。さう思ひましただけで全身は顫へ戦くのでございまして。けれども、私の御本！ 私の偉大なる聖人！の爲にはこの儘ではどうしても済まされません——レブランド・メール、看視がきびしくて、幾何本の顫が甚くとも、このことだけは申し上げずをれませぬ。そして、私がママの所へ参りませうと決心致しました折——ママがお現れになり——嘲嗤ふ悪魔のやうにいきなり哄笑なさつたのです。「探して御覽、一所懸命に探して御覽よ——水、水、水だよ（離れてゐる意）。少し温くなつてきた（近付いた意）。燃えてゐるよ——莫迦だね。ストーヴの中を探して御覽、その中にお前の迷信が焼死んでゐるから。それで萬事終れりと言ふものさ。我が娘よ、何分お前は狂癲病院に随分近くおなりだからね。」——レブラン

ド・メール、「燃えてゐるよ。」とママが仰言いましたお言葉は百雷のやうに私を撃ちました——弾かれましたやうに私はストーヴに駆け寄り、中を開けてみましたが、何の痕跡もないのでした。たゞ小さな石炭屑が微に燃え残つてをりました——お、その刹那の私の悲惨な心！ 壓搾器にかけられましたやうな思ひでございました！ 「ママ、ママ、私がお氣に障りましたのでしたら、半死半生になりますまで鞭をうけますのに、私の何よりも大切な御本を、私の唯一の樂しみでございましたあの尊い遺物を……ママ！ 私がどうしてそれ程御氣に逆らひましたのでございませうか？」

私はソファーに身を投げて思慮もなく泣き崩れ、絶望的な悲しみに悶へ「ママ、ママがこれ程甚い事をなさる方とは思へませぬ、誰方がママにお勧めになりましたのでせう？ あの悪魔のローレンセンが、此の甚い事をママにお勧め致しましたのでございませう。」すると、ママの顔色は蒼白に變つて「誰がお前にそんなことを言つたのだい！」——「肉桂香水で直ぐ分りましたわ。」——「覗いても不可ない程お前の部屋は神聖なのかい？——あの方は一寸見たばかりだよ。」

そしてママは私の注意を他に移さうとなさつて「あの本や、小匣のたわけた骨がお前をめそめさせたのだよ。それにはパパも同感なさつたからね、だから捨ててやつたのだよ。ただどね、その代り聖マリアの牌を上げよう。」——「ママ、ママは本當になさいましたのですか？——お、ママ、教會の尊重する遺物、あの尊い古い御本をお焼きになりましたのですか？　ママ、私がママをお許し致します如く、神様もどうぞママをお許し下さいますやうに。でも、これは私の生涯の一番、一番大きな痛傷でございます。」——「お前が待合あたりをぶらついてゐなかつたら、大切な迷信の偶像もなくならなかつただらうさ。さかりのついた猫奴、今度こそよく憶えてお置き。」

レブランド・メール、頬を泪は送り、微な慰の光とてなく、私はソファーに額を摺當ててをりました。「お、私の愛すべき聖なるラブレよ、あなたは何故此の侮蔑をあつた悪人の爲すがまゝにお任せになりました！　彼等は焚書の暴虐を働きましたのに——御本だけなら人の作りましたものですが、貴方の御尊骸、聖い遺物を焼き捨てることを何故お許しになりましたのでせう。この………申せません。假令どれ程の事をなさらうとも

私のお母様なのでございますもの。本當に貴方は悉皆お焼かれになることをお忍びになりましたのでございますか。」と叫びました——レブランド・メール、私はソファーを離れて再度、萬一にも灰の中に遺物が残されてをりはしますまいかと指先で灰を取除いてみました、小さい燃殻の他には何も出て参りませんでした。只遺物の容器の金具がございましただけでせう。」

その折婢やが入つて参りまして「お嬢様、お母様の下品なお言葉位は我慢なさいませ——若し昨夜こゝにいらつしやいましたなら、さあ、泣いても、泣き切れない目にお遇ひになりましたことせう。」婢やの話には何か意味が含まれてゐるやうでございました。私には總てが怖しい謎でございませう。レブランド・メール、教へて下さいませ！　たゞ私の留守に、非常に悪い事が謀まれてをりましたことが漠然と感じられました。聖ベネディクトが「貴女をお護りなさい。」と仰言いました通り私は私を護りましたのでした。でも、一難去りました代りに、あの尊い遺物は焼き捨てられて了りましたのです！

これを書了へまして御彌撒に参りますから、自分でポストに入れます。

お、わが最愛なる友よ、既に私をお離れになり、此の家をお立去りなさいました。昨日は私を御保護下さいましたが、若しも再度、悪い影が私を追い駆けて参りました時には、今度は誰方が私を保護して下さいるのでございませう？

お、哀しい私のお部屋は空で、祝福もないかのやうでございます。貴方の遺物を損なひましたのは私の過失でございませうけれども、私にはそれを阻む術とてございませんでしたのです！

眼の前を佇むが如く黒い雲が流れ寄り、これ以上書けません。どうぞ祈つて、祈つて下さいませ。今のやうに哀しく惨な氣持ははじめてでございます。

強盗に狙はれ、悲歎にくれる

リ タ

マティルデ母様は目を視開いたまゝ、この手紙を初めて開いた時のやうに眞青になり、

激しく齒を顫はせてゐるのでした。

あの聲が！ 事實となつて現れたとは！ この聲が純潔なリタに呼びかけなかつたならその朝は、リタの純潔な白百合は無残にも手折られ、踏み躪られ、高らかに悪魔は勝利の聲を叫んだことでせう……親の庇護の下にありながら、この可憐な清らかな處女は、裏街の悪の巢窟に見るやうな汚辱に遇はされようとしたのでした……

その時の母様は、肉親の母性的心愛に胸をふさがれ、リタに「リタさん、今度お父様のお留守に、再びかやうな恐しい暴力が豫感されましたなら、何時でも躊躇なく私達の處へいらつしやい。その時には私がどのやうなことをしても貴女をかぐまひます。無論來る前に御両親の承諾など問題ではありません。」と言つてやつたのでした。

しかし、あくなき執拗さで迫られながら、その邪慾の内容を感知出来ないリタの潔白な美しい薄紗を、その面から剝ぎ取り、醜い現實を知らしめることは遂に忍びなかつたのでした。或ひは赤裸々に曝すべきかと逡巡ひ乍らその勇氣がなかつたのでした。この少女の比類なく甘美なる純潔は、かくも香高いのでした！

「お、わが神よ、醜い現實を赤裸裸に「リタさん、かう言ふことをあの人達はしようとしたのです。」と言へなかつたのは、あなたが母様の弱さの故でしたとせうか。」

母様は尙「お母様に就いて遠慮なく申しますと、リタさん、お母様には充分警戒しなければなりません。貴女のお母様ですから、これ以上は憚りますが、くれぐれもさう申します——それから度々その非行を仰言つた男の方には決して、特にあの約束の日には間違つても二人きりでゐてはなりません。事情が許しましたなら、出来るだけその日を延期するやうにお努めなさい。その他は神様のお計にお委せ致しますせう。けれども、最後まで手段を盡さなければなりません……」

母様のうつすらと泪の滲んだ眸に、さやかな六月の朝の陽光が映えて視力を潰されたかのやうに眼が眩むのでした。次いで恐怖の夜を知らせた手紙の直後に届いた繪葉書に手のべたのです。

十字架と御苦難の天使とが描かれたもので、裏面には僅の言葉が顫聲をきくやうな、急きこんだ綴で書いてあつたのでした。前と同じやうな言葉を繰返して、「祈つて、お、お

祈り下さいませ！ 後五週間、四週間程でございます。最後の葉書はラファエルの描いたゲッセマネの園のイエズス様でした。天使は苦惱に悶へる救主に心をよせて面を伏せてゐます。御復活は間近です。御主は、茨の冠の代りに天主の王冠を頂きましたが、この甘美なる小さな花嫁は鋭い刺の茨の冠を被されてゐるのでした——お、わが神よ。

後残されたのは二通だけです——扉に静なノックの音が聞え、また先程の心優しいシスターが現れました。「母様、朝の御食事は如何致しませう？」——母様はそれを不機嫌に断つたのでした。「シスター・アロイジア、御彌撒後に頂きます。私は今日御聖體を拜領するのを御存じでしたとせう？」小さい紅い顔のシスターは一層紅く恐縮したのでした。

「私は——母様が少しもお息みにならなかつた御様子でしたから、如何かと思ひました。お許し下さいませ。」修院長様は突然立上り、吃驚してゐるシスターに近寄り、「許すも何もありません。それは貴女の思ひ過しです——さつき言ひましたとせう、御彌撒に間に合ふやうに、六時頃知らせて下さいと。」

修院長様の御部屋から御聖堂に通じる處は小さい祈禱部屋になつてゐるのでした。シス

ター・アロイジアは其處の掃除に取掛りました。此の部屋を経て神々しい香の薫が、御聖堂から漾ひよつてくるのでした。心優しいシスターは手を休めて憂はし氣に母様を見やるのでした。母様は屹度夜通し讀んでいらつしやつたのに違ひない——お、お泣きになつた痕ではないかしら、愛すべき、愛すべき母様——イエズス様の御苦難を緝き、默想なすつてのことか知ら。シスターはそつと用心しながら絶えずその大きなあどけない目を、完徳に近い母様に注ぎ乍ら用を終へて出て行つたのでした。シスター・アロイジアは處女の清純そのものゝやうな姿を母様の前にかゞめ、挨拶して去つたのでした。母様は手紙の上に面を伏せ、面も上げ得ず何も知らなかつたのでした。扉は靜に開けられ、音もなく閉され、母様は以前の孤獨に還つたのです。そこへ覗くやうに開けられてゐる祈禱部屋の間から優しい囁が洩れて來たのです。修練女等の朝の祈が始められたのでした。

「三月十八日

レブランド・メール、私の、私のレブランド・メール！

私の勝手さにお怒りかと案じてをりましたのに、本當に私は感謝致さなければなりません。然し、私はゆつくりとお手紙を書く事もできません。申し上げられない程の苦しみに悩みながらも、貴女だけには心からの感謝で一杯でございます。本當に貴女の御慈愛に綴られましたお手紙は、何時も私を生き活きと蘇らせて下さいますのですもの。熱くうるむ眸で今日の御手紙を、此の間の私への御返事を、幾度となく胸に押當ててをります。お、私のお母様、今日も亦貴女は優しくもいみじくお語り下さいました。聖ラブレは一冊の御本や遺物だけで終るものではなく、従つて、尊重した其等の物を失つても、聖ラブレは私の友であり、私は何處までも聖人を信頼しなければならぬとお諭し下さつて、且又、一層立派なお言葉を聖ベネディクトのやうにお聞かせ下さいました。「主イエズス様こそ貴女と御一緒です！」——またしても私はお懐しいラブレの傳記をお慕ひ致して泣き出してしまいました。然し、貴女の御言葉通り、貴女のお心を聖ラブレの御本として、あの偉大なる聖人の總ての徳を心の裡に納めて置きますことができ、繰る度に何時も立派な神様と天使等とは貴女の心のページを御本の如く繰ることができ、繰る度に何時も立派

な事柄を感得出来ますこととございませう。お、レベランド・メール、何と言ふ綺麗な
お言葉でございませう。何卒さうあるやうに願つてをります。

又、貴女は、再び同じやうな恐ろしさに脅されました際には學院に駆け込むことをお許
し下さいましたので、もう安心でございませう。お、待ち焦れてをります學院は、學院は
どのやうに良い處でございませう！ 然し、お家の警戒は極めて嚴重でございませう。それ
に、ママは、此の私の安心を感知なさいましたかのやうに「お前が一度に懲りずに、重
ねて逃げ出すやうな事があれば、其の時には刑事巡査に頼んで引立てて来て貰ふからね。」
レベランド・メール、貴女のお側にをりましても、刑事巡査が捕へに参りますことを想像
致しますと、慄然と致します。刑事巡査を追返す権利が貴女にはおありでございませうか？
おありになりませのでせう？ 私が貴女のお側に参りました爲に貴女に御迷惑をおか
け致すやうなことがございましたなら、私は安穩に留つてはをれませぬ！ 私は飽く
までも頑張つてみます。然し、逐ひ詰められました節には逃げ込みます。總てを神様にお
委ね致します。それから「群盗」に出ます事のお許に就いても御禮申し上げます。でも、

このやうな状態で私は劇などに出演致します氣はございませぬ。従つて、此の頃劇の練
習の時ほど退屈な時間はございませぬ。お家の動靜にばかり氣を奪られてをるのでござい
ます、私はお家を離れます爲にだけ承諾致しましたのですから。此の間以來私はお家
が怕くて仕方がございませぬのです。パパは九日にお歸りになりましたが、私はママの
ことを思ひ、ママの甚い仕打に就いては少しもお打明け致さないで置きました。レブラン
ド・メール、ママはあの恐ろしい火曜日から二、三日と言ふものは今迄に全く昂奮してい
つしやいましたのです。私は競々と致しながらも、若しパパにお話し致しまして又過日
のやうな厭らしい場面を惹起しましてはと懼れて黙つてをりましたのです。處が、ママの
方から私のをりませぬ處で、パパにお話しになりましたのです。パパは非常な權幕で私
のお部屋にお現れになり、お叩きつけになるやうな調子で「七日の午後から八日にかけて
その晩は何處にゐたのか、家を空けたとママが言つたが、一體どうしたのだ。」

「イダ・ルンサさんの處に宿めて戴きましたのでございませう。怒つた獅子のやうな勢
のパパに私は度肝を抜かれて了りましたのです。パパはオーヴァーを御取りになつて駈

けるやうに出ていらつしやいました。ママは私の肩をお捉へになつて體をお揺りになり乍ら「お前は私を誹謗したね、ローレンセンさんがお前の部屋にゐたなどと云ふのは嘘の皮ぢやないか。」私は絶望に追ひ詰められましたやうな氣持で「そのやうな事を申しは致しません。」——「お前の厭らしい偶像(!!)を焼いた事をお悦びなさい、折角私が氣狂のお前を救つてやつたのだからね。」お戻りになりましたパパは、前とは打つて變つた優しい御様子で「御免よ、リタちゃん、嗚鳴つたりなどして、許しておくれ、お前の行動は小さい子供のほんの氣紛だつたね。然し、今後あのやうなことをしちや不可ないよ——パパがイダさんの處へいらつしやつた事を私は直感致しました。そしてパパはママをお呼びになつて「何故子供を怕がらしたのか、何故子供に亂暴したのだ、家を恐れる程の事をしたとは甚い奴だ、それでもお前は母親なのか、まるで昔の因業婆そつくりだ。」(!!) お可哀さうなママ)でも、ママは少しも悪びれた御様子もなく、卻つて「私が昔の因業婆なら、此の兒は乳臭い因業女です。」——これ以上あの恐しい日の事をお話し致す事はできませんでした。お、残念な事には、以後ブラッセイ教授の處に参ります事をパ

パはお禁じになりました。カトリックの夕に連れて行つて頂いたのがその禍因となりましてたのです——これは私の新しい言ひ知れぬ淋しさでございます。レブランド・メール、教授こそ、ツエンケル神父様の外に、學院の事をお話し出来る唯一人のお方でございましての……少しでも私の慰安となるお方は残らず残らず、奪はれて行つて了ひます。十一日にはまたローレンセンが訪れ、その日親達は私を喫煙室にお喚び入れになつて御自分達は御退室になりました。すると、彼は「貴女はあの晩何處にいらつしやつたのですか?」——「イダ・ルンサさんの處にをりました。」——「何故そのやうな無茶なことをなさつたのです、何故お家をお騒がせになるやうな事をなさつたのです?」——「それは貴方御自身が一番良く御承知の筈でございます。私は貴方を避けましたのです。」彼はイエズス様にその邪心を看破られました悪魔のやうな顔を致しまして——この喻が不敬でございしましたらお消し下さい。然し、私の來ることがどうしてお判りになりました? それに何故私をお避けになるのです? ——私はあるやうな事には全く氣がすまなかつたのですが、私は紳士ですからね。然し、貴女のお母様が——」

私は何の事か要領を得ませんでした。彼に「貴方と言ふ方は、時に貴方の爲に力をお盡し下さいます。兎に角貴方の一切は胡麻化しに終始していらつしやいます。それから私難なさいます。兎に角貴方の一切は胡麻化しに終始していらつしやいます。それから私のお部屋で聖い物をお焼き捨てになりましたのは貴方でございます。直接でなくとも、ママを教唆なさつていらつしやいます。」彼は氣味悪い含み聲で「そのやうな事はありません！」——「嘘を仰言いませ！」——「貴方のお部屋などに私は全然足踏さへ致してをりませんよ。」——「全然足踏なさらなくとも、貴方の匂が芬々と香つてをりました。」すると、彼は眼を細めて射殺すやうに私を見詰めて、「貴女の可愛らしい飾物、あの文机や、なつかしい寢床をみたのが罪惡でせうか？」——「罪ではございませんでせうが、貴方はそれ以上の非道い事をなさるお心算でしたのでございませう。」——「さうですか。では、貴女にそれがお解りなら、私が何をしようと思ひましたかお聽せ下さい。」——「無理に私に承諾させるために、貴方は麻酔藥を使はうとなさつたのです。」本當に、このやうな事を口走つて了りました。然し、彼は弱點をつかまれたやうでした——

一層恐しい眼で私を見詰め、「貴女の可愛らしい頭には眞に可愛らしい概念が混淆してをりますね、然し、私は強ひてそれを整理して頂かうと思ひません。いゝですか、私は斷つて置きますが、あの事も亦他の事にしまして皆私の意志ではなく、貴女のお母様のお勧めに従つただけなのです。」——「成程ママは貴方の御忠言で私の何よりも大切な聖い寶物を焼き捨て、私に甚い苦汁をお飲ませになりました。けれども、私のお母様を侮辱なさる事は許しません。出ていらつしやつて下さい。もう貴方とは何もお話し致したくございません。」彼は唇を嚙んで横を向いて了りました。その晩はそれ限り話を交しませんでした。

然し、あの悪魔は、「あの事も亦他の事にしても」と言つてをります。その中にはどのやうな意味が含まれてをりますのでせう？ 尤も、どのやうなことでも構ひません。神様は總ての不正に對して、正しく保護なさつて下さいますから、私は只毎日その爲に感謝致してをります。

工合よく十二日からヒルシユマンさんの處に劇のお稽古が始りました。まあ、レベラン

ド・メール、お許を頂きましたので急いで『群盗』を通讀致しましたが、吃驚致してしまいました。アマリアの外に女は一人も出ないのでございますもの。まあ、嫌な事でございます。私は何時も獨りであの莫迦らしいユデア人と一緒にしなければならぬのでございます。それに宜しくございませぬ事には、聖週間中も一日隔きにお稽古がございませぬです。その爲にお家から離れてをります安意さを思ひませば思ひます程、キリスト様の御苦難の記念日に、然も、ユデア人と劇を致します事が、私の心を甚く苦しめます。まあ、何と可哀さうな私でございます。レブランド・メール、私はイダさんに見物から一緒に来て頂くやうにお願い致しましたのですが、イダさんは、私の媚態を、ヒルシュマンさん達と不巫戯る處などを、御覽になりたくないと言つてプン／＼慍つていらつしやいます。

レブランド・メール、滅茶苦茶な此の書方をお許し下さい。今の私にはまとまり良く書けません。ママの前では一行も書きまことを許されませんのですから、始終妨げられますのでございます。それにママは何處も彼處もお調べになります。レブランド・メール、

私の最後唯一の寶でございます貴女からのお手紙は、ママの手を慮り、イダさんを介してブラッセイ教授に預り願つてあるのでございます。お、私のお部屋は、可哀さうに今は全く空でございます——イダさんのお話によりますと、お家からお断り申し上げます。でも、お手紙のことは喜んだのでお引受け下さいましたさうでございます。教授は競賣でお求めになりましたレイン・オルテンスの有名な二通のお手紙と一緒に保管して下さいと仰言つていらつしやいましたさうでございます。然し、一緒に保管なさるお手紙はどう云ふ方のでございませう。いゝ方のでございませうか、さうでございませぬければ、貴女のお手紙と一緒にお願い致したくございません!!

次に、別な事を申し上げます。もう今日は支離滅裂でございます。プリン市のお祖父様がお見えになりましたのでございます。お祖父様はプリン市立育兒院に二十萬圓御寄附なさいましたので、貴族に列せられ、今度その爲に、皇帝陛下に拜謁を仰せつけられになりましたのでございます。私達は驛迄お迎に出ましたが、大層良いお祖父様で、私に

は澤山のお土産を下さいました。もう随分のお年でございます。お顔も、お體もよく肥えていらつしやいます。然し、お咳がひどうございますし、お話の途中で度々居睡をなさいましたり、こちらからの質問には意味の分らない頓珍漢な御返事をなさいます。今日参内なさいました。私本當にお羨しう存じました。私も愛すべき皇帝陛下の御前に跪きまして、陛下、この許可を私の兩親にお命じ下さいませ、私がマリア平和學院に参れますやうに御口添下さいませ、陛下、私の喜は學院の他にはございません、この儘の状態では私は死んで了ひさうでございます。」とお願ひ出来ましたら、どれ程嬉しいこととでございます。

お祖父様のお部屋に私の客間があてられました。永い間使ひませんでしたものですから、随分汚れてをりましたので、私はすっかりお掃除を致しまして、私の處から小さな飾物を並べ、尙、パパのお許を頂いてサロンからお祖母様の御幼年時代の可愛らしい肖像畫を移して参りました。お祖父様はお氣の毒にも二十六年この方ずつと鰥夫の生活をしていらつしやいましたのでございます——レブランド・メール、次の事は私を非常に苦し

めました。ママは二、三日前、「いゝかい、お前はあの年寄に巧く取入つて、御機嫌を取結ぶのだよ。年寄に萬一の事があれば、少しの足しにもならない私の兄弟等と違つて、たんなり遺産を貰へるからね。」——おゝ、レブランド・メール、何故私はこのやうな忌しい事まで書きましたのでございませう。ローレンセンが私を……する爲に——おゝ、甚いこと、そのやうな事になりませんやうに！——假令参りましてもローレンセンとお嫌ひなお祖父様は私を助けて下さることと存じます。お祖父様は一度彼に私のお家で逢ひになつていらつしやいます。「厭な奴はいくらも知つてゐるが、あのやうな氣持の悪い奴は初めてだ。」と其の時仰言いました。お祖父様がいらつしやいました御蔭で私は少し安心致すことが出来ましたので、僅ながら元氣になりましたが、ママはそれをまた感知なさいましたものか、昨日残酷な笑と俱に「お前はあの年寄が、莫迦氣たお前を援けると思つてゐるのだつたら、そんな空頼みは止した方がいゝよ、あれはもう半分参つて(!!)」ゐるのだから、何を言ひたいのか、何を言つてゐるのか、自分でもまるつきり分つてはゐないのだからね——陛下の拜謁には途中で間諜附かないやうに言上する言葉を朗讀すると

「言ふ始末ぢやないか、何しろ餘り——」まあ、これ以上の事は書けません。お祖父様はお酒が過ぎましたために頭がお悪くなつたとママはお思ひなのでございませう。——「ママ、でも、それはすつと以前のことでございませう。それは過去のことでございますわ。今のお祖父様はいゝお方ですもの。」——ママは突然爆笑なさいまして「御尤もですよ、何しろ年寄には現在數へきれない程のお妾さんがゐるからね。用心して餘り近寄らないでおくれ、お前にだつて未だ墮落する餘地があるのだからね。その僅の部分をあゝの年寄につきかり駄目にされないとも限らないから。私はどつちでも關はないが、お前がいくらきかなくても私の子だからね。」——レブランド・メール、ママは二、三日前に「良く御機嫌を取結べ、たんまり遺産が——」おゝ、ママのお話は出鱈目ばかりでございます。どこまでが本心でございますのか、又、偽でございますのか、摺み所がございませぬ——けれども、これだけは事實なのでございます。お祖父様は始終不可ない繪葉書や寫眞をお持ちでして其等がお机の上に載つてをります。そして私が参りますと、狼狽して御本などでお被ひ隠しになるのでございます——然し、ママのお話以來私は何時となくお祖父様を

敬遠致してをりました。處が、お祖父様は私の態度にお氣附になり、昨日明かに口にお出しなりました。「こゝぢや儂は邪魔になるやうだな、それならホテルもあるからな。」その爲ママのお怒が私の上に落ち、私がお祖父様を虐待致しましたかのやうに仰言いまして御叱責になりました。

おゝ、此の四旬節は地獄の中をうろろ致してをるやうな生活でございます。朝目覺めますや、今日はどのやうな酷いことが待つてをりますかしらと考へますのです。おゝ、マリア平和學院、私のマリア平和學院！レブランド・メール、私は今四旬節の時の學院の祭臺を想像してをります——あの麗妙な、懐しい十字架、その下に赤地に金色の、また、青地に銀色のお召物を召しました悲しみの聖母は如何に氣高く見えますことでございます。そのマリア様は活き活きとしていらつしやいまして、御頬を傳ふ泪は今にも滴り落ちるかと思はれる程でございます——それから聖週間の聖歌をお稽古致しましたこともなつかしい思ひ出でございます。あの“Miserere mei Deus”は本當に美しくございまして。あの律調は今も尙耳に響を奏でてをります。殊にも、その“Ambilius lava me”

(まあ、この羅旬語の綴は間違つてをりませう。)は楽しく唱ひましたが、また悲しうございました——處が、レブランド・メール、私は今聖歌の代りに戀慕致すアマリアの科白を暗誦してをりますのでございます。私はアマリアを演りますことに少しの趣味も、感興もございません。たゞあの恐しいフランツに向ひまして、修道院に入りますことを宣言する處が快うございます。その處が大好きでございます。それからアマリアが、カルルのことを語ります時には私はきまつてサーリスさんのことを思ひ起します。然し、アマリアは、カルルを總てに越えて愛してをりますが、私が萬事に越えてお愛し致します方は、吾がイエズス様おひとりでございます——レブランド・メール、次のこともお話し致さなければなりません。

劇のお稽古に参ります學生等は殆どユデア人ばかりでございます。たゞ禮儀だけは嚴重でございます。私は瞭然と「お一人でも莫迦らしい眞似をなさいましたり、厭な事を仰言いませば直ぐ私は止しますから。」とお断りして置きました。私はお伴者を連れて参りませんでした——都合が悪かつたのでございます——馬車で歸つて参りました——此の

間のことでございました。皆さんが小さな提灯をにかけて「アマリア萬歳！」と連呼なすつて駈け出していらつしやいましたので、私は馭者に合圖致しまして馬車を走らせました。すると、駈け出しました馬車を皆さんは懸命に追つていらつしやいましたが、間もなく取殘されてお了ひになりました。

ジーグムンド・ヒルシュマンさんは年寄の伯爵にお扮しになり、コステイ・マールヒアデスさんはフランツ・モールを、マックス・シュレジンガさんはカール・モールを、小さいモーリツさんはコジンスキイの役をなさいます。その他、十五人か二十人位の學生自由聯盟の學生等がをります。その中數人はユデア人學生聯盟員なのでございます。例へば、シュビーゲルベルヒやロツレルやダニエルの役を致す者はユデア人でございます。然し、ダニエルをなさる方はなかなかお上手です——レブランド・メール、この劇は良く味はつてみますと、本當に傑れてをりますと存じます。さうではございませんか？ 可哀さうなお父様の伯爵は息子さん等の教育をおろそかになさいましたので、随分辛い立場にお立ちになります。伯爵の長子で盜賊の團長であるカール・モールは絶えず良心の苛責にせめら

れ、正道の生活を切望してをりますし、邪惡なその弟フランツ・モールは改心するやうに夢で神様に誡められます。

劇の科白は殆ど理解出来ない程亂暴でございます。それにカトリック教信者か、プロテスタント教信者か瞭然致してをりません。或時は聖書を読み、時には牧師が見え、さうかと思ひますと、修道士が出て参りますし、それに聖母マリア様のことを話し、又、プロテスタント教の晩餐式もございませう。盗賊が誇らかに自分等の仕事を語り合つてをります處は本當に甚い場面でございます。私が此處を大嫌ひなものでございませうから、ジীগムンドさんは此處をお縮めになりました。それから私は最後に盗賊の莫迦らしいユデア人の前に跪きますのが嫌でございますので、「掌を合せますだけで宜しいでせう。」とジীগムンドさんに申しましたら、「お宜しいやうになさつて下さい。私は何も強制は致しませんから。」との御返事でした。

言葉に抑揚をもたせることは私は下手でございます。誰も私よりは御上手ですけれども、そのやうなことは私にとりましてかまひません。たゞ私は蛇のやうにお家へ待

ち伏せ致してをります彼を避けることができさへ致しますれば宜しいのでございます。可哀さうなアマリアには悪人フランツ・モール、私にはローレンセンでございます。これは私の境遇とよく似てをります。そして「修道院よ、戸を開けよ。」と申します處もさうでございます。

公演は何時になりますか未だ確定してをりません。ジীগムンドさんのお話では四月十六日か、十七日かでございます。お、レブランド・メール、この日は私の猶豫期間の最後の日に當つてをります。お、不吉なこの日は、一日と歩み寄り、私の眼には怖い幻影が隠して参ります。この事は先に申しましたのでございませうか、良く憶えてをりませんが、この頃ローレンセンの訪問は以前程でなくなりました。午後は大抵私が留守に致しますことを知りましたのでございませう。然し、屢々ではございませませんが、参ります度に陰險な彼の言葉は私の感情を刺戟致しまして甚く昂奮させられます。私の運命を左右致すあの日の切迫を漸く忘れ去らうと致します處へ、彼は警告致しますかのやうに現れて参るのです。お、レブランド・メール、或男は三年間の歡樂と引換に、惡魔に

その魂を賣渡し、永いと思つてをりました期間は瞬く間に流れ、悪魔は彼に迫つて来た由でございます。此のお話は誰方のお伽噺、或ひは詩でございましたでせうか。私は自分の魂を賣りは致しません。賣るなどは思ひもよらないことでございます。然し、あの悪魔は、私の魂の受渡し期日を獨りぎめに致してゐるのでございます。決して私は負けは致しません！ けれども、私はそれに對抗致す手段を存じません。たゞ始終逃げ廻るより外に智恵がございませんのです……

レブランド・メール、これまでは苦しみや悲しみを自ら慰める事の出来ました私のお部屋がございました。そしてそこには優しいラブレの傳記が待つてゐて下さいました。あの古びた紙面からは偉大なる友の聲を聞き得、いみじくも慰を頂いたのでございました。お、それが今は傳記は失せ去り、その遺物もはかなくなつてしまひましたのでございます。それに代つて、あの意地悪の子供が、寫眞さへ私を嘲けりますかのやうに見下してゐるのでございます。私が抽斗の一番底へ葬りましたのを、ママは私の留守の間にお掘出しになりましたのです。自分のお部屋と申しましても、今では私の所有でなくなつ

てをります。ママは勝手に出入なさり、何處でもお搔廻しになります。たゞ貴女のお手紙はブラッセイ教授の處にお預け致してございますから、安心でございます。

可哀さうな私は……

今夜でございます。また續けます。

お祖父様は宮廷を御退出の後、帝國ホテルでお食事をなさり、知人を御訪問なさつてお茶の頃漸くお戻りになりました。上機嫌に、大悦の態でその模様をお語りになり「陛下は大層平民的で、天機は殊の外麗しく、色々の御下間に預つた。お前の工場は誰の爲に働くか等とお尋ね遊ばされたのぢや。」そしてお祖父様は私に「皇帝陛下は、儂に何處に宿をとつてをるかとお尋ねになつたので、娘夫婦とその私の大好きな孫娘との處にと言上致したのぢや。すると、陛下はお優しく御微笑なさつて、「年を老つて澤山の親戚のあることは、さぞ嬉しいことであらう。全く年寄の淋しさは耐へ難いものぢや。」とお洩し遊ばされたのぢや。」

お氣の毒な愛すべき皇帝陛下、洵にお淋しくあらせられますことでございます。大公

妃殿下は御婚姻遊ばされまして御側にあらせられませす、又、先に皇后陛下はお崩れ遊ばしましたのでございますから。

今日のお祖父様のお芽出度い日を私達もお祝ひ申し上げました。お祖父様は、ママに金の雙頭の鷲の胸飾を、パパにも同じネクタイ飾を下さり、私には、レブランド・メール、私には好きなものを購めるやうにと四百圓下さいました。

レブランド・メール、然し、私は、此のお金をお返し致したうございました。私には寶石や飾身具などはございまして、ございませんでも一向差支ないのでございませすから。然し、又、盗み出されて空しくなりました。私のお部屋の爲に私の聖人の御繪を欲しいと私は思ひ付きましたが、ウインでは御繪を見附けますことができさうもございません——レブランド・メール、これは未だ申し上げませんでした、ママは私の貯金帳をお取上げになりました。私がそれをもつて逃げるんでもお考へになつたのでございませう。その故か、私がまたお祖父様からお金を頂きましたので、ママは嫌な顔をしていらつしやいました。然し、別に何も仰言いませんでした。

その晩に又ローレンセンは参りました。彼の威嚇致しますかのやうに凝視めました眼の怖さに、私は思はず身顛ひ致しました。貴女が若し十六日に承諾なさらなければ、貴女を殺して了ひます。」とその眼は申してをりますかのやうでございました。

いつそ彼に殺されて了ひませば、私は卻つて救はれます——！——お、私のこの怖しい言葉！——盗賊に向つて、「私をお殺しなさい。」と氣狂のやうに叫びました。マリアの科白を思ひ出しましたのでございます。自己の死を望むさへ不可ませんのに、レブランド・メール、まして殺人の如き大罪を他人に犯させましての死はどうして許されませう！

レブランド・メール、私の爲に澤山澤山お祈り下さいませ！あの怖しい日はさながら私の靈魂の滅の日の如く逼つて参ります。お、その時、イエズス様への忠實を固守出来ますやうにお祈り下さいませ！——レブランド・メール、私の忠實の續きます限り、貴女への御通信も亦續けます。ママが如何程警戒なさいませうとも、假令葉書の端にても、一言半句をもつてなりとも、屹度お訪ひ致します。

若しも私の便の断えました時には、そのときこそは………
 又、ママがいらつしやいましたやうでございますから、今日中にこのお手紙は出せさう
 もございません。

追放されました、哀な

リ
 タ

追伸

十九日の午前でございます！

私の愛すべき、愛すべきレブランド・メール、貴女の兩の御手に接吻致します。今イ
 エズ會の御聖堂に参り、ハインドゥル書店を廻つて歸つて参りました處でございます。
 レブランド・メール、空でございました。私のお部屋は、もう空ではございません。
 やはりラブレの御繪は買へませんでした。御彌撒の後（御聖體を拜領致しました。）私
 はハインドゥル書店に立寄りましたのでございます。聖ラブレの御繪はウィン市中何處を

探ねてもございませんでせうが、お望みならば、フランスのアメット市か、イタリーのロ
 レット、或ひはスイスのマリア・シュタインへ照會してみませう、此の三箇所でしたら此
 の餘り有名ならぬ聖人にせよ、御繪でも御像でもございますと存じます。然し、しかとは
 請合ひかねます、何分この聖人は現代の藝術家に餘り氣に入らぬやうでございますから、
 と書店の主人は申しました——私 はがつかり致してしまひ、掌の四百圓を弄りながらお店
 を見廻してをりましたのです。すると、レブランド・メール、この前グラーツ市で夢に見
 ましたやうな珍しいものを見附けましたのです！

愛すべきルドのマリア様ではございません。それは立派な雄大な十字架なのでござい
 ます。イエズス様は嚴肅のうちにも生々しい傷をお曝しになつて首垂れていらつしやう、
 愛に溢るゝ瞳で私を御覽になつていらつしやいました。それは立派な出來榮で、深い感
 動を與へずには措かない十字架でございます。脇腹の御傷は大きく抉られてをりました！
 ——私は、これが聖ラブレの尊敬遊ばした、傳記に録されてございます十字架に相違な
 いと思ひました。おゝ、脇腹の御傷！——不信心のトマが二本の指を挿入れました情景

が眼前に髻髻と見えて参りました。

此の十字架を發見致しまして大層嬉しくなりまして、早速お値段を尋ねました。「お幾何ですの。」——「四百圓!!!」それはバーセル市の彫刻家が製作致し、ミュンヘン市で彩色を施されましたもの由でございます。レブランド・メール、不思議ではございませんか、私は恰度それだけのお金を持ち合せてをりましたのです! ——直ぐ十字架を買ひまして、シュテファン廣場に屯致してをります辻使を雇ひ、私の愛すべきイエズス様をお家にお迎へ致しましたのでございます。レブランド・メール、玄關には又フリーデルが構へてをりまして、愛するイエズス様を恐しい眼で睨みつけましたが、私は平氣でございまして! ママは私に「こんな化物のやうな十字架をどうしたのだい。(御免下さい、このやうな事まで書いて了ひまして。)お前には他に少しの趣味もないのかい。」と仰言いましたが、これも致方ございません! 私の可哀さうなお祖父様も失望なごつて、「この廣いワインで、お前にはこれより良いものが發見らなかつたのかね? 全くあの人は——(お祖父様は他のお言葉で仰言いましたが、私は此處にそれを書く事ができません。餘りに

も不敬に當りますから。然し、お父祖様はお口程に悪いお心ではございませんと思ひます。(淺間しいばかりぢやよ。)と仰言いましたのには情無くなりました。變なことは仰言らないやうにとお願ひ致しましたのに、然し、何と仰言いませうとも關ひません。レブランド・メール、今此の立派な十字架はソファアの上の壁間に懸けてございます——大層重いのでございます。懸けます時に誰か力のある人をと申しました處、サリーはフリーデルを伴れて参りました。私はフリーデルに手傳つて貰ひますのを餘り好みませんでした、直ぐに来てくれましたので、一刻も早い方がと存じましたので、彼に頼みました。彼は太い折釘を壁に打ち込み、十字架を懸けまして釘の強さを試しましたが、大丈夫でございました。その際凄しい鐵のやうなフリーデルの拳を私は初めてみました。

彼は突然變な眼で私を眺め、「貴女がこの間の夜家にいらつしやいましたら、二度と外へはお出になるわけには行かなかつたのです。私はピストルを買つてゐます。私は或娘を愛してゐるのですが、若しその娘が墮落するやうなことがあれば、即座に射ち殺してやります。」——「フリーデル、そのやうなことをしたら(私は十字架を指さして)此

の方がそのやうな無暴を禁じていらつしやるぢやないの?」——「其奴が勝手に禁じたければ、禁じたらいでせう。戀愛の前には神の掟も糞もありませんか。」私は彼の怖しい眼に戦き乍ら何處の娘かしらと不安になりました。サリーは女と一緒にをりますフリーデルを見ました事がないと申してをります。若しや、レブランド・メール、イダさんの仰言いました莫迦らしい冗談が事實なのではございませんでせうか? おゝ、さうでございますなら、私は自分の知らぬ間に何時か男子達を逆上させてをりますことになりませんが、斯かる場合に私はどう致しましたなら宜しいのでございませう? それにこれが事實でございますなら、貴女へのお手紙や何かのお使者などはもう一切彼に頼めません。」もう歸つて頂戴。」私は怖くなつて彼をせき立てました。すると、彼は私を見直して、「漸く貴女も御自分の立場がお判りになりましたでせう。」

さう申し残して彼は去りました。初めて私は、私のイエズス様とだけになりました!

おゝ、筆にも言葉にも述べることが出来ません甘美な一時でございました。總ての苦

惱は霧散し、ローレンセンに對する恐怖も拭ひとられました! もう私は獨りぼつちではございません。私の甘美なる淨配、私の愛すべき甘美なる友は、私の側近くにいらつしやつて下さいます。リタの可哀さうな心は十字架のイエズス様をお抱き致しましてお恵を乞ひました。おゝ、吾が救主よ、御自身を犠牲になさいました御功德に依つて、主に對し奉つての、私の利己心を抑へますお恵をお與へ下さいませ。」レブランド・メール、今後私の救主は、私を御保護下さいます故、この間謀まれましたやうな悪事はもう今後ございませんでせうと存じます。睡眠の間にも、眼覺めてをります時にも、私はイエズス様のもののでございます! それに、レブランド・メール、此の十字架の御像は大層大きくて大層重うございます、フリーデルさへ満身の力を絞つて漸く掛けましたのですから。それ故、ストーヴに入れようとお考へになりましたも、もうママのお手には負へません。ローレンセンにしましても難しい——でございませう、あの瀟洒な紳士にはフリーデル程の腕力はございませんでせうから。レブランド・メール、私の友は私の側近くにいらつしやり、私は私の友の御許に侍いてをります。私は恰度イエズス様の御

眼と向ひ合ふ位置に金色を施しました小さい椅子を据ゑまして、私の出演致します劇の科白を暗誦致し乍らイエズス様にお聞せ致しました。イエズス様がお聴きになり、御覽になつて、演技にも對話にも些少なりとも御不満な個處がございましてはいけませんと私は戒心致してをります。パパはこの催に興味をお持ちになり、その時代、十八世紀の各種の風俗を描いてございませう。其等がこの前一寸見ましたが、イエズス様の御氣に召すやうな姿ではございませうでした。服装も髪も甚く華美な無鐵砲なものでございませう。私は本當に地味に且簡素に装ひまして出たいと思つてをります。學院時代の白い縮緬の服がございませうから、これを著まして、頭も學院當時のやうに致す心算でございませう。私は、私のイエズス様の外に誰方をもお愛し致さうとは思つてをりませう。劇に出ますのも、悪魔の手先からあの恐ろしい日迄避ける爲の手段に過ぎませうのです——それ故、その日には私のイエズス様は私を御庇護下さるものと思つてをります。

レブランド・メール、アマリアが獨唱致しますことを御存じでいらつしやいませう。先

程その歌をお稽古致しまして私のイエズス様にお聴せ致しました。その歌の節は聖歌集から拝借致しました。「慶し、恵まれたる早朝……」——アマリアはその歌をカルル・モールに贈りましたのでございませうが、私はこの歌をイエズス様にお獻げ致します。さればこそ、御聖體拝領の聖歌の節を使ひましても差支はございませうと思ひましたのでございませう。もう一つの獨唱、ヘクトールの別の歌は、聖金曜日の晩唱ひました「Sabat Ma tor」。「悲しみの聖母」の聖歌の節をお借り致しました。後でピアノに合せてみます心算でございませう。レブランド・メール、「御復活が濟みまして二週間経ちませう……」と言ふママのお言葉に私はまた顫へてをります。

然し、力を落しは致しません。私の愛すべきイエズス様は、我がものなり、我はイエズス様のものなればなり、でございませうから。

イエズス様の御許に懃ふべく私はイエズス様をお選び致しましたのでございませう。

また誰か参りますやうでございませう。

午後劇の練習に参りますから、その時にこのお手紙は出せませう。私はどのやうなこと

がございましたも、イエズス様に忠實を守り通します。

イエズス様より我を引離す者はあらず、イエズス様への忠實を破らんよりは、寧ろ死を望まむ！

リ
夕

「マリアの子」

修道院はすつかり目覚めました。生徒等の明い聲々、廊下を踏み鳴して走る音、小鳥のやうに朗かな笑聲、または爽やかなヴァイオリンの音……夜の帳は引開けられ、日は壯快に上つたのです。

……三枚の繪葉書……十字架、天使などの——その繪も熱ばんだ母様の瞳にぼかされて……文面にはあの無邪氣な處女が燃える双のやうに獨り悶へてゐる様が痛切に感じられるのでした。

『全くの孤獨の私に！ 恐しい日は徐々に近附いて……お祈り下さい。おゝ、祈つて

下さいませ！……お援け下さる方はイエズス様の外に一人もございません！ 白衣の日曜日、今日随分暫くぶりに御聖體を拜領致しました。どう言ふ氣持からでございましたのでせうか、不圖これが私の最後の御聖體拜領のやうに思へましたのでございます。おゝ、我がイエズス、我を捨て給はされ……』

御聖堂に騒々しい程衣摺の音が集つて來ます。間もなく第一の御ミサがあげられるのでした

最後の手紙！ それはさながら血と泪との綴書でした。隨處に判讀しかねる程に泪の痕が文字を流してゐました。

『四月十七日』

レブランド・メール、このお手紙は寢床の中で認めてをります。昨日の、昨日を濟ませまして倒れて了ひましたのです。昨夜商業俱樂部で劇がございましたが、その故でなく、それは何事もなかつたのでございましたが、その後、それからが宜しくございませんでし

た。私のイエズス様は私に附添つてゐて下さいますのでせうか。悪魔は力を揮ひ、申したくございません、彼も強引なのでございます。それ等が私を動かさうとして協力して襲つて参りましたのです。一寸前にママがお見えになりましたので、少し息ませて下さるやうにお願ひ致しました。然し、息みたいと申し乍らかうしてお手紙を書いてをりますのは果して正しいこととございませうか？ 然し、仕方がございません。私には貴女の外にお頼り出来ませぬ處がないのでございますから。貴女のみ、たゞ貴女お一人のみが私の心を御了解下さり、私の爲にお祈り下さいますのです。私には誰一人の援者もございませんのです。お、このやうな小さい私の負かされますのは當然でございます。手が顛へまして此の通でございます。どうぞ、マザーの仰言いました、「Topsy-turvy」(滅茶苦茶)な文字をお許し下さいませ。お、マリア平和學院、マリア平和學院、マリア平和學院！私は舞臺で一言だけ、苦しんでをります自分の心そのまゝに叫びました。「之で今僞られた愛の逃げ場所も見附かりましたと言ふものです——修道院か——イエズス・キリスト様の十字架こそ、僞られた愛の逃げ場所でございます。」

誰方にも此のお手紙を出して頂ける當がございません。イダさんが訪ねて下さいませばポストに入れて頂きませう。先刻からひつきりなしに呼鈴が鳴つて人々が、昨夜の觀衆が私に花束を贈りに来てくれます。お、死んでイエズス様のお側にをります私に、私の柩の上にかうして花束を飾つて下さるのでございましたなら、どのやうに嬉しうございませう。

疼いてをります此の腫れました腕は昨夜一人の學生に亂暴を働かれました爲でございます。然し、ローレンセンには假令殺されましても、最後の息のある中は私は彼の申出を承諾致しません。

レブランド・メール、私は昨夜の劇に就いてお知らせする心算でございました。此の前のお手紙に貴女は劇を期待していらつしやる由お書きでございましたけれども、實はお知らせ致します程の氣力も今ございません。レブランド・メール、その爲私はお母様に虐められ、誰方も私の態度が煽情的でございましたと仰言いますのです。私が、お粗末な白い服で、顔にパウダーもつけませんでしたのは逆効果を狙ひ、男達を煽りますやう

とのたくらみからであると言はれますし、後で起りました騒もその故であると仰言つて私をママはお責めになります。然し、私は出来るだけ華美にならないやうにと心掛けましたのでした。それなら私の獨唱も煽情的でございました譯です。然し、節は歌詞とよく調和致してをりましたから聖歌から拜借致しましたのです。レブランド・メール、ヘクトールの別の唄に、"Sabat Mater"の節を使ひまして悪うございましたでせうか？ 愛すべきイエズス様、宜しくございませんでしたでせうか？ そして、他に唱つてをりました際にも、爾と爾の永遠の美とを想像致してをりましたは宜しくございませんでしたでせうか？ おゝ、イエズス様、可哀さうなリタは何を致しましたも何時もそれは自分で自分の首を締めます繩になつて了ひます！ おゝ、レブランド・メール、私がホーム・シックネスで死にさうなのを御存じでございませうか？ 修道院か——イエズス・キリスト様の十字架こそ私の良き逃げ場所でございますが、その他には一つの慰もございません！ 愛すべきイエズス様、私は誠心誠意爾の御心をお傷め致さぬやう努めて参りましたのでございますから、私の事をお怒りになつてなどいらつしやらないでございませう！

レブランド・メール、イエズス様が私をお見守り下さり、苦しい私の心の隅まで御存じのことは私の唯一の慰でございます！ おゝ、イエズス様、私をお護り下さいませ。爾の偉大なるかの聖人の——おゝ、何も斯も彼等は焼き捨てて了ひました。少し頭を鎮めます。

レブランド・メール、總稽古は面白くて、随分笑はされました。皆さんは早々とその可笑しい扮装をこらしていらつしやいました。モーリツさんは盗賊コジンスキイにお扮したなつて童話の薔薇姫の王子のやうにお飾り立てになりました。その外の方達もそれぞれ顔をお作りになり、盗賊は暗灰色の嫌らしい顔に、赤、紫の鼻を隈取つてをりました——お祖父様とパパとがお見えになり、私をお褒め下さいました。然し、私は私の出演の扮装に關します毀譽褒貶など問題に致してをりません。それよりも亦お祖父様が百五十圓下さいましたので、私は大層嬉しくなりました。お家からは二十圓のお小遣しか頂いてをりませんのですから——此の百五十圓はママに取上げられませんでしたので、藏つて置きまして、いざと云ふ場合に私はそれで學院に——然し、私はもうお家を容易に出

られさうもございません。それに恐しい刑事の事を考へますと……總稽古の際に著ました私の服を御覽になつてヒルシュマンさんは「リタさん、その服は綺麗ですが、ロココ式ではありませんね。頸までのカラーは一寸役柄上工合が悪いと思ひます、少し肌の出る方がいゝのですが?」——「私そのやうなのは嫌でございますから、此の服に致しましたのです。」お稽古の終頃、外國の將校達や背廣の方がぞろぞろと入つていらつしやいました。その瞬間、私は何となく不安を感じました。然し、詳しい事は後で申し上げます。背廣の一人の方でございましたが、薄暗くてお顔はよく判りませんでしたけれども、お稽古を終へまして歸りかけました時に「確に彼奴だ。恥知らず奴! 青い實の中から戀癡れてゐる。」と私に大聲でお浴びせになりました。レブランド・メール、どのやうな意味でございませう。分りません乍らも酷く罵られましたやうに覺えました。そして、其の男の方がどれ程侮蔑的な、卑下なさつた眼眸で私を御覽になつてをりましたかは、見えなくとも瞭然と感じられました。その時、私はユデア人に混つて劇を致す爲に斯く罵られますものと考へましたが、今日本當の理由が判りました。ジーグムンドさんに此の見物人達

のことをお訊ね致しましたら「セルビアの將校達と大學生とです」とのお答でした。それで、漸く安心致しましたものゝ(私には大學生の知己がございませんから)どうしてでございませうか、あの得體の知れませんが其のお嗚りになつた聲とを忘れることが出来ませんでした。お家では又夕立を控へてをりますやうな無氣味な沈黙が漲つてをりました。私は皆が何を考へていらつしやいましたのか良く分つてをりました。即ち、例の八週間の期限が終りましたのでございます。レブランド・メール、その日、私は劇に要ります買物を口實に三度外に出致しました。十八世紀の婦人が顔につけました小さいお膏藥の代りに、黒い貼膏藥を買ひましたのです。私は莫迦らしいユデア人の學生達が、私にたわけた感歎を寄せませんやうにと、それで顔を見苦しく致しませうと考へましたのです。それから短靴の紐も必要でございました。お家に私はママとだけ取残されてをりませんやうに用心致しましたのです。處が、ママは切符を四枚などとパパにお話していらつしやいましたので、私は頭へて了ひました。四枚と申せば、お祖父様に一枚、ママの分、パパの分——!! そして——の爲でございませう。

お、レブランド・メール、会場に参ります前に、私は白い舞臺衣裳を着まして、（これは卒業式に用ひました服でございます。）私の十字架の前に跪き、一心にお祈り致しました。お、我がイエズス様、劇の演ぜられます間私に因つて一人でも悪い考を起しませんやうに、又、私が悪魔に負けませんやうにお護り下さいませー」

著飾りましたユウデットは、かのホロフェルネスを殺しに参ります時に——今ではそのやうなことは許されませんが——祈つてをります。私がお家から離られますやう、彼に逢はずに済みますやう、彼が私を断念めてくれますやう——お、私を断念めてくれませんでしたなら、私は蘇生の思が致しますけれど………

劇は夜七時から始りました。

また少し氣持が變になりましたから、一寸やすみます。

「……………」

氣持がよくなりましたから續けます。

パパ達は少しお遅れになりますので、私は一足先にサリーと馬車で商業倶楽部に参り

ました。

レブランド・メール、私が、劇の衣裳を、あの大好きな學院の白い服を、お家で著換へて参りましたのはやはり宜しうございました。ヒルシュマンさんは幾度か皆の樂屋の外に婦人の爲に別室がとつてあると仰言いましたので、私はそこを覗きましたが、私には用がございませんでした。髪も結つて参りましたし、装身具はつけない事にきめてをりましたのです。然し、お祖父様がせて胸飾の一つ位なければと折角仰言いましたので、それではと、以前クリスマスにお祖父様から頂きました胸飾を著けました。それは舊式な色繪（お母様が幼児に接吻していらつしやる處の圖）の縁を眞珠と土耳古王とで飾つてあります品でございます。そして、お祖父様から頂きました可愛い指環を一箇簞めました。その他は何も用ひませんでした——髪は出来るだけ簡單に致しまして、小さい黒いリボンを左に結びましただけでございました。レブランド・メール、私が会場に参りました時には、最早恐しい程の人々が立つてをりました。それを私の人氣が有る爲ですとのジグムンドさんのお言葉は何時もお世辭で、これは脚本の人氣がでございますのです。ジ

「ジグムンドさんは嘘を仰言いましたのでございます！ 多分學生の親戚やお友達などが押寄せましたのでございませう。誰にも見られませずに私は裏門から楽屋に巧く入ることができました。盗賊達に扮する方は皆さん服装を既にお著けになつて顔を作つていらつしやる處でしたが、私はその異様な形相を薄氣味悪く思ひました。皆さんは私を御覽になつて一度にお騒ぎ立てになりました——ジグムンドさんは私に澤山の繪をお示しになつて、群盗時代の婦人がどれも肌を露してゐた事を立證なさり、私にその通りにして欲しい御様子でしたが、私は「その頃の御婦人はさう云ふ服装をお好みになりましたのでせうが、私は嫌でございませう」と申しました。それで、ジグムンドさんはお断念になつて了ひました。ジグムンドさんはモール伯爵にお扮しになつて、白い、長いお髯に黒い天鵞絨の室内著を召し、髪を後に緑の紐で蝶々結になさつていらつしやいました。コステイさんはフランツ・モールの役で、緑の服、赤いチョッキ、縮れ髪を立てましたやうな鬘をつけていらつしやいました。シュレジンガさんは盗賊の頭のカール・モールで、長靴に拍車をつけ、天鵞絨の縁廣の中折帽、天鵞絨の服、革帯に短刀をおさしになり、長

い洋剣をつけていらつしやいました。私が會場に著きました時は始ります十五分程前でございました。何方もその扮装振!! を私に批評して欲しい御様子でしたが、私は直ぐ私の部屋として割當てられてをります楽屋に入つて了ひました。そこには黒衣を勤めて下さる方が既にいらつしつてゐました。親切な方で、私の顔が餘り青過ぎますから頬紅をつける方が好いと注意して下さいましたが、私は氣にもかけませずにそのまゝに致して置きました。私はロザリオのお祈を誦へ乍ら「おゝ、ローレンセンが参りませんやうに、お稽古の際に参りましたあの變な人が現れませんやうに。」と一心に念じてをりました。何となく私は恐い不幸が惹起されますやうな氣が其の時致しましたのです。舞臺の方では音楽が起り、コステイさんのフランツ・モールは終のない話を始め、間もなく盗賊共の喧騒横溢致す酒場の様子が傳つて参りました。アマリアの出場は第二幕でございませう。最初はフランツ・モールと共に出ますのです。御存じの通り、そこでアマリアはフランツ・モールに「裏切者、恐い憎らしい奴。」と罵り且怒ります。此の科白は随分過激な言葉でございませう！ レベランド・メール、二番目の鈴が鳴りまして私が出ます

と、一齊に拍手が起りました。(ジグムンドさんは豫め観衆に注文なさつてお置きになつたのでございませう。)暗い場内は、恐しく暗うございしましたが、千以上の頭の蠢くのが判りました。私は直ぐダイヤモンドの輝によつてママを一番前列に見付けましたが、その隣に——ママの側に、眞黒でございましたが、その姿、様子でローレンセンのをりますることが分りました! 貴女も御存じのやうに私の科白は下手なのでございますが、今眼の前に彼を見ますと私の科白は初め聞取れせん程の聲でございましたが、フランツ・モールに向ひまして、絶対にその妻にならないと宣告致します處で、私の聲は意外にも大きな怒號に變つて了りましたので、コステイさんのモールは吃驚なさつて私に眼をお瞠りになりました。その時、お、私は本當に泣いてをりました。飾に持つてをりましたレースの手巾はしつとり濡れてをりました——コステイさんは吃つたり、つかへたりなさつて氣を抜かれた態で私を瞞めていらつしやいました。観客席からは拍手が引續き起りました。然し、唯一人の方だけは拍手をなさいませんでしたことを判然と知つてをります。その方は涙を流してゐるのはアマリアではなくして、リタ自身でございませうこと

を克く御承知でございませうから。

此の幕の終にアマリアが身につけてをります装身具を抛つ場面がございませう。處が、私は小さい舊式の胸飾の外何もつけてをりませんでしたので——私にこれをもぎとり、「ええ、こんな贅澤な飾物なぞ、埃の中に捨てて了へ。」——お、私は「飾はイエズス様だけのもの、それも金ではなく、茨の飾です——」コステイさんは胸飾を拾つて私に返しておよこしになりました——これは劇の仕草にはございませうことでしたが、私をお慰みになつてのこととございましたのでせう。

幕間には誰も彼も私に莫迦らしいお世辭をお並べになり、観客席からは氣狂ひ染みだした拍手が續いて聞えてをりました——その時、レブランド・メーラー! いきなりその拍手を突裂いて、一條の聲が、あの得體の知れない、私の恐れてをりました男の聲が流れて参りました。その聲はどこか破られたサーリスさんのお聲のやうに思はれました。「氣をつけろ! 面は綺麗だが、内は腐り切つてゐるだから。」他の方にもこの聲がお聞き取れなくなりましたかどうか存じませんが、私は全身が顫へ立つて参りまして、舞臺をそれ以上續

けます爲に必死で自分を勇氣附けねばなりません。ヘルマンとフランツ・モールとは最早出てをり、續いて老伯爵も出場致しました。前の二人が伯爵にカールの死の虚報を傳へますのです。私は恐しい衝動に心を亂してをりましたが、最早私の出番なのでございました。私が舞臺に現れますと、又場内は狂氣致しましたかのやうに手を打ち、足を踏み鳴しました。すると、あの恐しい陰の男の方はシーッ、シーッと嘲弄なさいました。私はその聲を自分の心臓の鼓動のやうに感じました。今度は他の方々にもお聴えになつたのは確です。この場面に一箇處感動させます處がございます。老伯爵がアマリアに「可哀さうなのはお前だ。わしはお前の青春の悦を悉く取上げて了つたな。」その折、私はローレンセンと一緒に来てをります私の両親と私の不幸な生活とをひしと思ひ泛べました。然し、これは私の過失でございませうか？そして私はヘキトールの別の歌を、Sabat Materの節に依つて唱ひました。その時、またも場内は湧き立ちました。お、愛すべき母様、此の世俗的な歌詞に、此の尊い節を移しまして、母様、唱つてをります際に、私は悲しみの聖母を偲び、聖金曜日晩御聖堂にをりますやうな氣持で

ございました。私の可哀さうな心は今激しく思ひ焦れてをります。お、マリア平和學院よ!!!

第三幕に私がギターを肩に掛けて出ますと、或方は白い薔薇の束をお投げになり、また、或方は花籠を、然も、それは花で鳥の巢を作り、其處に白い可愛い鳩が入つてをります物を、お投げになりました。又、一入の騒々しさでございましたので、私は腰を下して暫く鎮るのを待ちました——私はギターを良く弾けません、四回だけグラ夫人の處にお稽古に通つただけでございますから。其故、二、三度絃を間違へて了ひました。私の眼には湧き出ますやうに涙が溢れました。そして、私は御聖體拜領の美しい聖歌の節を借りましたアマリアの愛慕の歌を唱つたのでございました。

「ワルハラに悦に溢れた天使の美しさ
數あまたなる若人に勝る君が麗かさ……」

レブランド・メール、聖アルフォンソの「御聖體訪問」の中にイエズス様に就いて之に似ましたお言葉がございます。私はイエズス様を心に抱いて唱つてをりました。ですか

ら「物狂ほしき悦」の處を「幸なる悦」と唱ひました。私にはこの方がずつと適當してをりましたのでございます——場内からは「アン・コール、アン・コール、アン・コール」と云ふ叫が續いてをりました。それで、シュレジンガさんが私の手を把つて舞臺前まで伴ひ、「リタさん、折角ですからどうぞ。」とお促しになりましたが、私は涙で眼が霞み、聲がつまつて了ひ、二度と唱へませんでした。

その折、又復あのサーリスさんに似通ひました聲が聴えました。「空泪で釣る呪ふべき猫奴！」私は慄然と致しまして、さつと氣持が悪くなりました。私は戀愛の幾場面かを演りましたので、疲れきつてをりました。

サーリスさんのやうな聲をお有ちの人、と自分を慰めてみましたが、またお歿りになつたサーリスさんが私をお呪ひになり、私をお罰しにならうとお現れになりましたやうにも思はれました。

お、レブランド・メール、そしてあのローレンセン！彼の眼は宛ら二振の短刀のやうに光つてをりました。私ではなく、彼こそサーリスさんを無きものに致しましたので

はございませんか!?! 私はその時本當にどうかなるのではないかと思ひました！——次いで盜賊の團長カール・モールの場面でございました。シュレジンガさんは科白をお忘れになりますと、きまつて私の顔をお見詰めになるのです。私の悲惨な心の裡をすつかり見取になりましたことせう。盜賊カール・モールの言葉に「儂のアマリアは全く可哀さうです、本當に不幸な女です。」と申すのがございますが、眞實その通りですと思ひました。その後、又ヘクトールの別の歌なのでございます。「ヘクトールよ、我を永久に振捨てて行き給ふや……」とまで唱ひまして、私の咽喉は潰れましたのです！場内は悪魔が憑きましたかのやうに涌き騒ぎ、足を踏み鳴して、滅茶苦茶に拍手を致しました。憶ひますのに、私の此の悲惨な心を知り、悪魔が彼等を煽動致しましたのでございませう。本當に私の身の不幸は、彼等の御氣に召しましたやうでございました！

その場面が終りますと、外國の軍装をなすつた毛皮襟のマントを召した方が、舞臺に進み出ていらつしやいました。將校の帽子には蒼鷺の羽が澤山ついてをりました。其の方は薔薇を啄んでをりますダイヤモンドの小鳥を慰撫に私にお捧げ下さいました。御禮と共に

にコステイさんはそれをお受取りになつて私にお渡しになりました。名刺がそれに添へてございましたが、私はそのやうなものに少しの關心も持てませんでした。お祖父様も舞臺へお上りになつて褒めて下さいました。その後からローレンセンもついて参りまして白百合の束を出して何か申しましたやうでしたが、彼の言ふ事など一言も聴く耳を私は有つてをりません。私は其の場に耐へ切れなくなりましたが、なかなか幕を降してくれませんでした！幕が降されますや否や、私は駆け込みますやうに樂屋に入り、念珠を握り緊めました。そこへコステイさんがあのダイヤモンドの小鳥をもつて入つていらつしやり「リタさん、これを贈つた方を御存じですか？」——「存じません。それを苦學生の爲にお使ひ下さい。そのやうなもの私欲しくございませんから。」——「此の贈り主が餘り行狀がよくないからですか？」——「私は何の事か判りません儘に「小鳥も百合も皆お持ち下さい。」——「リタさん、セルビアの王様でいらつしやるのですよ！——それはさうと、ウインの上流社會は貴女を観る爲に（又このやうな出鱈目を仰言います）ヨハネ町は息苦しい程人が詰つてゐますよ。警察官は整理に大重です。」——「それぢや強盜

でも現れましたのでございませう、それでなければ何か事件でも起りましたのでございませう。」私はもう芝居を止めまして裏門から逃げ出したいたやうな氣持でございました。自分の心の苦しみを人々の好奇心に晒してゐるのがたまらなく嫌になつて、これ以上續けまじ氣力が喪失してしまいました——私がこのやうな氣持で樂屋に居りました時、舞臺では盜賊達が愉快氣に彼等の唄を高唱してをりました。「自由に生きるが、おれ等の暮しよ、面白だらけの暮し方よ、夜の寢床は森の中……」老伯爵は森の奥の牢屋から救ひ出され、悪人フランツ・モールがダニエルを叱責してゐる時が私の最後の出場なのでございます。然し、私は動けません程羞しうございました！「呪ふべき猫奴」とあの聲の磔が又飛んで参りましたのです。それに恐しいローレンセンがまた舞臺近くに寄つて参りました。そして————

レブランド・メール、駄目でございます。又眩暈が致して参りました。眼の前に黒い雲が流れ出して書き續けられません。おゝ、酷い人、荒々しく私の腕をとらへて痛めつけましたのです。そしてその他にも……

私は電氣を點けずに、蠟燭を灯してをりますのです。電氣の光で書いてをりますと、お手紙を認めてをりますことを感付かれますから。

レブランド・メールは「群盗」の筋を御存じでございませう。盗賊モールは年老いた父親を森の牢屋から救ひ出し、フランツ・モールは自殺して果て、盗賊はお城に火を放つのでございます。そこへアマリアは髪を振亂して飛んで参ります。盗賊はアマリアを囹に致しましたのです。私は髪を振亂すのが嫌でございましたから解きませんでした。コステイさんとジグムンドさんとは頻に私に髪を解きますやうにお勧めになりましたが、さう言はれますれば、言はれます程嫌になりました。然し、私が出ますと、場内は崩れるやうな喧騒、叫喚、拍手の埒塙と化しました。「メッサリナ萬歳！」（メッサリナは姪供と陰謀とで有名な或ローマ皇帝の妻）——私の膝は顛へ出して顛が止りませんでした。「メッサリナ」これが私の別名なのでございます。お破りになりましたサーリスさんの柩の側でも、私は同じ名をそのお父様から被りましたのでございます。その爲に私は混亂して参りまして何を申してをりますのやら分らなくなつて了りました。總稽古の時に

盗賊の前になど莫迦らしくて、跪きませんでしたのに、その時は力が抜落ちて了ひ、傍らの切株に思はず知らず腰を下して了りました。それで、場面が一寸狂つて了りました。老伯爵が私の手に接吻なさつてをります時に、盗賊モールは洋劍を抜いて「モールの戀人は、モールの手で殺してやる。」と言つて洋劍で私を刺し殺すのでございますが、洋劍が離れ過ぎて了りました。終りました瞬間私は後の衝立に頭を當てましたまゝ一時喪心が致しましたやうでございました。然し、直ぐ、ドンドン床を踏み鳴したり、金切聲で叫ぶ場内の騒擾に我に返りました。シュレジンガさんは私に「さあ、いらつしやい、私達は挨拶しなければなりません。」と仰言つて舞臺の前へ出ますやうに私をお促しになりました。私達が舞臺の前へ出ますと、一齊にお花の雨が降りかゝつて参りました。

レブランド・メール、私は舞臺上に脚光を浴び乍ら、暗がりの中に喧騒を極めてをります観衆をよそに、舞臺近くに陣取つた、廣い白い胸當と黄色い毒の花とをつけてをりますローレンセンばかりを見詰めてをりました。宛ら蛇に見込まれました小鳥のやうに、恐怖し乍ら視線を外すことができませんでした。ローレンセンは何かを掴へますかのやう

に手を挙げました。彼の餌食は可哀さうなリタでございます。「今、今こそお前は己のものだ。」と叫んでゐるかのやうに受取られました。私は、おゝ、これは苦しいことでございます。五回も私は観衆に挨拶させられました。最初はシュレジンガさんと一緒にございましたが、後はジグムンドさんやコステイさんと共にございまして。お母様、愛すべきお母様！このやうな苦しい心で、にこやかに頬笑を湛へ、嬉しうに感謝の御挨拶をさせられますのは本當に辛いことでございます。

拍手は歇まず、場内は何時鎮るとも分りませんでしたので、私は樂屋へ逃げ戻りました。黒衣の役をお勤めになりましたカーン夫人は御自分の所有品を整理なさつていらつしやいましたので、私は眩暈が致しまして、群衆の雜音が恐ろしいのでございまして、御願ひ致し度い旨夫人にお頼み致しました。實はこれも確に一つの理由ではございしたが、おゝ、貴女は最早お察しのことでございます。私は兩親と彼とを恐れてをりましたのでございます。彼と同行致しましたなら、おゝ、その時こそ彼はあの私の恐れてをります返答を迫るでございますから。今日はその約束の期日でございます。今日中に

さへ返答を要求されませんければ、私は大丈夫のやうな氣が致しましたのです。

コステイさんと學生達とが私の樂屋部屋に入つていらつしやいましたので、私は早速追出してしまひました。コステイさんは、「人々が貴女を待ち受けてゐますよ。それから御兩親とローレンセンさんとは場内の食堂に貴女を待ちですし、お祖父様は他の方と御一緒に圓形演技場においでになりました。」——私は親達にも逢はず、誰にも氣附かれませんがやうにカーン夫人と裏門からそつとお家に歸る心算でございました。それで、コステイさんに、「裏のお庭にも人がをりますの？」とお訊ね致しますと、「場内も廊下も裏門の庭も何處も人で溢れてゐますよ。」こつそり脱け出す心算でございましたから、止むを得ず、私は暫く待つ事に致しました。騒を起しませば食堂の親達に直ぐ感附かれてしまひます。でも、私は獨り取残されませんやうにカーン夫人にお頼み致しました。夫人は十五分程お待ち下さいましたのですが、「私一寸木戸で細いお金に替へて頂いて來ますから。」と仰言つて、態よく私をお残しになつてしまひました。おゝ、レブランド・メー、その後で生涯忘れられませんかやうな、心に烙き附けられました事件が起りましたので

す。私は臺付鏡の前に腰掛けまして念珠を繰り乍ら、カイン夫人を待つてをりましたのですが、遂に夫人はお戻りになりませんでした——その時選音と共に拍車の鳴る音が聴えて参り、フランス語で「彼の女は何處にゐる？」と仰言り乍ら二人の將校が室に入つていらつしやいました。どのやうな方か見分もつきません中に、一人の方がつかつかと私の所へお歩み寄りになりました。そのお顔は日焼がしてをり、蒼鷺の羽の軍帽を手になさつて、胸には一杯勳章をつけていらつしやいました。其の軍人はフランス語で「奥さん、私は貴女の事を案じてお探ねしてをりましたのです。貴女はダイヤモンドの小鳥をお受取りになりましたでせう？」私はその方の唐突な無遠慮さに狼狽して「御免下さい。一體貴方は誰方であらうしやいますか？ カイン夫人、早く来て下さい！」と叫びました。

私は獨りきりでございましたのですから。すると、後の方が「奥さん、貴方はセルビアの王様に拜調なさつていらつしやるのですよ。」と仰言いました。然し、私は其處にいらつしやる方がどのやうな方にせよ、更に聲を張上げまして「カイン夫人、おいで下さい！」と援を求めました。すると、勳章を澤山つけていらつしやる方はフランス語で「奥

さん、私はお世辭屋ではありません。然し、貴女を絶世の佳人と讃へずにはをられませぬ。」と仰言りながら、突如私をお抱き寄せになりました、あのカロロニデスさんがなさいましたやうに。私は獨りきりだったのでございます。不圖見ますと、後の方が扉の鍵をおかけにならうとなさつてゐる様子が鏡の中に映りました。レブランド・メール、私は聲を絞つて「お出下さい。貴方が事實お話のやうな方でございましたなら、可弱い娘をお苦しめにならないで下さい。貴方の尊嚴さにもお似合はしくございません！」彼は尙も私を離さうとなさらず、「何故そのやうに恐れますか、わが愛人よ、私は貴女を拜みます。」——「吾がイエズス、我を援け給へ」と私は切願致しました。すると、お、その折イエズス様はかけつけて下さいました。然し——どのやうに！ 外から扉は倒れるやうに開けられ、そして鏡の中に二番目の將校の側に、三番目の恐しい男が映りましたのです。その男は髪の毛までサリスさんそつくりでしたが、只少しお若うございました。これがあの蔭の男の方であると私は直感致しました。そして今かうして明みに於いて見ました瞬間、その方はサリスさんの弟様で、フェルデスで私を酷く罵倒なさいました

學生の方でした事が分りました。あの方は——私はこれ迄これ程怒つてゐる容貌を見ました事がございません。「お前を外に待つて、待ちあぐんだのも道理だ。此處で何しろ楽しい逢瀬つて處だからな、よし、それぢや思ひ知らせてやる。」セルビアの王様と名乗つた將校は私をお離れになりましたが、今度は恐しい權幕の彼が迫り、矢庭に私の腕を捉へて燃えるが如き憤怒を以て私を面罵なさいました。「お前は僕の兄さんを殺してつたな、僕の親達はお前の空泪を眞に受けたけれども、僕だけは騙されはしないぞ！やはり僕の考は間違つてゐなかつた！お前は今日こそすつかり正體を現した。あの時は半分隠してゐたのだ。この毒婦奴！」そしてもつと下卑た言葉をお使ひになりましたが、私には其のお言葉が判然と解りませんでした。私は必死に歎願致しますやうに「どうぞお許し下さい。あの時故意に私は御本を落しましたものではございませんのです。」——「お前はその甘美い聲でもつと男達を有頂天にさせるが、お前は先刻天使の姿を借りてウインの市民を熱狂させたが、僕だけは、僕は騙されはしないぞ。」——一人の將校、あの王様が近寄つていらつしやつて、フランス語で「わしはこの貴婦人を侮辱する事を許

さんぞ。」とおきめつけになりましたが、若いサーリスさんは無氣味に哄笑なさつて「おや、もうこれは閣下のものになつたのですか？」

お、私の心臓の鼓動は凍る思でございました。「私は劇などに出たくございませんでしたのですが……」とだけ私は辛うじて呟きました。その時彼はいきなり小さな瓶をポケットから取出し、キルクの栓を抜き乍ら齒を軋ませつつ「これ以上お前が人を不幸に出来ないやうに醜惡い生涯の烙印を押してやる。」私は椅子に體を支へ、掌を合せて「愛すべき聖母よ、貴女が私を護つて下さいましたサーリスさんになさいました如く、私をも貴女の御許にお引取り下さいませ。」と聲を擧げてお祈り致しました。すると、若いサーリスさんは「神様に謝罪し給へ、兄さんの名前はお前を救ふだらう。」鏡の中に手が小さい瓶をお投げになるのが寫りましたと思ひますや、お部屋に空息致すやうな異臭がひろがり、同時に二人の將校は——その中の一人は洋劍で横なぐりにサーリスさんをお叩きになりましたが、彼はそれさへお感じにならない御様子でした——外に向つて叫び聲を擧げ、「助けてくれ、助けてくれ！」そして愈々最後の最も酷い事態へと進展致しましたの

でした。外から激しく扉が開けられ、遂に現れるべき悪魔が入つて参りました。「どうしたのです、リタさん、どうかしたのですか？」若いサーリスさんが名刺を出していらつしやるのが、半ば夢中の私にも判りました。「この女に復讐したかつたが、同情が起つて了つた。」——セルビア王と稱ばれていらつしやる將校は「わしはこのマドンナ(!!!)に敬意を表したいと思つたのですが、この狂人が暴れ込んで来たのです。」ローレンセンは「皆出て下さい。この人は私の婚約者です。私の許婚者を辱めたり、危害を加へる事は許しませんぞ。」そして彼は私を抱きかゝへたのです。おゝ、これは無力の私にからみつく蛇その儘でございました。「愛するリタさん、さあ、お母さん達の處へ行きませう。」——そして若いサーリスさんに向つて「私は君と決闘しようかと思つたが、女子供を嚇すやうな奴は卑下してやるより他に仕方がない。」今度はあの王様に向直つて叩頭をして「此の麗人の心が未だ定つてをりませんでしたなら、悦んで陛下の御旨に副ひも致しませうが、遺憾乍ら既に私の許婚者なのでございます。陛下は女優かと思召したかは存じませんが、立派な銀行家の令嬢でございます。今の事は何も私は見ませんでした

のですから、存ぜぬことに致して置ませう。」

おゝ、レブランド・メール、この際私はどう致しましたら宜しうございましたのでせう。何と申しましたら宜しかつたのでございませうか。此の悪魔は、私に邪心をもつて近附いた闖入者を悉く言ひくるめて私の救主のやうな役を致しましたけれども、彼こそ、誰よりも悪辣なのでございます！ 私は鋭く、「フォン・ローレンセンさん、失禮ですが、私は貴方の許婚者ではございません。そのやうな氣持さへ私は有つて居りません。」すると、二人のセルビア人は色をなして私語き、若いサーリスさんはローレンセンと私とに卑下しきつた眼眸をお注ぎになり、「貴方は僕の兄と決闘までして此の女を奪ひ乍ら、忽ち又捨てられたのですね。いや、お芽出度う！ 我が賢明なる兄は最良なる時期を選べりか。」ローレンセンは彼を眼で威嚇しながら私の腕を捉へ、力に委せて引摺るやうに暗い舞臺を抜けて客席へ引立てて行き、私に向つて「今貴女の一身がどのやうな危険に曝されてゐたかお解りでしたか？ これで私は二度も貴女の體の美と純潔とを救つてゐますよ——然し、私は貴女の許婚者ではありません。」それで、彼は私を親

達のをりますす食堂に案内し乍ら言葉少なに、冷く、「今日が約束の日でしたね。私は自分の権利を抛棄は致しませんよ。貴女がこれ以上お延しになりますのなら、貴女と三人の男達との醜態をウイン市中に暴露して了ひます。」

親達は私を迎に立上りました處で、彼は、「いや、危い處でしたよ。愛する私のリタさん(!!!)を惨殺しようとした奴がわたのです。リタさんの名譽と御體とに對してです。」
 パパは愕然として、「惨殺！ 誰です？」——「不良學生で、例のサーリスの弟と例の東の疑問の皇帝とで、劇の時に私達の側にをりました、あれです。」
 パパは憤然となさつて舞臺裏へお急ぎになりましたが、直ぐ激しい聲が響いて参りました。ローレンセンはママに「御禮と致しましてもお約束通りリタさんに承諾して頂きたいのですが、これはあながち無理なお願ではないと思ひますが。」——「お、貴方は何時も私達の危急を救ふ天使でいらつしやいます。どのやうな事でも御遠慮なく仰言つて頂きますせう。」
 私は蹙からぐんぐん力が抜け落ちて行きますかのやうに感じました。「私は今倒れさうでございます。兎に角、二週間程待つて下さい！」その時二人のセルビアの將校達は倉皇と私

達の側を歩き過ぎ、若いサーリスさんは、エワを樂園から追出しました天使のやうに後につゞいていらつしやいました。ローレンセンはこの人等を指し乍らそつとママに「あの三人とリタさんとが一緒だつたのですよ。然し、御主人の前にそこまで判然とは申しかねましたのです。」

すると、ママは私にまた非難をお浴せかけになりました。私は此の怖しい男から離れようと致しましたが、彼は堅く私の手を掴み、引寄せて囁きました。「貴女は私の妻になりますか。それとも、ミラノ王のオダリスケ(土耳其宮廷の白人婢妾)のやうな貴女の假面を削いで貰ひたいのですか、私の手中に其の鍵があるのですよ。」——

「私は貴方の妻になります位なら、死を望みます。」
 パパが戻つておいでになり、「獨逸語の解らない王様だ。副官はお嬢様に敬意を表しに來たと辯解しをつた。あの學生ときたら少しどうかしてゐるやうだ。それから此の間の決闘のこと、もう止めなさい！ 實際の娘の知つたことぢやないからな。」
 然し、その時パパは「その外はお前の過失だ。」と仰言るかのやうに私を鋭くお見詰めにりました。

ローレンセンは悪魔のやうな笑を洩して「全く誰しも自分に罪ありとは言ひたくありませんから。まあ、一寸御覽下さい、この方がどのやうな危険に曝されていらつしやいましたかを。」

さう申して私の服の裳を指して「御覽下さい、硫酸鹽の跡です。」私はこの嫌らしい話に一層氣持が悪くなつて了ひました。パパは私を抱いて下さいましたが、一言もお言葉をかけて下さいませんでした。彼も亦私のことでどれ程腹を立ててをりますかがよく解りました。お、私がどのやうな悪い事を致しましたのでせう？ 私はどのやうにお家へ歸りましたのか、何も憶えてをりません！——パパとローレンセンとが私を護衛致してくれますかのやうに兩側に附添ひ、ママはしきりに私に非難の聲を浴せていらつしやいました。例へば、私が何故男ばかりの中に混つて劇をしたのかとか、そのやうな華美な服装をするから男達がつけ入つてくるとか、厚顔しい娘が破廉恥な振舞をされるのは當然であるとか。レブランド・メール、ローレンセンは馬車に乗ります際、私に寄り添ひ、蛇のやうに囁きました。「明日になつて貴女は思ひ知るでせう。私はこれ以上

待ちは致しませんからね。」

まあ、彼は一體どうだと申すのでございませう？ 私がどのやうな恥しいことを致してをりましたのでせう？ 私の何處が厚顔しかつたのでございませうか？ レブランド・メール、昨夜私は甚く發熱致しまして床に就きましたのです。今も同じでございます。腕がづきづき痛んでをりますが、私は昨日の出来事と今日起るべき事とを豫測致しまして、恐しさに甚く顫へてをります！

お、レブランド・メール、あの悪人は「明日まで」と申しました。それが最早今日でございます。オダリスケとはどのやうの意味でございませうか？

もう大分時刻も経つてをりますが、イダさんは今日お見えになりませんのでせうか。お祖父様は寄席にお出掛になりました。此のお手紙をどうして出させよう？ 私が起きませう。

お、我がイエズス様よ、爾は十字架の上にて慈愛の溢るる眼眸で私を見守つていらつしやいます。どうぞ可哀さうなリタをお慰み下さいませ。あなたの他にお頼り致します

方がございません。

レベランド・メール、もう擱筆致します。掌を合せて私をお捨て下さいませんかやうに
とお願ひ致してをります。私が承諾致さなければ公表すると彼は申しましたが、彼の公
表致す事柄は皆眞實ではございません、若しも何か貴女のお耳に達しましたなら、お、
私のお母様、「可哀さうな不倅なりタ、私の子供の中で一番不幸です。いゝえ、リ
タの噂は何れも事實ではない。」とお思ひ下さいませ。

カーン夫人さへおいで下さいましたら、あの方が證言して下さいましたものを。

然し、愛すべき私のイエズス様は其の場を正に御覽になつていらつしやいました。可
哀さうな無實のリタがどれ程苦しめられてをりますかを良く御存じでございます。

ああ、呼鈴が鳴つてをります。誰かの建音が近付いて参ります。

レベランド・メール、私は顛へてをります。彼が、彼が—— どう致しませう。
錠を下します、

私は……………

晚八時。

今起き出まして文机に向つてをります。

お、何處までも彼は私に追迫して参ります！

私は承諾致しませんでした。断りました。彼はウイン中に私の悪名を流布すると嚇
しましたが、私は彼を拒絶致しました。すると、彼の方から後二週間延期を申し出まし
たのです。そして彼は申しました。「その時貴女は膝をついて、『どうぞ私を捨てて下
さい。』と歎願することせう。」

十字架上に御死去遊ばしました愛すべきイエズス様に誓つて、私はそのやうなことは
ございません。

錠を下して助りましたのでございました！ 彼が入つて参ります處だつたのでございま
す！ ママは「お開け、お開けなさい！」とお囀鳴りになりましたので、私は叫び返し
まして「今出て参ります。」私はどのやうな工合にお床を出ましたか記憶がございません

でした。急いで手近の服をつけ、髪を無造作に束ね、イエズス様の御足に接吻致し乍ら御助力をお願ひ致しました。隣のお部屋に参りますと、ローレンセンは氷のやうに冷酷な嘲弄的態度で「昨日の騒で貴女はどのやうな経験をなさいましたか？」——私は強ひて冷笑ひ返しますやうに「有益な経験を致しました。」——私は何時の間にか彼と二人きりに取残されて了ひました。私の側においでママが急に消えて了ひになりました——彼は「どうぞお掛け下さい。随分衰弱しておいでなのやうですね。」私は足がだるくて力がございませんでしたので、仕方なく彼の言ふ通りに致しました。

彼は天鷲絨の小匣を掌に弄んでをりましたが、その中味は容易に想像致されました。

「それはさうと熟考なさつて下さいましたか？」

「別に熟考致す必要もございません。私の承諾は、貴方にとりましても、私にとりましても、不正を行ふことになります。」——「どうして私に？」

私はあからさまに「私は自分の嫌ひな人を良人に有つことは出来ません。」

彼は鋭い眼眸で私を見据ゑて「そのやうな事は意味がありません。それは單なる感傷

です。そのやうなことは直ぐ平氣になりますよ。」そして彼は悪魔のやうな爪を私の肩にのばして、

「そもそもこれが貴女の感謝の表露ですか？ 昨夜貴女に暴行を働いた遊冶郎や、貴女の顔を硫酸鹽で焼かうとした狂人から救つてあげた事をまさかお忘れになつたのではない

でせうね？」

「貴方の妻にさせられますよりも顔を硫酸鹽で焼かれました方がまだ優つてをります。

私には貴方の妻になりますこと以上の不倖はございませんのです！」

彼の嫌らしい手は猛禽の爪のやうに氣味悪く私の肩の上にございました。すると、彼は、

「さうでございませうとも、それは罪でございませう。」と私はすかさず申しました。

處が、彼は悪魔的な哄笑をして「貴女は罪を畏怖し、信心深いお嬢さんであると自任していらつしやいますが、然し、どうです、私は昨夜貴女が三人の男と同室してゐる様を目撃してゐます。如何に無邪氣な子供といへども、自分に迫つてゐる危険を承知出来ない程

無邪氣ではないものです。何しろ私は貴女がミラノ王ときやつ、きやつと戯けてゐる場
面に行き逢ひ、倫落の賣笑婦のやうに卑屈な行をしてゐる現場を見届けたのですよ。」

レブランド・メール、あの偽り者！ 私が拒絶致しましたものですから、あらぬ事を
捏造致してをりますのです。彼は私を救つたと申しながら、倫落の者などと矛盾したこ
とを申してをります。

私は口惜しさに打顛へながら「私にお觸りにならないで、出ていらつしやつて下さ
い。出鱈目も大抵になさいませ。そのやうなことを仰言れば私が屈服致しますとでもお
思ひになつていらつしやるのですか？」

「さうです、全くさう思つてゐますとも——貴女が承諾なさらない時にはどのやうな結
果になるか昨日はつきり斷つて置きました。私は決めた事は絶対に行ひます。貴女をミ
ラノ王の婢妾だと方々へ宣傳してやります。さうすれば、何處の神父も貴女の告解を聽
きはしないでせうし、友達の誰だつてそのやうな貴女と交際しなくなるに定つてゐます。」
レブランド・メール、彼はその驚のやうな爪を私の肩にかけながら、かう申しましたの

です。然し、私のイエズス様は間近にいらつしやいました。それは私のお部屋の大き
な十字架のことでございます。「貴方は御勝手に虚偽の宣傳をなさつて下さい。それは誰
のでもございませぬ、貴方御自身の罪になりますに過ぎませんから。若しも私が貴方を
嫌ひ乍ら良人に致したいと申せば、これは私の罪になります。そしてこゝから發生致す
二人の不幸は悉く私の過失となりませう。」その時彼は徐にその手を引き、私
のお部屋を覗いて見ました。「誰かゐるのですか？」——彼は私がイエズス様に投げか
けます視線に氣附いたのでした。「私の大切な傳記と遺物とをお焼きになりましたのは貴
方です！ さうでございませぬと致しましても、貴方のお勸でママがなさつたのです。然
し、今はもつと偉大なる友が見えて私のお部屋をお守護り下さいます。あの傑れたヨゼ
フ・ベネディクトのお仕へなさる御主イエズス・キリスト様その方でございます。」する
と、ローレンセンは一步退いて、「ハハア、成程、それは素敵な空想ですね。それはさう
と、私が貴女の悪口を言ひ損つた事を御存じではないでせう。と言ふ譯は地獄耳の新聞
が私も知らぬ間に書き立ててゐるのです。貴女は最早立派なミラノ王の婢妾として今

朝の新聞に載つてゐますよ。」

レブランド・メール、婢妾と云ふ言葉は『群盗』の中にもございました。そして學院でも幾度か聴きましたけれども、此の言葉には汚い意味がございます。結婚式なしに男と夫婦生活を致す女のごとでございます——「どの新聞に出てをりますのですか？」——彼は返事を致しませんでした。私は繰返して「どの新聞にでございますか、はつきり仰言れませんか、信じられません。」——「新維納日日の朝刊に——」ですから、温順しく私の言ふ通りになさつたら如何です？——さうなされば、貴女を誣告した者に私は謝罪させていただきます。」

「どのやうな事がございませうとも、私は貴方のものになりは致しません。さう言ふ貴方こそ世間のどのやうな偽り者よりも酷い方ではございませんか、新維納日日新聞社の者が何を知つてをりませう？ 貴方は總てを御承知の上でお誣ひになるではございませんか。」

彼は咄くやうに悪魔に似た齒ぎしりを致し乍ら「その通り、私はどのやうな事でも知

つてをりますとも——貴女など欲しくないので、約束は約束ですからね(!!!)今後私は貴女を許婚者として扱ひます、もう離しはしません。私は純潔な貴女を(前に倫落の賣笑婦!!!と申しましたのに)あの悪徳記者からどこまでも護ります。貴女の許婚者として、未來の良人として、私は貴女を保護致します。いや、保護すべきが私の當然の務です。少しお顔の色が勝れませんね、お息みなさい——今更貴女に承諾を頂くまでもなく、既定の事實なのですが、貴女の意志もありますから、公に発表するのは差控へて置ませう。公表は貴女の方からして頂きます。今日から算へて二週間目をその日と定めて置きます。それから舉式と言ふ段取りです——然し、それでも貴女が不承知の時には、結婚が嫌だと仰言つても、その時は私のものです。ミラノ王の出来なかつたことも私には可能なことを、尊敬する貴女の寢室の聖人に誓ひますよ。」

「お黙り下さい。悪事の誓などお止し遊ばせ。私は絶対に貴方の妻になりませんといエズ様にお誓ひ致してございます。神様は私の言葉をお聴きになつても、貴方の仰言る事などをお受納れになる道理はございません。」

頭を横に振つて私の言葉を否定してをりました彼を、無氣味な炎が包んでをりますかのやうな氣が致しました。「彼奴如きに何が出来ます。昔嘶のたゞの木像が！然し、此處に立つてゐる私には血も肉も通つてゐますよ。貴女は私を自發的か、強制的かの何れにせよ、兎に角愛するやうになりますよ。その時の貴女は膝をついて、私に指環を乞ふのです。では、お大事に、さよなら！」彼の「さよなら」は不幸の豫告のやうに、地獄からの叫び聲のやうに、私の耳朶に残されました。

彼は去つて行きました。

レブランド・メール、それから私はすつと起きてをります。何故か不安が漾つてをるのでございます。私は文机の方へものを頼りに近寄り、このお手紙を書き續けてをります。指さへ自由でございませぬ私が何故斯うも書き續けますのでせう？……私の唯一人の淨配なるイエズス様と共に貴女にも此の顛末を知つて頂く爲なのでございます。私は承諾を與へませんでした。再三、再四峻拒致しました。何度でも死ぬまで断ります。假令貴女のお耳にどのやうな噂が入りましても、決してお信じにならないで下さいませ。

レブランド・メール、もう一つのことだけ！この苦痛には到底永く耐へ切れませぬ！精神はどうにか持ち耐へましても、可弱い肉身は續きさうもございませぬ。私はもう弱り切つてをります。又、眩暈が致して参りまして激しく黒い雲が目の前に擴つてをります。

癒りますまで待ちましてから續けます。

呼鈴の音が響いてをります——お手紙を隠します。
追伸

イダさんでございました。まだ此方においでなのでございます。此のお手紙をお頼み出来ました。然し、心臓の動悸が激しくて長くは續けられませぬ。イダさんは新聞を持つて来て下さいましたのです。レブランド・メール、彼が申しました通り新聞に出てをりまするか、確めて下さいませ。私には讀む氣力がございませぬ。屹度彼の言葉は出鱈目でございませう。これが日日新聞の朝刊でございませぬ。レブランド・メール、婢妾と申す言葉などみつかりませぬ。此の記事をお送り致します。讀みたいのでございますが、紙面に活

字が踊り出すやうに見えますのです。然し、彼が私を恐怖させましたあの穢い言葉はみづかりません。

それでは、私のレブランド・メール、さやうなら。

お、私のお母様、私の誠意をお認め下さいませ。貴女に依つて私をイエズス様の御心に堅くお預け下さいませ。貴女の尊いお祈の鍵を以て、炎するイエズス様の聖心をお開きになつて私をお隠匿ひ下さいませ、堅く、堅く其の内にお閉塞し下さいませ。お、恐怖は無気味に私の齒をならします。「二週間の後、貴女は膝をついて——」との彼の宣言。私のお話の仕方は宛然で盗賊と詐欺師との中に居りますやうではございませんか。私は寢床に入りまして息むのが怖くなりました。彼は私をどうする心算なでございませう。聖ラブレが「貴女をお護りなさい。」と仰言いました時に、ママの御意中には何がございましたのでせう。ローレンセンが「膝をついて私に乞ふ。」とか、「強制的に愛する。」とか申しました言葉の中にはどう言ふ意圖が藏されてをるのでございませう？ ミラノ王は私に何をなさりたかつたのでございませう。私はまるで夢中でこ

さいます。此のやうな底知れぬ不安が私の身邊に薙き合つてをります。それにつけましても十箇月以前のことと同想ひ出されます。學院の私は貴女に愛され、慈まれました小鳩ちゃんでございましたのに！ 母様、貴女はかう私にお名付けになりました。

イダさんが催促なさいますから、これで止めます。お、何故か今日、貴女より私が引離されますかのやうな気が致しまして怕くてなりません。貴女に永久に、永久にさやうならを申してをりますやうな氣持が致しますのです——お！ また用箋に泪の汚點をつくつて了ひました。此の事も！ 御免下さい、取消します。

レブランド・メール、死を、死ぬことを神様にお願ひ致しましても宜しうございませうか？ 此の恐ろしい生活に耐へ切れません爲ではなく、彼等が私を何等かの非常手段でイエズス様から引離さうとする測り知れませんが恐怖が豫感されますからなのでございませう。我がイエズスよ！ 爾を捨てない爲には如何なる殘虐な死をも厭ひは致しません！ 卻つてそれこそ私にとつてこよなき甘美な望でございませう。たゞ私の親達に氣がかりでございませう。親でございませうもの、私は何處までも、何處までも、お二人をお愛し致しま

一六六
すーたどお二人がお氣の毒に思はれるのでございます。私は絶えずお二人の爲にお祈り致します！

リタ

測り知れぬ柔和と忍耐とを以て、愧づべき兩親に慈悲ある神の宥恕を乞ひ、哀しくもリタの手紙はこゝで途絶えてゐるのでした。

リタはこれ限り一行も認めなかつたのです。この手紙を披いて愕然とした母様は、心も裂かれる思で即刻リタを引寄せるべく「こちらへいらつしやい。直ぐいらつしやい。御兩親に對しては私が一切の責任を負ひます！」と書き送つたのでしたが——それに對する應答はなかつたのでした。焦燥と憂悶との裡に差出した同じ内容の第二の招待狀に對してもふつつり應答は斷たれて了つたのです。

三番目の手紙——

——それは、不吉の使者の如く返送されて來たのでした。然も、リタ自身の綺麗な、鮮

な筆蹟で（返送致します。）とあつたのです。

運命、

會ては激しく、幾度となく叩扉してリタは案内を乞ひましたのに、貴女は悠揚と鈍重にかまへてゐたのでした。今になつて貴女は疑懼の夜に懊惱してゐますが、リタは既に再び訪ひはしません。あの甘美なる聲は、絶えて了ひ、貴女に一言葉をも告げることはないでせう。

リタ、リタは既に貴女の子供ではないのです
扉の前に嘯が立止り、やがて扉を音もなく開けたのは若いシスターでした。

「お入りなさい！——あゝ、シスター・アロイジア？」
「母様、御彌撒が始りました。」

やをら立つたマティルデ母様には自ら備る床しい威嚴が匂うてをりましたが、その面は蒼白で、目は落窪み、唇は青く、宛然死面のやうに見えたのでした。

「エルラウの修院長様は未だお著きになりませんか？」と幾分切口上で尋ねたのです。

「未だでございます、母様。」

「客間は整うてをりますか？」

頷いてみせたシスター・アロイジアは突然半ば本能的に、然し、赤い羞らひをこぼし乍ら、優美な母様の手を自分の荒れた掌でとらうとしたのです。

「まあ、母様、昨夜は少しもお睡眠みにならなかつたのでございませう——」

「シスター、急ぎませう。御彌撒に遅れますから——」と母様は、うら若いシスターの純情を抑へたのでした。

シスター・アロイジアは静に部屋を出て行きました。

半開の祈禱部屋を通り抜けて、御聖堂から幽婉な聖歌の前奏が流れて來ました。そして此の世ならざる美しい天使に似た聲が、歌聲が立上るのでした。

「善き牧者なるイエズス

汝が羊の群を掩祝し給へ。」

汝の恩寵と世の幸とを乞ひ、

われ等御許に平伏し奉る………」

やがて靜肅に返るや、鈴が鳴り、ベネディクションに入つたのです。母様は祈禱部屋の戸口に跪いて十字を切つたのでした。

然し、何故となく神祕の力に心惹かれ、思ひ返して再び文机にとつて返し、リタの最後の手紙をとつて愁はし氣に接吻したのです。今日は聽罪司祭の指圖に従つてこの手紙の束を手離さなければならぬのでした。聖人の遺物でもないものですから、神父様は當然お焼き捨てにすることせう。

最後の手紙に同封された新聞の切抜を取り上げたのですが、疲勞に泪が眸を包み、ゆらゆらと眩暈がして來たのでした。

誰しも、新聞記者にしても、此の清純な少女の甘美なる愛嬌を誘ふことは出來なかつたのでした——此の清純なる子は——今日はもう——

お、わが神よ。

「……學生劇は意外の好成績であつた。然し、忌憚のない話が、我々の視聽は一人の婦人の上へのみ注がれてゐた——」

未だ少女の如く見え乍ら、宮殿劇場に於いてさへ觀たことのない、いや觀ることの不可能な程のアマリアを演じたのである。美しい容姿、純真なる愛嬌、世俗的な一切の汚濁の感染なき天使よ。シルレルの麗句は年齒十八歳の貴女に生かされて、甘美に、羞し氣に口誦まれたのだ。彼の女は稀に觀る美貌を備へながら、微塵も煽情的な處なく、又その服装に於いてもさうした作意のあとが全く見られなかつたのである。簡素な白い學生服は、彼の女の優美な、柔軟な姿態を清楚に包み、又、彼の女の金髪の光澤さを減殺する筈の黒いリボンは卻つて美しさを増してゐたのは奇妙だ。尙、彼の女が伏眼をする時の金色の睫は、そのつぶらな美しい碧玉の眸を匿すことなく、一層美しさを發揮したのも妙だ。若年いシルレルがこなし切れなかつた誇大な調子のアマリアの歌を、カトリック教の古い聖歌の節を借りて立派に巧に唱ひこなして了つたし、彼の女の無邪氣さと心からなると感じさ

せる信仰とは、空虚な響をもつ華麗な詩句に息吹を與へ、精神的に高揚したのである。甘美なる少女よ、貴女は最後の場面に於いて、疲勞の爲か、或ひは愛ましい羞恥からか、長い戀のうちあけを言ひ澀んで黙つて了りましたね。然し、此の無言の一時は、シルレルの最上の詩句よりも、それ以上に表現して餘韻を残してくれたのだ。此のアマリアの苦痛と死とは、シルレルの作中の總ての女性よりも空の星以上に傑出したものであつた。若しシルレルが英雄の幽界から彼の女を觀ることが出来たなら、何と讚歎したことであらう……：彼はワイマール市の記念碑から下り立つて、その青銅の月桂冠を彼の女の足許に捧げたことであらう。

アマリアを除く他の者に就いて言つてみれば、男優連は一人残らず此の甘美なる少女に魅了され、たゞ追従して行つたと云ふ外に言ふべき言葉はない。その少女の名はリタ・キルシュナーである。この名前を銘記して頂きたい！少女に氣を奪はれた一人は情熱に憑かれたやうに狂演して了ひ、一人は學生らしくどちつて了つた。然し、どれも咎め立ては出来ない、何故かと言へば、見物する我々も彼等の如く魅了され、陶醉してゐたからであ

る。

その夜は澤山の名士顯官の顔が見えてゐた。内務大臣、外務大臣、警視總監、大學教授、將校等、又外國の大使館員やウイン銀行總裁などずらりと揃つてゐた。政治、經濟、科學の諸機關は、甘美なる金髪の一少女の魅力に一夜無我の境に歡酔したのである！

幕が下されるや、或者は舞臺裏の神聖なる衣裳部屋に入つて圖々しく振舞つてゐた。我々の見知らぬ男が先に消え、それからこれ又全ウイン周知のバルカンのさる皇帝もその一人だつた。だが、此の名譽ある君子は、その夜の女王の許に短刀直入に突進して、果して君の幸福をとらへ得たであらうか？ 我々には到底そのやうな暴舉は出来ない。我々は瀆聖の罪を犯すことを恐れるからだ——おゝ、何より高き甘美なる薔薇よ、然し、何時の日か、皇帝を退けたとて、明日は剪り取られる花であらう！ かくして、創造の傑作よ、貴女は永久に失はれて行くのだ——斯く哀傷の自己を勞りつゝ我等は歸途に就いたのでつた。」

母様はこの切抜も卓子の上のリタの手紙に重ね、黒い被物を棚から出してそれを掩せたのです。

……自己を勞りつゝ、我等は歸途に就いた……
此の稀に觀る子を、温い母性愛を以て愛しんで來はしたが——此の純潔も今は早既に——おゝ、もう喪はれたのだ——あの執念の男に奪はれ——哀傷の自己を勞りつゝ歸途に就いたのでつた——

辿り著くやうに母様は祈禱部屋に入つたのです。シューベルトの美しい彌撒の聖歌は小さいロココ式の御聖堂に溢れ、悲しみの母様はその聖歌に浸されてゐたのでした。祈禱書から力無い眼を離して、母様は階下を見やつたのです。そこにはオルガちゃん、ネリーちゃん、エルザちゃん達が肉身をもつた天使のやうに藍色の制服もあどけなく、充ち満ちた聲で神様を讚美してゐるのでした。同じやうに、リタは、いゝえ、もつと可愛らしく、もつと天使らしかつたのでした。

總ては過去つて了つてゐる。

あどけなく聖歌を唱つてゐる子供達を眺めることは、いつも母様にはこよない心の慰であつたのですが、今日は、それが一種の苦痛なものでした。ですから、階下の見えない後方に身を退けて、黙想書に心を引入れようと努めたのです。「折しも羔シオン山に立ち給ひしに、羔を慕ひて十四萬四千の人々は従へり——彼等は何處にてもあれ、羔の行き給ふ處に従ひ——蓋し、彼等とは童貞者なりしなり。」——
イエズス様の愛された御弟子の御言葉も、今の母様には理由もなく腹立たしく嘲弄されてゐるかのやうに響くのでした。本を押しやり、頭を後へ投げかけて目をつむつたのでした。

リタ、リタよ！

もう一度——試みにもう一度、もう一度試みに手紙を——「リタ、我がリタよ、これだけでも、せめて知らせて下さい。貴女は教會に於いてでなく結婚——」

たまらない淋しさに、恐ろしさに、母様は顫へてゐたのでした。これは又どうした事か？——冷い風が階下から吹き上げて黙想書の頁を煽り、見れば祭臺の一本の蠟燭は吹き消さ

れたのです。

母様の手は釘付けられたやうに膝を掴んでゐたのでした。

突然響音が起つて、震動が傳つたのです。

それに母様の動悸は抑へられたのですが、次の瞬間その何ものかを知つたのです。その響音は外を疾走する自動車からでした。ほつと溜息を吐いて又ぎくつとしたのです。遠退いた音の音が非常に間近に湧き起り——どうやら自動車が修道院の玄關に入つて來たらしいのです——程なく呼鈴がけたましく響き渡つたのです。敗走する悪魔のやうな爆音の中から、重い蹻音が白い廣間を進んで來るのでした。

修院長様は顫へをのく膝を踏みしめ、自分の部屋にとつて返したのです。激しく應接間の戸が開けられる音がして噎れた男の聲に、シスター・アロイジアの遮るやうな言葉が混つて聞えたのです。「本當に、不可ません。今は御訪問のお時間ではございませんので、すから……それに母様は昨夜一睡もなさつていらつしやいませんです。」——

その折、應接間の闕に立つた修院長様の面は蒼白く、涙に浸された疲勞の現れた眼は赤

く腫れてゐたのでした。

すぐ二、三步前に立つてゐるのは手袋もない險惡な顔をした男でした。見憶もない？
母様の心臓は音をひそめました——

「貴女が修院長様ですか？——御無沙汰してをります。私のはあの——家内と子供とを連れて曾てお訪ねしたことがあります——それは一八九七年のことでした——私の子供は昨夜死にしました。」

「わがイエズスよ。」母様は聞き取り難い程の聲で言つたのです。

「シスター、一寸、院長様が危い！」と男は叫びました。

シスター・アロイジアは愕いて崩折れようとする母様を支へ、抱いてソファーへ——ソファーに身を置いた母様は死人の如く蒼白でした。

室内は息苦しく、深淵に突落されたやうでした。

部屋の扉は外から引かれ、色を失つた恐怖の眼が覗き込んだのです。

マテイルデ母様は半無我の裡に、その白い手で押し止め、「誰も入らないで、扉を閉めて

置いて下さる。」顔には色もなく、唇はわなわなと痙攣してゐたのですが、しきりに立上らうともがくのでした。

「私のリタよ！」と靜に唇をついて出た歎傷の言葉に、慎みを忘れたシスター・アロイジアは押しつぶすやうな啜泣を始めました。

「私のリタが死んだのですつて！」

父親は頭を垂れて立ち盡したまゝでした。

「どう——いふ——その事情は！」今は別の力で立上つた修院長のかすれた聲の中には凍とした命令するやうなひびきがありました。様々の惡虐が母様の眼前に、群なす鳥の如く蠢動するのでした。暴行、惡罵、殺傷……

「さうです。殺されたのです！」と彼は宛然母様の心を看て取つたかのやうに言つたのです。そして彼は狂人のやうに笑ひ出しました。「然し、儂ぢやない、苟も紳士の儂は血を流すやうな事はしない。彼奴だ！」彼は應接間の壁に懸けてある十字架へ、をのいてゐる指を向けたのです。「彼奴が、あの子の純潔な血を流し——十字架が私の子供

を殴き殺した。おー！」と吠えるやうに聲をあげて彼は自分の額を打つたのです。「幾度となくあの子は僕達にさう言つてゐました——あの極道者よりも、死ぬ方がい——それを十字架の彼奴が聴きこんでゐて、あの子を……賣り渡して……了はうとした刹那……あの子を打殺し、攫つて行つたのです。」

マティルデ母様は眩暈で揺ぐ額を両手でしめつけるやうにしながら、

「天なるいと正義なる神よ、おー、両親の貴方がたが何をなさつたと仰言るのです！

神様が貴方がたにお委ねになつた尊い任務を——」

「さうです。さうです、両親は尊いものです。止して下さい！」そして彼は新に厭らしい笑を洩して、「獅子や虎が子を生み、毒草でさへ實を結ぶのは即ち自然法です！」

「あの天使の母親は悪魔で、父親は良心の代りに石を詰めて置いたのです。悉く造化の戯だつたのです——たゞ尊いのは、死ぬまで僕達が押潰し、踏み潰さうとしたあの子の純潔です！」彼は地獄の炎のやうに燃え猛つてゐるその眼眸を、死ぬ程の驚愕に墮つてゐる母様の眼に射込んだのです。「貴女が知りたいと言ふのなら、先づ僕達の悪事を聴く

がい——あの年寄、あの残忍な毒婦の父親が死んで、その遺産が金貨壹千百萬圓だつた——あの子が相續したんです。子供のものは僕達のもの、此の泥坊の論法は分るでせう？然し、親族共はこの盗品を黙つてはゐなかつた。年寄が既にまうくしてゐたからなんです。さあ、そこで證人が必要になつた。彼は、彼奴は僕の子に八箇月も影のやうに付纏つた擧句、證言すると言ふのです。そして彼奴は年寄の健全さを法廷で證明すると言つたのです。處が、それに對する僕達の報酬條件は……その履行を遂巡してゐると……彼奴は……破廉恥な祕密を暴露すると威嚇にかゝつたんです。それを詳しくお聴せするには貴女は餘りにも尊嚴です。僕の子も此等を諒解するには尊過ぎました。然し、あの因業婆は自殺するかのやうに見せかけて……可哀さうな子供には一人の味方もなく捨てられ、裏切られ、賣り渡された可哀さうなあの子、あー、さうでした。もう一つあります。これは貴女の爲です。それで伺つたのです。」恐愕に鳥肌立つてゐる母様に、男の鋭い眼がいきなり頬笑みかけたのです。彼は内ポケットから揉み苦茶にした用箋を出して、机の上で丁寧に皺をのばすのでした。「あの子はこれを貴女に苦痛の頂點に於いて書き残したので

す。儂達は學院との文通を断ちましたが、家内は娘を巧に欺いたのです、「お前からも出さず、學院からの手紙を返送しなへすれば、私達はお前の結婚を一年間猶豫してあげるよ。」と。あの子は結婚と言へば病的に怖れてゐたものですから、溺れる者が藁も掴む氣持で——貴女に書かなかつたのでした——最後の身動きの出来なくなつた究極まで……儂の家内、あの貪婪な奴は最期のこの手紙をさへもぎとつたのです——「おゝ！」今は彼さへこみ上げて来る嗚咽を抑へかねて、その言葉はおろおろとして戦いてゐたのです。「儂の子は死んで了つた！——これがその手紙です！——では、歸ります。」

視力を奪ふやうに母様の網膜の上を黒い雲が漾ひより、激しく慄へる手でその用箋を受取つたのです。「貴女の手許で暮した時が、儂のあの子にとつて一番倅な日日でありました。それだけがあの子の唯一の幸福のやうでした。感謝致します。」

マティルデ母様の胸にどよめいてゐたものはいつか音をひそめ、霧の中に見るやうな、もまれたリタの筆蹟を泪と俱に哀しく啜泣しながら唇にもつて行つたのです。

「リタ、許して……貴女を苦しめた總ての人を許してお上げなさい……天使さながらの

貴女を、天使の如く認め得なかつた人達を……リタ……私をも……許して下さい。」

歸らうとして彼は又立止り、墓の中からのやうな聲で、

「そのやうに歎かないで下さい。儂の子は逝つて了りました。いくら貴女の聲でももうとどかない。誰も許されたとしても、儂と家内とは宥されぬ。——娘にあの極

道者を自分の部屋に招かされたのです……ひとりきりで、指環を彼奴に贈らせたのです……これはあの子も果したのです、彼奴を見た時篋めてゐましたから。そして彼の指環を受けさせたのです……その他の事は神様がいらつしやるとすれば、御存じです……儂にはあの時の娘の恐しい絶叫が今も耳朶から消え失せない……「御は恐しい面貌をしてそつと親ふやうに聴耳を立てたかと思ふと「分らない！分らない！死を思はせた悲痛なあの子の叫び聲……必死に拒みつゝ——それを儂達は——素知らぬ振をしてゐたのだつた。彼奴が卑しく娘に迫つたので——娘は危機を避けるべく十字架にすがりついたのでせう——あゝ、院長様、大丈夫ですか——娘は死に抱かれながらも飽く迄抗議しつづけ、最期の言葉として、『彼のものでありません。私はイエズス様の花嫁です。』と言ひ残して逝つ

たのでした。」マティルデ母様は心の苦悶を戦き顔へる白い手に波打たせてゐました。「お、我が神よ、可哀さうな踏み砕かれた清らけき子よ！」

「子供ではありません」と遮つた彼の姿は凜然と立直つてゐたのです。或力で死せる愛子の輝ける面影を追ふかの如く、天に向つてその瞳は燃えてゐました。

「子供と云はないで下さい！ 小聖雄と呼んで下さい！ 父の私からさう明言致しません、聖い英雄でした。戦場で銃と洋剣とを執る兵隊などとは比較になりません。八箇月の間あの子は獨りで闘つて負けなかつたのです。儂達はあの子に奴隸的生活を強制したのですが、リタは、勝利を得た戦士として凱旋して行きました。」

「朝も早くから近所の知人はあの子のもとを訪うてくれてゐます……そこにリタは……さながらルルドのマドンナの如く……その臥床に眠つてゐるのです！ 誰もあの子の爲に涙を流して……さやう、それから、家の地階で、門番の息子は、あの子の爲に自殺してゐました……あれも娘を愛してゐたのです……神様は娘を愛した人々はお許しでせうけれども、虐待した者は決して用捨なさらぬこととせう！ あの理想的な母親は到頭氣が觸れ

てしまひました。儂がサナトリウムに連れて行く途中、人々は自動車に投石する有様でした。私刑は大抵盲目的なものです、此の度だけは眞實に向けられたのです。」亂れかゝる髪を拂つた時、彼の額には生々しい血の滲みが見られました。「これは自分の子供を殺した者のカインの印です！」彼は喘へぎながら絶望に突當つたかのやうに口を噤んだのでした。そしてやゝ落著を取戻して、

「では、これで用も済みました。でも、まだ儂には一つの心残があります……貴女は御存じか、いや、御存じない筈です。儂は國際秘密結社の一員です。可哀さうにリタちゃんはその爲随分苦しんでをりました。今待たせてある自動車でプレスブルヒ市に行つて、結社から脱退致します！ そして、ダニューヴ河の畔に或事に適當な場所を知つてゐます。」

「まあ、何をなさるお心算ですか!?」驚愕して阻止するやうに母様は手を挙げました。

「ふん、貴女は儂の娘を漬さうとしたあの悪魔が生きてゐてよいと思ひですか?」

「みると……もの凄いな程白み返つた彼の面を激しく神経が脈打つてゐるのでした。」儂

に彼奴を面罵し、譴罰することが出来たら、お前の責任だぞ！ と叱咤出来れば——

——娘を殺したのはお前だ！ と言へたその時こそ、あゝ、儂はどれほど嬉しいだらう、此の手で、儂は、彼奴の咽喉を絞め、千切つてやる。けれども、彼よりも酷い奴は——此の儂だ！ あの子は彼奴の血縁ではない！ 彼奴はあの子の日に夜を繼いだ苦悶を知つてはゐなかつたのだ——」憫むべき父親は手負の動物のやうに吼え立てるのでした。「儂のやうに見てはゐなかつた！ こゝに——」そして彼はそつとポケットを撫でて觸れてみるのでした。「安全器を外した儂の拳銃がある。聞えますか、自動車の待ち焦れてゐるエンジンの音を！ 儂は愛しい娘を黄金の神に生贄にした。だが、今日はその復讐の日だ！」母様は慄然とし乍らも、憫情を以て聲を上げまして、「貴方への私のお願です！ リタさんは復讐を望んでゐません。どのやうな事がございましたも、リタさんは貴方を愛してをりました。貴方とそして憫むべき——」

「お黙りなさい。儂達は悪黨だ、假令娘が何と言はうとも。然し、儂達が悪魔であればある程、あの子はまことに氣高い美しい天使だつた。」

母様は一言一言に力を罩めて「リタさんの死を無爲になさらないで下さい。貴方は永遠に最愛の御子様から隔離てられることをお望みですか？」身を翻して母様は自分の部屋に戻り、手紙の黒い蔽を取除け、リタの最後の手紙を持つて取つて返し、顛へ乍ら書かれた優しい文面を父親に示したのでした。

「御覽下さい、リタさんの最後の言葉を。『——たゞお二人がお氣の毒に思はれるのでございます。私は絶えずお二人の爲にお祈り致します！——』貴方は此の純真な子供のお祈禱を無爲になさらうと思ひなのですか？」

「——祈ります……」在りし日リタが愛らしいつぶらな瞳で愛撫した黒い小鳥籠に額をつけ、彼は吃りながら聲を擧げて「リタが祈つてくれる。」と呻いたのでした。

「だが、リタ、儂はこの殺害の重荷を負はされて、これ以上生きて行く望があるだらうか！ リタ、リタ、もう儂にはそれ程の氣力が無い！ 然し、リタ、それがお前の心だと言ふのなら、儂は生きてゐなければ不可ない。それにしてもお前の神様に依つて假借なく儂を罰してくれ。(母様に笑ひ乍らも刺すやうな恐しい眼を向けて) 國際秘密結社はそ

の秘密の漏洩者を巧な方法で罰する習慣があります……儂は詳しい事は知りませんが……然し、国際秘密結社の團長の甥である彼が、儂の可哀さうな娘を間接に殺した事を知つてゐます——これを方々に言つてやる……儂の可哀さうな、可哀さうな殺された子供が信じた通り、神様が實在するのなら、此の儂儂を放つては置かないでせう——」

外には急ぎ立てるやうに自動車のエンジンがかけられ放しでした。彼は簡単に母様に叩頭をして去つて行きました。彼の面貌は死者の如く黯く、蒼白く淀んでゐました。母様は何か言ひたい衝動に驅られながらも、一言も咽喉を出なかつたのでした。たゞ立去る後姿を凝乎と瞞め——言ひ知れぬ恐怖につままれたのでした。彼は去つて行きました——何處へ？——幸なる天使の妹なるリタよ、貴女は總ての罪人の爲に涙を流しました。神様の御前に貴女のお父様をおとりなさない！——そして母様は、永久に歸らぬ愛子の爲に苦しみを新にしながらも、深い吐息の底から清い悦の感情が湧き出てくるのを感じたのです。香高い純潔は侵されることなく、白百合は遂に手折られずに済んだのです。リタは天使の如く高らかに彼等の集に歸つて行つたのでした。最も怖しい暗澹たる苦しみ

のさ中を彷徨ふその父親によつて齎されたおとづれば、母様の傷ついた心に薔薇と白百合との美しい花を降瀧いだのです。

マテイルデ母様はよろめくやうに祈禱部屋に入りました。御彌撒は最早終つてゐたのです。リタの永訣の手紙を顫へる手に確固と母様は握つてゐたのです。この哀な手紙を、悍婦の如き母親は死の苦しみに悶へてゐる子供の手からもぎとつたとは。母様は御聖堂に来て、臨終の際に悲痛なる助力を求むる聲、追ひ詰められた犠牲の絶叫聲を讀んだのです。

「私のお母様！ 總ては私の上に下されます——あの人等は約束を守りません！ 否應なく私は彼と結婚させられます！ 此の手紙が貴女の御許に届く頃には私も亦貴女の處へ参る途中でございませう——でも、どのやうにして、何時抜け出られませうか分らないのでございます——たゞ私はこれ以上忍べません。イエズス様が私をお呼びでございます。何事もお許し下さい、永いこれ迄の音信不通をお許し下さいませ——お、私をまた貴女の優しい子供達のお仲間に入れて下さいませ——イエズス様はしきりと私